



第67号

〒105-0001 東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電 話 03(3432)1090
F A X 03(3432)5567

編集人 田 中 賢 一
発行人 栗 原 宏



第二十七回
特攻隊合同慰霊祭

平成十八年三月三十日

靖 國 神 社

参列者

来 賓 三 七 名

遺 族 四 四 名

会 員 一 八 七 名

献 吟

吟 石橋 一歌
笛 逢坂 龍信

勤皇隊 増田 良次

十九年十二月七日

レイテオルモック湾で戦死

大君の御勅かしこみ征きに征く

敵戦艦の見事真中に

多聞隊 川尻 勉

二十年七月二十九日

沖縄海域で戦死

気は澄みて心のどけき今朝の空

散りゆく身とはさらに思わず

目 次

特攻隊合同慰霊祭	1
特攻御祭神に捧げる詩	3
特攻隊員とその母	4
靖国特攻御祭神の御心	7
特攻隊員の遺詠	11
戦友愛は軍馬にまで及ぶ	13
桜花に懐う	13
靖国神社奉納劇「流れる雲よ」	14
皇室の伝統を守る一万人大会	16
陸軍空挺戦史にみる特攻精神	18
海軍落下傘部隊一代記	23
中国を読む	28
海軍終局期の特攻作戦	32
北欧に果つ	36
安田義人さんを偲ぶ	40
世田谷観音寺の文化財紹介	42
徳川・日野両大尉胸像碑板修復	44
比島慰霊旅行に参加して	45
和漢の詩歌に見る国柄	46
〔慰霊祭〕都城51、万世53、枕崎と鹿屋54、予科練55、震洋55	46
図書紹介、CDの紹介	56
お知らせとお願ひ	57
寄付者御芳名	58
平成十七年度事業報告	59
収支計算書	60

第27回合同慰霊祭

祭 文

本日靖国神社の御前に、遺族、戦友、関係者相集い、第二十七回陸海軍特攻隊合同慰霊祭を開催するに当り、謹んで在天の特攻烈士の御霊に申し上げます。

終戦六十年に当る昨年、協会は慰霊団を結成して、十月二十五日のフィリピン・ルソン島・マバラカット・クラーク両市主催の、神風特攻隊発進六十一周年慰霊祭・第八回世界平和都市宣言記念祭に参列致しました。

東マバラカット飛行場跡に現地有志の方々が、私財を投じて昭和四十九年に建てて下さった慰霊碑は、平成三年のピナツボ火山の噴火により、三米に達する火山灰に埋没してしまいました。その上にマバラカット市当局の手で、平成十三年に第二次碑が再建されて今日に亘っております。

誠に感謝に堪えないところでありますが、この事が広く我が国内で知られていないことは、極めて遺憾に存じます。協会としては、今後共慰霊祭に参加をして行きたいと考えておりますが、その為には若い会員が増える必要があり、又その事が慰霊顕彰の心を継承して行くこと云う、差し迫った協会の目的を達成する為の重要な一環となることは、疑う余地がありません。

翻って、最近明らかになった耐震設計偽造や、ライブドア等の事件に象徴される様な、

今迄は考えられなかった社会活動の基盤部分に亀裂が入った、と思わざるを得ない不祥事が世の注目を浴びました。女子高校生が母親に毒物を飲ませ続けたという報道も、私共の耳目を疑わせました。

この様に倫理・道徳観の喪失、公に対する責任感が麻痺したと考へざるを得ない社会現象は、高度成長に酔い痴れて知らず知らずの裡に拝金思想に毒され、引き続く十年余のバブル時代に、更に精神頹廢の病巣が体の隅々まで浸潤したことを示すものであります。

一方、国として我が国古来の文化、伝統を軽んじ、米国の言いなりに甘んじて社会制度の改革に走り、中韓両国の不当な干渉に毅然として対することなく叩頭を続け、領土問題では足許を見すかされて為す術もなく等々、独立国家として見るに堪えぬ卑屈な態度に終始しております。

東京裁判史観からの脱却なくして、憲法以下諸法規の全うな改正は為し得ません。私共は粉骨碎身、狂瀾を既倒に廻らすべく日夜努力を続けております。

在天の諸霊、何卒私共を御照覧賜り尚一層の御加護を賜ります様に、心からお願ひ申し上げます。

平成十八年三月三十日

財団法人 特攻隊戦没者

慰霊平和祈念協会

会長 山本 卓眞

楫

桜花は散り際を愛ず 靖国の桜眺むる人士
特攻烈士の散華を懐う者幾許かある 烈士逝
きて還暦を過ぎぬ 世は泰平を謳歌し 衆生
花見酒に酔ふ 泉敵神州に迫るや蹶然起つて
醜虜に衝りしをのこ 比所に神鎮まるに
思ふに欣然として死地に赴きしは 後に続く
者在るを信ずればなり 然るに何んぞ 精神
の荒廢今やその極にありて 金権万能の弊風
滔々として世を覆ひ 鮑魚の臭見るに堪へづ
特攻烈士の精神弊履と化す 神前に低頭し我
ら何んと忘へんや

靖国を外交の具となす隣国ありて 友好に名
を借り これに組する要路の徒輩あり 不俱
戴天と言はざるべからづ 民族存立の根底を
靖国に置かづして 如何に杜稷を全ふするを
得んや

特攻烈士と身近かにありし我ら既に頽齡 壮
年の客氣失ふに至りしも 比所神前に額突け
ば 吾人に告ぐる神託を覚ゆ 吾斎白髪を染
め 棹尾の勇を振ひ 特攻精神を世に顕彰せん

平成丙戌弥生

特攻戦没者慰霊協会

特攻御祭神に捧げる詩

(航空特攻)

一、今度会うのは靖国と

語りしところ雲はるか

澄み透りたる眼差しは

炎となりて 砕けたり

二、宮居に響く 拍手は

み魂を呼ぶかほの暗き

灯かすかにまたたきて

三、萌ゆるが如き春草の

君が面影 変わらねど

老醜の身は 秋たけて

六十余年の ゆめ遠し

(水上・水中特攻)

人生 僅か 五十年

その半ばにも充たずとも

見果てぬ夢に悔ゆるなし

余すいのちはたらちねに

献上すると 遺書の文字

世界戦史に たぐいなき

万古にかおる 大和魂

回天 ㊦ 震洋と

と首もて心胆刺すがごと

鬼神 たじろぐ 必殺行

(空挺特攻)

義烈空挺隊員の遺詠

奥山に名もなき花と咲きたれど

散りてこの世に香りとどめん

今村美好曹長

よしや身は千々に散るとも来る春に

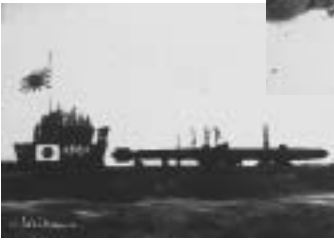
また咲きいでん靖国の宮

関 三郎軍曹

待つありて眺むる月の涼しさよ

新妻幸雄少尉

三、お国の為ということの
絶えて久しき戦後史に
既倒に廻らすこの祭り
老兵の正気なお存す



読谷飛行場跡に立ちて

この辺境に 散りしをのこら

狂乱を 既倒に廻らさんの心

燃えさかる 梟敵の とりで

路傍の小石よ 汝は 見しか

かつての叫喚 阿修羅の怒号

語り聞かせよ いくさ神の姿

〔朗読劇〕

特攻隊員とその母

支那三国志の時代蜀の丞相諸葛孔明が漢中に出陣するとき、後主劉禪に奉った「出師の表」は忠誠心溢れ「出師ノ表を読んで涙を墜さざる者は、その人必ず不忠なり」と後の人が申したと伝えられています。

さてここに「特攻隊員とその母」という一文があります。これを読んで感動しない者は、日本人にあらずと言つて憚らないと私は思っています。

大石政則少尉は東京帝大在学中に学徒動員で海軍飛行予備学生となり任官し、八幡神忠隊の一員となり20年4月28日串良飛行場発進、沖縄近海で敵艦に突入散華しましたが、母親宛の遺書の一節に「たとえ途中で墜されることがあつても、二十代の若武者が次から次へと特攻攻撃を連続し、ますらをの命をつみ重ねつみ重ねして、大和島根を守りぬくことができれば幸ではありませんか」と言っています。

これに対し母トクさんは、多分戦死の公報を受けてからでしょうが、次のように詠っています。
はろばろと来し方願れば天かけし
白マフラーの子の笑顔顔つ

更に大石少尉は次の歌も残しています。もろもろの装ひつけて国のため

前の遺書と言ひ、この遺詠と言ひ、特攻隊員の心情は、読者の胸にひしひしと迫るものがあります。母トクさんの手記も残っていますが、それはこの物語の最後に申しましよう。

緒方襄中尉は海軍飛行予備学生13期22才、第1神雷部隊の桜花と呼ばれたロケット推進体当り機の搭乗員でした。第1神雷部隊は、20年3月21日鹿屋を

発進したのですが、グラマン多数の要撃を受け、一式陸攻は桜花を発進させる前に全部撃墜されてしまいました。息子から特攻隊志願を打あけられた母三和代さんは、今生の別れに我が子の任地に赴きました。

うつし世のみじかきえにし母と子が
今宵一夜を 語りあかしぬ
これがそのときの和歌であります。そして帰宅後息子がひそかに母の鞆に入れておいた和歌。

いざさらば我は御国の山桜
母の身に かけり咲かなむ
を発見しました。その時三和代さんは、
散る花のいさぎよさをば愛てつつも
母の心は 悲しかりけり

と詠っています。親子の情まことに身にしみるものがあります。

以下特攻隊員の出撃にあたり母を憶う気持ちのじみ出た歌、いくつかを紹介しましよう。

石川誠三中尉は海兵72期22才、人間魚雷回天の搭乗員、伊号58潜水艦で19年12月30日大津島出港、20年1月12日グアム島アラ港に対し回天発進、港内に突入し目的を達成したものと認められます。

思はじと思えどとかく思い出づ
故郷の母よ 健やかにおわしませ
と書き残しています。

鷲尾克己少尉は学徒出身の特操2期22才、第55振武隊、20年5月11日知覧発沖繩に向かいました。

告げもせて帰る戎衣の我が肩に
もろ手をかけて 笑ます母かも
小林敏男少尉は幹候8期23才、誠第37飛行隊、20年4月6日新田原発沖繩に向きました。

死出の旅と知りても母は笑顔にて
送りてくれぬ 我くにを去るの日
広き広きホームに立ちて見送るは
母と妹と 共に二人のみ

中田茂少尉は陸士57期21才、第45振武隊、20年5月28日知覧を發ち沖繩に向きました。

ふるさとに散るとも知らず我を待つ
老いたる母に 如何に告げなん
ふるさとに髪を残してこの心
わが父母に それと告げたり

村上弘大尉は海兵70期24才 神風特別攻撃隊第2御楯隊、20年2月20日香取基地を發ち硫黄島近海の敵艦に突入しました。

母上の御手の霜焼けいかならんと
見上げる空に 春の動ける

井樋太郎少尉は陸士57期21才、石腸隊、19年12月12日ネグロス島バゴロド発、レイテ島バイバイ沖の敵艦に突入しました。井樋少尉は生い立ちから出撃直前迄を流麗な七五調の長詩をもって綴っていますが、七句十九節より成る長詩のうち、父母を懐う情の籠っている一節を紹介します。

父の病の篤きとき
姉と詣てし不動尊
幼き四人の集まりて
母に贈りしゴム手袋
ああ我がなきあとも同胞は
一つ心に結ばれて
変るなかれと祈るかな

特攻隊員の母を懐う詩歌は、ほかに
も沢山伝えられています。が割愛し、次
は衷情迫る母の手記二篇を読み上げ
みましょう。

第50振武隊多々良政行少尉（特操1 期）の母の手記。

昭和二十年五月二十日午後七時十分
「ワレットニウス」

の無電を限りにあの子は身につけたも
のの一片さへ残さず愛機もろ共沖繩中
城湾の上空から戦艦に突入したのです。
その事実を事実としてうべなう心の底
から、まだ何処かにあの子は居るよう
で、一千里、二千里、地球の果てまで
でもたづね求めたならばあの時のまま
の姿が見られるようでこの五年間をあ
の子の死の実感がしつかりつかまねぬ
ままに過して来ました。

「皇国を守る者は自分達である」。
とかたく信じてあんなにも当然のこ
とのように若い生命も、胸一杯の希望
も絶ちがたい肉親への愛情もすべて
きづなをふりきって、あんなにもほが
らかに征つたものを母の私がなぜ涙を
見せられましょう。あの子の心を心と
して

「此の度の御奉公こそこの世に生ま
れて来た政行の使命であったのだ」
と励ましたものです。

火にも水にも母はいましと共にあ
り心おくれず征けよ我が子よこの
時ぞ命捧げて死ねと言ひし母の心
の深きかなしみ

歌を書き添えた日々の便りに私はあ
の子の覚悟をたたえこそすれ母の心の
悲しみは露ほども知らせたくなかつた
のです。

あの子の死がこんなにも惨めな結果
になった今でも

「あの子はあれでよかつたのだ。信
じた道を信じるままに進んだのだから
あれでいいのだ」

と亡き子への悲しい愛情の中からも
私は私一人の心の中であの子がえらん
だ死を恨む気にはなれませんでした。
あれから五年思っても見なかった種々
の世相を見て来た今でもそうです。

大いなる喜びが我に來たるともこ
の悲しみの消ゆる時なし。現身に
これが最後と床二つ並べて汝とい
寝し思出

小学校かち中学校更に専門学校とな
がい学生生活に終止符を打つと直ぐに
自分から進んで飛行将校への道を選び
特別操縦見習士官として家を出る頃に
はずであの子には戦の重大さがよく
わかつていて自分自身が行くべき道も
ちゃんと覚悟が出来ていたのです。

おろかな母はそんなことには少しも

気づかないで二十一年の子と十九の
次男と二人を軍人として同じ日に送り
出すことに有頂天になっていました。

大君の御盾とならん男の子二人も
もちて軍国の母となりたり

愈々家を出る前夜何気ない様子でい
つも私に話しかける調子で

「お母ちゃん人間死をどう思う？」
とききました。その言葉の中に何と
なく真剣さを感じて私が平素から死と
いうものに対してもっている信念をそ
のまま答えました。

「僕と全く同じ考えだ、これで安心
して行かれる、お母ちゃんは大した哲
学者だハハ……」

と大きく笑いましたが
「自分が死んでも母は決して取り乱
してなげくような事はないから安心し
て征かれる」

と後になって其時のことを戦友の一
人に話したと聞いて生きてかえらぬ覚
悟で家を出た深い決意を知りました。
残して行った日記の一節に

「祖国のある限り個人の死はない生
きる為に死んでゆく……」高き精神
崇高なる現実我にこの意気あり諦観
にあらず宗教に非ず空虚なる議論の
結果に非ずしかめっ面な思索の結果
に非ず只斯の崇高なる精神により近
づかんとする現実の精神なり」

と

死の高さまで自分を高める為にとれ
だけあの子は苦しみなやんだ事か、現
実のすべての欲望からぬけ切つた心境
に至るまでのあの子の苦悩を思う時私
は涙なしではいられません。

(以下略)

八幡神忠隊大石政則少尉の母の手記 (途中から)

丁度その折、娘、禎子の夫、竹内大
尉が朝鮮光州航空隊から諫早航空隊に
転勤になり、夫妻で私の家に立寄つて
おりましたので、

「政則ちゃん、あなたの居場所がわかっ
たのでちょっと竹内夫妻に会つて来て、
直ぐに戻りますからね」と、
出撃の気配を感じなかつた私はうっ
かり申しました。

政則はそうしなさいと言つように黙つ
て深く肯きました。
私は後に知つたのでございますが、
竹内大尉は特攻隊長を命ぜられてお
りました。

同じ海軍軍人であつた政則は早々と
こうなることを予想していたのでござ
いましょうか、自分の妹に軍人の妻と
しての万一の時の心がまえをその遺書
となりました日記にも書き記してござ
いました。

妹思ひの政則は娘が私と久々の対面

をどれほどか楽しみにしているかを心の底で思っていたのでございます。

それが「お母さん、行ってらっしゃい」との無言の返事だったのです。

そのとき、政則は自分が「明日、出撃」と知っていた筈ですが、私には一言もそのことを申しませんでした。

おそらく、自分と両親との別れの悲しさよりも自分の妹が親に会う喜びの方を考えていたのでございましょう。

その朝、私達は前の日と同じように旅館の玄関へ隊に向かう政則を見送りに出ました。

外は霧雨でした。
「お母さん、雨が降っているから此所まででいいよ」

道まで出ようとする私達を政則は手で押えるようにして言いました。

「お母さんはまた直ぐここに戻って来ますからね」

これが私が息子にかけた最後の言葉になりました。

そのとき、「お母さん、明日は出撃です」と一言洩らして呉れば私は何

事を措いてもそれを見送るまでいたのでございますが、息子は私の嘆き悲しむことを心配し、また、妹を飲ばせて上げたいとだけ考えていたのでございましょう。

旅館の前の道を真っ直ぐに歩いた政

則は曲り角に着いたとき、初めて私達の方を振り返り、煙るような雨のなかで長い長い拳手の礼をいたしました。軍服の肩に雨が粒になって光っているのが私の目に映りました。

これが私達が息子、政則を見た最後の姿でした。

「神風特別攻撃隊八幡神忠隊、昭和二十年四月二十八日、沖繩周辺ノ敵艦船群ニ体当リ攻撃ヲ決行ス」

息子、大石政則海軍大尉の戦死は海軍布告にこのように記されており

今日の世界中の国々が目を見張るほど榮えております。その日本のなかで政則と同期の生き残られた方々は立派な社会的地位を得られて国の繁栄を支えて下さいますが、ことあるご

とに「戦死した僕等の仲間が叱咤激励して僕達を日本の復興にふるい立たせたのである」と申して下さいのを聞き、私は息子の戦死は決して無駄ではなかつたのだと思ひ直しております。

生き残られた皆様は私も遺族に温かいお心遣いをなさって下さり、毎年、懇ろな慰霊祭を行って下さることに英霊達はどれほどか喜んでることかと遺族として感謝申しあげております。

その方々も私が九十六歳を迎えますと同時にひとり残らず還暦を迎えられま

した。「益々お達者で国のためにお働らき下さい、国のために散って逝きました息子をはじめ、沢山の戦死された方々がそれを願っておるのです。」と、この老いの口から申し上げ、おねがいをいたします。

私もまだまだ永生きをして折あるごとに息子の想い出話をつづけようございます。皆様、私の長い想い出ばなしにおつきあい下さいまして、ほんとうに有難うございました。

はろばろと 来し方願れば 天かけし
白マフラーの 子の笑顔顯つ

九十六歳の誕生日を迎えて
大石トク 平成二年二月 佳日

以上読み上げた通り母、あるいは肉親と戦没特攻隊員との間の綿々たる愛情には、涙を禁じ得ないものがあります。然し、そこにあるのは悲しみや深い愛情だけではありません。お国の為という一本の太い筋が通っているのを見逃してはなりません。20年6月22日都城東飛行場を発つて沖繩に向った第27振部隊隊長原田菜少尉は書き残しています。『征くものは気易い、残るもの

の心情にはホトトギスの慟哭がある——この部隊が幾度か出撃の機会を失ったことを言うのでありましよう——情

は涙である、そして愛は切ない、されど忠はさらに至上だ、祖国よ永久に幸あれ、幸あれ」と認めています。

さて、これら戦没者の御霊はすべて靖国神社に神鎮まられます。19年10月26日フィリピンスリガオ海峡洋上に散華した神風特攻大和隊の植村真少尉は愛児に書き残しました。『お前が大きくなって父に会いたいときは、九段へいらっしゃい。そして心に深く念

ずれば必ずお父様の顔がお前の心の中に浮かびますよ』と申しております。

また、19年12月5日同じくスリガオ海峡洋上に散華した一字隊天野三郎少尉の妹天野和子さんは、

靖国の社に向かい合掌す
レイテの島に散りし兄見ゆと詠っています。

特攻隊員は、後に続く者あるを信じて征かれました。今の世でそれに応えるのは、特攻の史実と精神を広く末永く伝えることにあると思ひます。

特攻は統帥の邪道であります。しかし特攻の史実とその精神は、日本民族のかけがえのない宝であります。

祖国、民族、同胞のため命を投出した特攻隊員の精神の、何分の一でも今の社会にあったならば、聞くに堪えないような事件は起きないでしょう。

靖国特攻御祭神の御心

英霊の靖国神社に対する思いがどのようなものであったかを偲ぶため、ここに特攻隊員の遺書遺詠や日記の幾つかを掲げてみる。書残されたものは特攻隊員に限ったことではないが、死を目前に見詰めた者の言葉がより真実であったと思う。人の将に死なんとするや其の言や善し(論語泰伯篇)というが、そこには何の虚飾も誇張もない。

陸軍軍曹 瀬谷隆茂

仙台航空機乗員養成所出身 20才
第四三三振武隊

20年5月26日 万世出撃沖繩へ

御両親様

御元氣にて食糧増産に専念の事と存じます。隆茂御蔭様にて愈々元氣相成明日は愈々出撃する予定です。ここは我等の最後の基地九州川辺郡の知覧です。内地の山や川、田や畠何一つとして懐しいものばかりです。

此れらの山や川を見るにつけ家を出た時の事があれやこれやと走馬燈の如く思ひ出されます。一度思ひを戦局に馳せば何が何んでも我々の行かねばならぬ秋あきです。

皇国に生を享け、皇国護持の為に清く散る若桜、何と嬉しい現在の心境でせう。血湧き肉躍る、日本男児の本懐之に過ぐるなし。御両親様どうか喜んでやって下さい。

(注) このあと五月十八日夕方、知覧より万世

に転進。

同二十六日万世より出撃。

思えば長き二十年我假ばかりにて何等孝養も成し得ず遺憾の極みです。

しかし、隆茂もどうやらこうやら一人前の軍人として戦の庭に散れるのです。隆茂が沖繩の海に玉と砕けたとお聞き召された時は一言「隆茂よくやった」とはめてやって下さい。「七度生まれ醜敵を亡さん」とは正に我々の願うこと、きつとくやります。最後に隆茂として御両親様に対し何等孝養を成し得なかつた事を幾重にもくお詫び申し上げます。

御両親様どうか何時までもくお元氣にて皇国の為に御健闘下さい。

では靖国で会ふ日を楽しみに隆茂は征きます。

辞世

大君の御楯となり散らん身の

水づく屍とわれ悔ゆるなし

君が為捧げしいのちいまぞ今

醜艦撃ちて玉と砕けん

昭和二十年五月十八日

隆茂



国民の姿

海軍少尉 植村眞久

第十三期飛行予備学生 26才

第一神風特別攻撃隊大和隊

19年10月26日 比島セブ基地出撃

(愛児に遺した手紙)

素子

素子は私の顔をよく見て笑ひましたよ。

私の腕の中で眠りもしたし又御風呂と一緒に入つた事もありました。

素子が大きくなつて私のことが知りたいときは、お前のお母さんか佳世子叔母様に私のことを良く御聞きなさい。私の写真帳も御前の為に家に残して在ります。

素子と言ふ名前は私が付けたのです。

素直な心のやさしい思ひやりの深い人になる様になつて、御父様が考へたのです。(略)

私は御前が大きくなつて、立派な花嫁さんになつて、幸になるまで見届けたいのですが、若し御前に私を見知らぬままにしてしまつても決して悲しんではなりません。御前が大きくなつて父に会ひたいときは九段(註・靖国神社のこと)へいらつしやい。そして心に深く念ずれば必ず御父様の顔がお前の心の中に浮かびますよ。

父は御前は幸せ者と思ひます。

生まれながら父に生写しだし、他の人々も素子ちゃんを見ると眞久さんに会つて居る様な気がすると良く申されて居た。又御前の御祖父様御祖母様は御前を唯一つの希望にして御前を御可愛がり下さるし、姉様も又御自分の全生涯をかけてただただ素子の幸

せをのみ念じて生き抜いて下さるのです。必ず私に万一の事あるも親無児などと思つてはなりません。父は常に素子の身辺を護つて居ります。先に言つた如く素直な人に可愛がられるやさしい人になつて下さい。

お前が大きくなって私のことを考へ始めた時に、此の便りを読んでもらひなさい。

昭和十九年○月吉日

父

陸軍曹長 佐藤新平

仙台航空機乗員養成所出身 23才
第七九振武隊

20年4月16日知覧出撃沖縄へ

(留魂録と題する日記があるが、四月一日の一部)

お母さん江

思えば幼い頃から随分と心配ばかりおかけしましたね。腕白をしたり、又何時も不平ばかり言つたり。眼を閉じると子供の頃のこと、不思議な位ありありと頭に浮んで参ります。

悪いことなどすると神様に謝らせられたり、又幼い頃「今日の良き日をお守り下さい」「今日の良き日を有難うございました」と毎日拝神のことをやましく言われたお母さんでした。

今日になり本当にあの頃からお母さんの教育がどんなにか新平の爲になつた事でしょう。病気で心配をかけた、又苦学の時も随分と心配をおかけした。

苦学と言へば、家を出発する時、台所でお母さんが涙を流されたのが、東京にいる間中頭に焼きついて、あの頃どんなにかかえりたかつた事かしれませんでした。

お母さんの本当の有難味が解つたのは東京へ出てからでした。あれから余り家に居る事もなく、ゆつくりお母さんに親孝行をする機会のなかつた事だけ残念です。

軍隊に入つてお母さんにお会いしたのは三度ですね。一度は去年の休暇、二度目は去年の暮近く館林まで来ていただいた時、あの時は新平嬉しくて嬉し

くてたまりませんでした。

態々長い旅をリュックサックを背負つて会いに来て下さつたお母さんを見、何か言つと涙が出そう、遂、わざわざ来なくても良かったのに等と口では反対の事を言つて了つたりして申し訳ありませんでした。

あの時お母さんと東京を歩いた想い出は、極楽へ行つてからも、楽しいなつかしい思い出となることでしょう。

あの大きな鳥居のあつた靖国神社へ今度新平が祀られるのですよ……。手をつないでお参りしましたね。今度休暇でかえつた時も、お母さんは飛んで迎えに出て下さいましたね。去年の時もそうでした。



大鳥居をくぐつて
御遺族の思い



昨年の8月15日の参拝者は20万5千人

海軍少尉 時任正明

第十三期飛行予備学生 25才

第一草薙隊

20年4月6日 第二国分出撃沖繩へ

遺書

本日突然国分に進出、明日を期して出撃します。名古屋より転出の途中、本城の上を高度二千米にて通過しました。感無量でした。敵来襲の頻化と皇國の防衛に二十五年の運命を賭して立派に武士の子として戦つて来ます。

今更に残し置くべき事ありません。唯、慈愛深き御両親に今日迄、正明何等恩報するの事なく唯々残念に思い居ります。二十五歳の今日迄何自由無く今此の光榮ある攻撃隊の中堅将校として参加し得るのを得さしめ下されし御両親他皆々様の御養育限りなく身に沁みます。

明日の出撃は勿論生還を期し得られません。然し心中誠に静かなるものがあります。

正明は皇国防衛の前堤として莞爾と散つて行きます。

國分農学校の当直室に此の書を進めつつも、本城の家に帰っている様な気がします。今夜の星は又、特に美しく御両親の面影が目前にちらつきます。

桜花欄渡と咲き薫る南国を飛び立つて小生の故郷鹿兒島を出撃の第一線に為し得たる事は何にも代え難く喜しき事です。

正明 桜花咲く靖國国の杜、智二人の兄上の許に、そして親友松本峯一の居る所に一足先に征きます。

御両親様の悲しみは小生にとって最も苦しい事です。

す。正明は満足です。

今日は一時頃到着しましたが、業務多繁、遂に連絡する暇がありませんでした。お許し下さい。

父上にも母上にも現下、日本の現状に既に覚悟ある事と思ひます。日本は皇國です。絶対不滅です。

我々は此の信念の下に生きて来ました。人類の正義の道を示すものは皇國の道にあると思ひます。書けば果しなく思えば尽くる事ありません。

身を潔め心を静めて明日は南海に散ります。父様、母様、末永く御身御大切に。

小生と共に散る人は、兵学校出身高橋中尉です。縁あらば宜敷くお願い致します。

荷物は後の分は名古屋空第一士官次室海軍少尉厚地兼之助氏か、川野良介氏に頼んで置きました。連絡して見て下さい。

遺髪とも云う可きものは残しません。帽子、短剣を正明と思つて居て下さい。

部隊名 神風特別攻撃隊草薙隊海軍少尉 時任正明 (四月五日夜国分基地国分農学校の一室にて書かれたものです。)

海軍少尉候補生 宮内 栄

海軍予備生徒出身 22才

第一草薙隊

20年4月28日 第二国分出撃沖繩へ

遺書

父上様、母上様、栄はこれから出撃します。

わが儘な私を立派に成長して下さいまして、しかも帝國海軍航空隊員となり、今回栄えある神風特攻隊第二草薙隊として出撃出来るようになりましたのも、みな父上、母上のお蔭と、栄は有難く涙を流しております。必ずご期待にそむかず敵を撃滅して日本の國を護ります。近くの山に咲く桜花は栄の立派な生まれ変わった姿です。

幼くして出郷する時、母上から受けた教訓は立派に実行して来ました。酒と女でしたね。今まで酒は少しやりましたが、女はぜんぜん知りませんでした。

今となつては何も思い残すことはありません。ただ日本の必勝のみであります。栄は日本の必勝を断じて信じております。

箕輪様や久保様や、また親戚の方々にもいろいろお世話になりました。厚くお礼を申し上げます。

また東京では福井様と春海家には親代わりになつてお世話戴きました。海軍に入つては名古屋市千種区春岡通り三ノ十四、仁科一雄様と、愛知県愛知郡豊明村大字東阿野外山きみ子様にも子供のようにお世話になりました。何とぞ礼状を出して下さい。

みつ子やとし子も元気のことと思ひます。広兄も元気でご奉公中のこと信じます。洋子もだいぶ大きくなったことでしょう。



麹町靖国講のおみこし

折りがありませんら、靖國神社で待つておりますから、面会に来て下さい。土産物はありません。栄も名古屋へ来てから今まで殿様のような生活をして来ました。食べたいものも食べました。勿体ないくらいでした。

沖繩が私の最後の場所です。

昨晚、最後の夢を挙母町のきらく亭で見ましたが、矢張り父上様と母上様の夢でした。くだらないことを書いて全く女々しいようですが、お許し下さい。では皆々様のご健康を祈つて出発します。

昭和二十年四月十三日

父上様

母上様 ご膝下

栄より

みつ子とし子へ

元気の事と思ふ。兄も至つて元気に今度神風特攻隊第二草薙隊員となつて征く事になつた。男子の本懐之に過ぎるものはない。

お前達も元気で國の為に盡せ。兄は何時も靖國神社でお前達の奮闘を見ているぞ。

日の丸鉢巻をしめて出撃して征く。勇壮なる姿見せてやりたいな。兄は必ず敵空母に突入して見せる。期待して居れ。

もう何も言う事はない。元気で一生懸命國の為に頑張れ。至誠こそ進むべき目標だ。

昭和二十年四月十三日

妹へ

兄より

陸軍軍曹 若尾達夫

古河航空機乗員養成所出身

第四三二振武隊

20年5月26日 万世出撃沖繩へ

(同隊松本久成伍長に宛た手紙、兩人は同じ隊で同じ日に攻撃しているが、その前に別れていた時があったのだらう。松本伍長の遺品中から発見された) 松本兄 君とは古河、仙台、平安鎮といつとも一緒だったね。愈々大望の特攻隊に召されて、これも亦死を共にする同じ隊とは……。思へば山あり河ありの幾屋霜、一緒に散らう、そして靖國でまた一緒にならう

花でさへ 潔よく散る若桜

大和男の子の俺達が

御国のために散るのなら

何の桜に負けやうぞ

日の本の男に生れ光栄は

死して屍は帰らずも

魂永久に靖國の

護りの神と我ならん

陸軍軍曹 若尾達夫

海軍少尉 島 澄夫

第十四期飛行予備学生出身

第三八幡護皇隊

20年4月16日 第二国分出撃沖繩へ

遺書(弟宛のもの) 達夫・広昭 俺は一足先にゆく二人とも早晚後につづく事を信ず 二人のくる迄靖國の社で首をながくして待つてぞ 二人はただ与へられたる現実を 眞実を以て貫いてゆけばいいのだ 下らぬ批判を一切やめて 眞正面からぶつかるのだ 門はたたかなければ開かれない 最後の最後まで眞実の門をたたきつづけるのだ。

かくしてこそ 自らのゆくべき道は明らかに如何なる困難にも泰然たりうる 戦争は益々困難を加える事だらう 然し如何なる事態に立至らうと しっかりと正しい信念を以て 自己を処理し 大衆を導いてゆくそこに有識者たるの眞意義があるのだ

どうか父上母上をもちたてて 我れなき後をしつかりたのむ では元気で征つてくるぞ 必ず轟沈だ

特攻隊員の遺詠

―付 平成百人一首―

田中 賢一

我が協会では平成二年に「特攻隊員遺詠集」を出した。私は編集に携わったので、全部に目を通していたが、この度書架より「平成百人一首」を取出し再度読みなおして、その中に一首だけ載っている特攻隊員の遺詠に触れ、改めて深い感銘を覚えた。その歌は、

来る年も咲いて匂へよ桜花
われなきあとも大和島根に

詠者は長沢徳治となっていて、この人については何の説明も載っていないが、長沢少尉は幹候9期、第六十七振武隊の一員で、4月28日知覧出撃沖繩近海の洋上で散華している。

この歌桜花に託して我なきあとの国
の行く手を念じている。この部隊は3月23日明野で編成し、いつ知覧に進出したのか知らないが、その間に桜は咲きやがて散っていった。散りゆく花に我が身を思い、来年もさ来年も花は咲くであろう。お国は桜木と共に永遠であれという思いが籠もっている。単なる歌詠みにもせざる歌ではない。
平成百人一首なる書物には、特攻隊

員の歌はこれ一首だが、説明のところにもう二首挙げている。

いざさらば我は御国の山桜
母のみもとにかへり咲かなむ
この歌のことは別稿「特攻隊員とその母」でのべたが、感銘深いことなので重複をいとわず述べる。

詠者緒方襄中尉は海軍飛行予備学生13期第一神雷桜花隊の桜花搭乗員で、3月21日鹿屋出撃沖繩に向かったが、桜花切離す前に陸攻が敵機に撃墜され戦死した。

襄中尉より特攻隊志願の決意を聞いた母三和代さんは、今生の別れに子の任地に赴いた。

うつし世のみじかきえにし母と子が
今宵一夜を語りあかしぬ
これが、その折りの母の歌である。そして帰宅後、襄中尉がひそかに母の鞆にいれておいた辞世が、この歌である。もう一度掲げる。

いざさらば我は御国の山桜
母のみもとにかへり咲かなむ
母三和代さんは、帰ってからの歌を発見し、
散る桜花のいさぎよきおば
母のこころはかなしかりけり
平成百人一首には特攻歌の説明のところにもう一首かかっている。

末遂に海となるべき山水も
しばし木の葉の下くぐるなり

詠者仁科関夫中尉は海兵71期、黒木大尉と共に回大の開発者。黒木大尉はその前に殉職しているので同大尉の遺骨を抱いて回天に搭乗、19年11月20日ウルシー泊地に突入し大混乱に陥れ、

同地にあったシャーマン提督をして、「我々はあの日終日、そして次の日もダテナイトの上ですわっているような、戦々競々たる感じであった。休養をとるところか、洋上の方がどれくらい安全だかわからぬと思った」と言はしめた。

この歌にいう海とは回天による大戦果のことで、それに至るまでには幾多の難関を乗り越えねばならぬという意味である。歌の技法に長けた歌詠みでも及びもつかぬ歌である。

この人のことについて、昭和39年3月の靖国神社々頭の掲示に母の手記が出ており、感銘深い内容だったので紹介する。

あの子はよく祭日に帰って来る。今日は明治節、なんだか関夫が帰って来るような気がしてならない。朝から気もそぞろで落ちつかぬ。お昼になった、あの子の好きなものを作ってもみた。座敷を整頓したり、寝具を干してみたりしてあてのない人を待っていたが、晩になっても姿をみせぬ。もうこの世にはい

ないかも知れぬと考えたり、また正月にでもひょっこり帰ってくるかも知れぬと、希望をもってみたりしながら、床にいたのは十時すぎてからだった。
いつかとりりとしたと思うころ、強くベルが鳴った。あっ！ 関夫のならしかただ。はじかれるように飛起きて玄關に出た。暗い外に立っているわが子を見たとき、無事に生きてくれたとという喜びで胸が一杯になった。そのころ神風特別攻撃隊のことが新聞やラジオに発表されたばかりだったので、いろいろな話している間に、何気なく聞いてみた。

「若い人が飛行機で敵艦に体当たりして死んでゆくなんて、本当にもったいないことだね。必死でなくても何とか勝つ方法がありそうなものにね」 関夫は何とも答えなかった。自分が今必死の作戦を前にして、親に最後の別れにきているなどということは、おくびにも出さなかった。
次の朝、早く起きた関夫は、湯殿で頭から何杯も水をかぶりながら、何事か祈念しているようであった。ボサボサに伸びた髪が、ことさらに気になるのも女親のせいだろうか。
「忙しくて散髪する暇もないの」：無言、「恐ろしい顔になったものね、疲れているの」やはり無言。ずっと前

に帰って来た際、結婚してもよいなど
 といっていた事を思い出したので、話
 してみたところ、関夫は何食はぬ顔で
 「前にいったことは、取り消し、取り
 消し、みな取り消し今はとても忙しい
 ので、次に帰って来た時にゆっくり話
 しましょう」といった。

この日運悪く父は田舎に行っていて
 とうとう会えなかった。最後の食事が
 あまり進まないの、「今日はなぜ少し
 しか食べないの」「おかげが沢山あるの
 でね、それにぼくも大分大きくなった
 んだから、そう何時までも大食いぢや
 ないんだよ」と笑いながら言った。し
 かしお酒はうまそうに飲み「お母さん
 も」と杯を出し、二人で楽しく汲み交
 わした。これが関夫にとってはせめて
 もの別れの杯のつもりだったのだろう。
 いくら腹がきまっても、母を目の
 前にしては、さすがに胸がせまり食事
 もノドを通らなかつたのではなからうか。
 私が駅までせび送りたいといったが
 門前でいいよといい、母がつくった握
 飯を風呂敷に包んで手にぶちさげ、ゆっ
 たりした足どりで去って行った。
 どこから来て、どこへ行くともいわ
 ないで行ってしまった。わが家の桃太
 郎は待てども待てども鬼ガ島から帰っ
 て来ない。

編者註 この日は明治節ということ

は、戦死の一七日前になる。

以上は平成百人一首に触発されて、
 一文をまとめてみたが、ここで親子の
 情が心うつものを、時代のあとのもの
 から拾ってみれば、

うつそみのいのち一途になりけり
 生れまく近き吾子をおもへば

五島美代子

「うつそみ」とは、この世に生きる人
 というような意味で、この歌は「母
 となりて」という題がついている。生
 まれて来る赤子と自分は一体である
 うつたえているのだらう。

ところが作者五島美代子は、二十五
 年あと、このとき生まれた長女を亡く
 したのである。

うつそ身は母たるべくも生れ来し
 をとめながらに逝かしめにけり

戦争の時も平時でも親の愛と悲しみ
 は変わることはない。

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳を

すがすがしといねつたるみたれど

長塚 節

詠者は病を得て入院していたが、淋
 しさの余り一時家に帰ってきた。その
 時母が吊ってくれた蚊帳の中で安堵感
 にひたっていた。たるみたれどという
 言葉には母に対する思いやりが感じら
 れる。以上は明治大正時代だが幕末の
 ものとして次の歌が載っている。

親思うところにまさる親ごころ

けふの音づれ何ときくらん

吉田松陰

この歌については説明の要はない。
 やはり同じ時代の人に次の歌がある
 余り雰囲気が違いすぎるが挙げてみる
 妹が背にねぶる童のうつつなき
 手にさへめぐる風車かな

大隈言道

妻の背中で幼子が無心に眠っている
 が、眠ったまま手放さない風車が回っ
 ている、というまことに平穩無事のほ
 ほえましい姿である。

時代は一挙に遡って記紀・萬葉時代
 の歌になる。

父母が頭かき撫で幸くあれて

いひし言葉せ忘れかねつる

丈部稲麻呂

これは萬葉集に出ている防人の歌で
 詠者は駿河の国から防人として筑紫に
 赴くのであるが、大の男の頭を撫でる
 ことに、親子の情が感じられる。

もう一首載っている、

銀も金も玉も何せむに

勝れる寶子にしかめやも

山上憶良

拙稿の後半は平成百人一首の紹介に
 なってしまったが、始めに掲げた特攻
 隊員の遺詠が親子の情だった事により
 話がここに及んだ。



回天の攻撃でウルシー泊地の炎上する敵艦



三輪長官から訓辞を受ける菊水隊員 左から仁科関夫中尉 福田 斉中尉 一人おいて佐藤章少尉 渡辺幸三少尉



母三和代さん



緒方襄中尉

戦友愛は軍馬にまで及ぶ 付 騎兵出身の特攻隊員

田中 賢一

靖國神社境内には戦没馬の慰霊像がある。戦没馬は御祭神ではないが、毎年四月七日に神社が主催して、戦没馬の慰霊祭が行われている。始めの頃は騎兵や砲兵の戦友会が主催し、その後は各会から選出した者で委員会を編成し、毎年慰霊祭を行ってきた。三十年ほどそのような体勢で来たが、主な幹事役等の死去でそれも出来なくなり、一昨年からは神社で主催してもらい、我々は動員を担当することになった。本年は約七十名ばかりの老兵が参加し、桜花の下で肅々と行われた。

諸外国で戦没馬の慰霊祭が行われているだろうか。寡聞にして聞いたことがない。我々老兵が世を去った後も神



社は続けて下さるといいうが、戦没馬の事やこの像の由来を語り伝える為、昨年我々は金属に刻んだ説明板を設置した。神社参拝の折には此所まで歩を運んで頂きたい。

御祭神の中には馬と御縁のあった方も少なくないと思う。また特攻御祭神で次の方は騎兵から転科している。

宇津木五郎中尉(義烈空挺隊)

20・5・24 沖繩読谷飛行場

田中穰二少尉(八紘隊)

19・12・7 オルモック湾

柏川健一少尉(八紘隊)

19・12・7 オルモック湾

西尾卓三少尉(飛行第十七戦隊)

20・4・1 沖繩西方洋上

小野生三少尉(誠第三十八飛行隊)

20・4・6 沖繩西方洋上

北村 正少尉(誠第三十六飛行隊)

20・4・6 沖繩西方洋上

山本三男三郎少尉(飛行第四戦隊)

20・4・18 福岡県上空

林 義則少尉(第一〇五振武隊)

20・4・22 沖繩近海

猪股 寛少尉(飛行第二十戦隊)

20・6・1 沖繩近海

階級は出撃時のもの

宇津木以外は幹候九期、騎兵学校幹

候隊在隊中に航空に転科。

桜花に懐う

田中 賢一

敷島の大神心を人間は朝日ににほふ山桜花

陸軍最初の航空特攻隊を万朶隊と、海軍のロケット推進の体当たり機を桜花とは、いみじくも名付けたものだ。

桜花は古来我が民族の心と共に在った。萬葉集巻の二十に大友家持の長歌が載っていてその反歌にいう、(反歌とは長歌の後につけ、その意味を要約する歌)

桜花今盛りなり難波の海おし照る宮に聞しめすなへ(桜の花が今さかりだ、難波の海が照り輝くように、この宮で御統治なさっている)

武家の棟梁たる家持の、天皇の御代を讃えるに、桜花の盛りに比喻している。このように桜花爛漫を国運の隆盛になぞらえた歌は、ほかにも沢山ある。今古和歌集より一つ、

見たせば柳桜をこきまぜて都は春の錦なりける 素性法師

ところで、桜花にはもう一つの顔がある。むしろその方が、我が先祖以来桜花を愛でる所以であろう。古今和歌集巻第二の春歌下などは、そのような歌で一杯になっている。

待てといふに散らでしとまる物ならば何を桜に思ひまさまし 詠人しらす

残りなく散るぞめでたき桜花有りて世の中はてのうければ 詠人しらす
(散らないでいると世の果ては憂いことになる)

うっせみの世にも似たるか花桜咲く
と見しまにかつ散りにけり 詠人しらす
(咲く一方で散ってゆくのは現世のよくなもの)

かつて我々が高唱した歌「万朶の桜か襟の色/花は吉野に嵐吹く/やまとをのこ生まれては/散兵線の花と散れ」と思いは通ずるものがある。

古典からの引用はこれまでとするがこの詠者達は花を愛で花に託する人生をうたい込んでいるのだが、特攻戦没者の歌は、散りゆく花に自分自身を見るのであって、思いは深刻である。

「散る桜残る桜も散る桜」とは義烈空挺隊長奥山道郎大尉の弟宛て遺書の中にある。同隊の尾身勢二曹長も書残している。「征くも残るも皆桜時こそ違え散る桜」と

散る花とさだめを共にせむ身ぞとねがいしことのかなふ嬉しさ 穴沢利夫

身は砕け屍は桜花と散らうとも靈や皇国の空を守らん 杉本徳義

神雷第二建武隊 鹿屋兎沖繩へ
そこで腰折れ一首をもって結とする
散る花の清きころぞ我が友の御霊

鎮まる靖國の庭

靖國神社奉納演劇

流れる雲よ

〜未来より愛を込めて〜

飯田 正能

この靖國神社奉納演劇「流れる雲よ」の初日が開幕された3月21日（春分の日）、この日を待ち侘びていたかのよう、東京の桜の開花宣言が靖國神社能楽堂前で行われた。昨年より10日、例年より数日早かった。筆者ならずとも、この演劇の奉納と靖國の英霊、そして靖國の桜との奇しき縁を思い起こさずにはいられなかった。

奉納演劇は、3月21日から25日まで毎日19時から約2時間の5回公演である。筆者は予約していた22日の第2回

公演を参観すべく夕方靖國神社へと向かった。この日は前日と打って変わった肌寒い曇り空となり、夕刻から雨との予報であった。しかし、小雨決行とあるから、覚悟を決めて、雨合羽を用意し、厚着をして出掛けた。靖國神社・遊就館前の特設舞台は煌々たるライトに照らされていた。靖國神社拝殿もライトアップされ、改修されたばかりの第二神門の総檜造りの鳥居も神々しく輝いていた。しかし、間もなく雨が降り出し、次第に本降りとなってきた。やがて開演10分前、出演者全員が舞台衣装のまま遊就館入口ホール内に整列し、開演を待つ百余名の観客の前に、主催者から、本日の公演は雨のため中止せざるを得なくなったこと、公演は26日まで開催することになったので、

乱もなく約半数の観客は映画を観賞し、2時半過ぎ神社を後にした。

次いで、翌23日の午後、ようやく春の空が戻り、靖國の桜もちらほらと一分咲きの模様。いそいそと会場へ向かう。観客は若い人が多く、中でも女性が多い。開演前には約4百席の会場はほぼ満員の状況であった。まだ肌寒い夜の野外公演である。この悪条件の中で、これだけの熱心な観客を動員できたのは、大成功と言うべきであろう。

そして開演。劇の粗筋と情景は、前日の映画で解っていても、さすがに生の演劇は迫力があり、舞台効果も素晴らしい、劇団員達の一生懸命な迫真の演技に圧倒される。紙面の許す範囲でごく簡単に物語の粗筋を書くと、次のとおりである。

「平成18年3月、九段の靖國神社境内では桜祭が行われ、その会場からラジオの公開番組が放送されていた。桜祭特番「ハートフルサンデー」担当パーソナリティは坂本未来という人気DJである。この日の番組のメッセージテーマは「あなたにとっての幸せは？」であり、このテーマに寄せて、全国各地から沢山のメールやファックスが送られてきていた。そして、公開生放送の靖國会場には続々と人が集まってきていた。時は遡り昭和20年夏、日本の敗色

が日増しに濃くなってゆき、一億玉砕が叫ばれ、最後の徹底抗戦が行われていた。そんな中、海軍少尉の坂本光太郎と中原正人は、鹿屋基地の303航空隊で運命の再会を果たす。海軍兵学校を卒業し、靖國神社の満開の桜の下で別れて以来、別々の道を進み、坂本は飛龍興武隊の特攻隊員になっていた。一方、中原は基地で評判の腕の良い整備士官になっていた。飛龍興武隊には、熱血漢の隊長後藤広明中尉をはじめ、日英混血の天野真一中尉（父親が海軍中将で、母親がイギリス外交官の娘）、過去4度出撃するがその度に搭乗機の故障で帰還している竹山直彦兵曹長、職業野球の投手を目指していた稗田一郎上飛曹ら8名が所属する個性的な飛行隊であった。その飛行隊で、訓練の合間に坂本は、東京大空襲で亡くなった両親の形見のラジオを聞いていたが、軍事ニュースに混じって突然「アメリカ格安ツアーのお知らせ」といった不思議な放送が聞こえてきた。驚いた坂本は故障かと思いき、中原に相談して修理してもらったが、やはりおかしな放送が二人の耳に飛び込んで来る。「カップルがハワイで挙式」「近所迷惑な特攻隊」「ニューヨークのビルにカメラが突っ込んだ」といった訳の判らない内容に二人は戸惑う。一体何の放送か？



坂本 未来（ハートフルサンデーのパーソナリティ）

謀略放送なのか？そうこうしているうち、二人はその放送が未来からの電波であることに気付く。だが、戦局はいよいよ緊迫し、広島・長崎への原爆投下となる。その間に、後藤中尉以下5名の特攻隊員に出撃命令が下った。隊員たちは、それぞれに運命を背負いながらも靖國神社の桜の花の下での再会を約束しながら、決然として出撃し、沖繩周辺の敵機動艦隊に突入、見事散華する。そして、ラジオでは更に、昭和20年8月15日、日本が負けて戦争が終わったと放送している。もしそれが本当なら、一体自分達は、何の為に今死を選ぶのか、特攻隊員の坂本は悩むのだった。二人は思い余って上官に報告するが、余りに突拍子もない話に「気が狂ったか！」と一喝されてしまう。そして終戦の日の直前、天野中尉、坂本少尉、竹山兵曹長の3名に出撃命令が下った。天野は、予て上官から青い目の隊員、半分敵国人の血の混じった隊員と罵られていたが、合いの子とは、民族は異なっても愛によって結ばれた「愛の子」であり、国と国との平和の懸け橋とならなければならぬ、と母親から教えられたことを思い出し、自分はそのために命を捧げるのだ、そして、あくまでも大和男子として武士道に生きるのだと決意し、航空隊指揮官の宇

佐美少佐にその決意を語って出撃する。坂本は出撃の前夜、ラジオ放送のDJに電話をして、彼女の名前が坂本未来という同姓で、その叔父は大東亜戦争で特攻隊員だった、つまり自分であることを知る。そこで、61年後の未来に向かって「今、日本は良い国ですか？」と問いかける。そして、自分は未来のため、戦争のない平和な未来を築くために命を捧げるのだと決意し、ただ一人残された弟に宛てた遺書を中原に託して出撃し散華する。間もなく終戦となり、指揮官の宇佐美少佐は、予て覚悟のとおり自決する。やがて、8名の特攻隊員達の御霊は、靖國神社の満開の桜の下で再会を果たす。フィナーレは、舞台全面に満開の桜が映し出され、舞台と客席全体が桜吹雪に包まれて、感動的なシーンを現出する。そして、平成18年3月の今日、桜祭特番のDJ坂本未来は「若い特攻隊員達は、自らの命と引き替えに、祖国を、家族を、愛する仲間や恋人を守るために、そして未来を信じ、今の我々を守るために出撃して行ったのである。この事を決して忘れてはならない」と結んでいる。」この演劇の原作『飛行機雲』の作者で、脚本家でもある草部文子さん(伯父太田一道海軍中佐は海兵59期、重巡羽黒の航海長としてマラッカ海峡で戦死)

は、平成11年秋この原作を書き始めたが、そのきっかけは、鹿児島知覧特攻平和会館に行って衝撃を受けたことである、という。そして、この原作がラジオドラマの放送ギャラクシー賞奨励賞を受賞し、12年春から舞台でも上演することとなり、観客に感動を与えながら口コミで次第に拡がり、初演から7年目にして、念願の、靖國神社の桜の花の下での奉納演劇が実現したとことである。そして、「英霊の皆様、どうぞ大勢様で御観劇下さい。皆様の愛したこの国が、今よりもっとへい国」になって、世界の人々の幸せに繋がってゆくよう、祈りを込めてこの作品を、大好きなこの場所、靖國神社に奉納させて頂きます。：伯父さん、今年も靖國の桜は満開ですよ」と。

また、後藤徹プロデューサーも、エントラーメントの役割として、「我々戦後育ちの人間は、戦争という歴史をほとんど学習していない。教育から排除されて育ってきた。いや、知らされなかったのである。この国に生まれ、この国の国民として、自分の国を愛する事、「愛国」という言葉すら極右の象徴のように言われるのは、憂うべき事態であろう。我々は民族の誇りを持って、日本人としてあるべき姿で生きていくべきではないのか。そのために知らねばならぬ歴史がある。知らさねばならぬ真実がある。弱輩の私達も等しくそう考えて、この芝居を続けてきた。過去に存在していた、日本民族の誇りである人達の事、大和魂を持った男達の事、そして、この国の為に命を捧げて逝った多くの先人達の事、教科書では教えてくれない歴史の真実を、私達はエンターメントの世界から伝えたい。この作品では、戦争を知らない世代に、「特攻隊」が「遠い過去の物語」ではなく、たった60年程前の事実である事を、はっきり伝えたいと思っている。劇中で、敢えて特攻隊員達を、今風な長髪で登場させたり、話し方を現代的にしたりしているのはその為である。それは、この物語が「昔話」などではなく、親や祖父母の代にあってた事であり、その時一命を捧げて逝ったのは、今と何ら変わらぬ日本の青年達であったと、はっきり意識してもらおう為の演出である。そして、後世に伝えてゆくのは「憎しみ」ではなく、日本人の「真実の心」である。それを学び、次世代に伝えてゆく事が、平和な世界への礎となる事を信じてやまない」と言っている。見終わって、思わず臉が熱くなった。今の若者の中にも、大和魂が、そして、武士道精神がなお健在である事を知って、心が安らいだ。

皇室の伝統を守る 一万人大会

飯田 正能

平成18年3月7日、皇居北の丸公園の「武道館」は、全国から馳せ参じた1万数百人に上る憂国の老若男女の熱気に包まれた。「皇室の伝統を守る国民の会」の一万人大集会である。

大会は、15時に開始されたが、さしもの大会場も早くから満席の状態で、正面の大スクリーンには、昭和天皇の御大葬、今上陛下の御即位の礼、並びに御即位10周年奉祝行事の映画が上映されていた。定刻、国歌斉唱で始まった本大会の司会は、女優であり、詩人としても有名な村松英子女史である。

主権者代表として挨拶に立った三好達日本会議会長は「皇室典範改正法案の今通常国会提出の件は、幸いにも、去る2月7日、秋篠宮紀子妃殿下の第三子御懐妊の御慶事により、皇室を巡る環境が変わったことを踏まえ、世論や与党内の議論を見極める必要がある」ということで先送りされることとなったが、政府は、改正案の作成作業は予定通り進めるとしており、予断を許さない状況である。昭和天皇は、ポツダム宣言受諾の条件としての国体の護持に

ついて、「それは国民の自由意志によって決めてもらってよいではないか」と仰せられたという。これこそ国民に対する絶大なる御信頼の大御心あつてのことであり、終戦の証書にも「朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ」と仰せられている。この絶大なる御信頼に答えなければならぬ。占領下GHQでさえも、手を着けることを憚った天皇制の核心である万世一系の皇統は守らなければならない。これは、悠久の歴史を有する日本の文化であり伝統である」と力強く述べた。

各界からの提言として、中西輝政京大教授は「有識者会議の報告書には、重大な三つの欠陥がある。初めに結論ありきで、このような重大な問題について、過去に類例を見ない拙速さで、しかも非民主的な審議経過で結論を出したことが、第一子優先、いわゆる長子優先を謳っていること、更に女系天皇の導入である。日本皇室の最大のアイデンティティーは、万世一系にある。神武天皇以来二千六百六十六年、一つの御家系が皇位を継承してこられたこと、更にそれ以前の神話の神々の系譜につながる家系であること、しかも、百二十五代全て男系で継承してきたこと、歴史的事実として、女系天皇はこ

れまでお一人もおられにならなかった。女系天皇は世界的に見れば、いわゆる王朝の交代となる。世界の中での日本皇室の位置付けが変わるのである。日本文明の基本には、日本人の心の形がある。正直で、表裏のない、清潔な心、この日本人の心と日本の歴史と伝統を象徴されるのが天皇である。2月6日発表の世論調査によると、56%の国民が女性天皇と女系天皇の区別が分からないという。小泉首相にしても、女系天皇の理解が果たしてどこまで深いか疑問である。我々は天皇と皇室についての理解をもっと深めなければならない、皇室典範のような基本法を改正する当事者能力が、現在の日本国民に果たしてあるのだろうか」と重大な疑問を投げ掛けられた。また、ジャーナリストの櫻井よしこ女史も「皇室典範改正の有識者会議の審議の進め方は不真面目で、論議も極めて不充分、民主主義のルールにもとるものである。二千六百年以上も続いてきた皇室の伝統とは、日本民族の成り立ちの物語である。物語に込められているのは日本民族の心であり、その心の有り様、心映えの凝縮されたものが日本文明であり、その日本文明の真髓が皇室の姿にある。過去幾多の試練、危機を乗り越えて守られてきた日本国の歴史と伝統

と文明を忘れてはいけない。我々の叡智を結集し、この文明の証しとしての皇室の在り方について、しっかりと考へて、悔いのないように、この国を存続させて行こうではありませんか」と強く訴えられた。

次いで、来賓として出席した国会議員86名(自民党・衆院36参院18、民主党・衆院15参院6、国民新党・衆院1参院1、無所属・衆院8参院1)を代表して自民党衆議院議員島村宜伸、民主体院議員中川治、無所属の衆議院議員・日本会議国会議員懇談会会長平沼赳夫の各氏が交々挨拶に立ち、各党とも有志を結集して勉強会等で問題点を充分に検討し、国民の意志を体し、敢然として我々の守るべき伝統を守って行きたいとの決意を述べた。その中で、島村議員の「秋篠宮紀子妃殿下御懐妊の発表は、天の岩戸が開かれてぱっと明かりが射した感じがした」とか、中井議員の「紀子妃殿下の御懐妊の発表は、小泉総理が法案提出の決断をするかどうかのぎりぎりのタイミング、更に御出産の御予定が、小泉総理が辞める9月、これは、本当に神様がいらっしゃるなあと実感させられた。また、皇室典範の改正には、皇族も入っておられる皇室会議に諮るべきである」とか、平沼議員の「三笠宮寛仁親王殿下が、

皇族のお立場を充分わきまえられて、その御心情を吐露されたこと、皇室の伝統や歴史について、記者会見の席で質問された、有識者会議の吉川座長が「どうってことない」と発言したことは、誠に不遜であり、教養も品格もない」と怒りを込めて発言されたことが印象に残った。

次いで各界からの意見表明として、前駐日インド大使・慶応大教授・アフター・セット、台湾総統府顧問・金美齡、外交評論家・加瀬英明、ノンフィクション作家・関岡英之の各氏から貴重な意見が述べられた。特に、アフター・セット氏の「日本の社会は、イギリスのマグナカルタより四百年も前、聖徳太子によって築かれた民主主義的伝統を基盤にしている。皇族は、この伝統を形成する過程に不可決の存在とされてきた。賢明な皇族に導かれた日本国民の叡智が国家の利益に適った結論に達する無難な方法を見つけることを疑いません」との言葉や金女史の「紀子妃殿下御懐妊のニュースを聞いた時「神風が吹いた」と思った。あの時、小学生であった私は、台湾大戦の時、小学生であった私は、台湾において、日本人としての日々を送っており、必ず神風が吹いて日本が勝つと信じていましたが、遂に吹きませんでした。どうして今、神風が吹いたのか、

ひょっとしたらこの皇室典範の改正というの、あの大戦の敗北よりも日本の根幹を揺るがす国家的危機なのではないかと思いました。日本には世界に稀なる皇室があります。これは日本の宝なのです。この宝物を壊すことは簡単でしょう。けれどもそれを持つためには、皆が納得できる、そういう存在

を作るためには、二千六百六十六年かかるのです」との言葉は深く心に突き刺さる思いであった。また、イスラエルのヘブライ大学教授・ベン・アミ・シロニー氏は、そのメッセージで「現在、日本の皇室は、二千年以上続いた世界で唯一の存在である。これは世界の宝である。しかし、この地位は今、廃絶の危機にさらされている。廃絶されれば、それは日本だけでなく世界の大きな損失になるだろう。過激な変革は急ぐべきではない。類稀なる大切な皇室が一層繁栄し、皇位継承の適切な解決策が見出されることを心よりお祈り申し上げる」と強調された。また、関岡氏の「今の小学校の歴史教育では、古事記が扱っている部分が歴史教科書から丸ごと抜け落ちている。進学塾で、歴代天皇の系図を取り出して話したりすると、子供達は夢中になって聞いている。子供達は、日本の歴史や伝統や自分達の先祖のことを知りたがっている。

学校が教えないならば、親達が直接子や孫達に語り掛けていかなければならない。十年、二十年こういった運動を粘り強く続けることにより、次の世代に、日本人の魂、歴史や伝統、民族の誇りを根付かせるようにしなければならぬ」との発言は正に至当であった。

この後、「拙速な皇室典範の改定に反対する国会議員の署名」が二百二十五名に達したとの発表と来賓として出席した国会議員86名の紹介があり、本大会をもって「皇室の伝統を守る国民の会」を設立し、以下の三点に取り組み大会決議が、満場の拍手で採択された。①万世一系の皇室の御存在の意義を踏まえ、男系による皇位継承を堅持すべく、具体的な提案を検討し提唱する。②皇室への敬愛の念を高めるため、政府に学校教育の内容充実を要望するとともに、来るべき天皇陛下御即位二十年奉祝事業など広範な国民運動に取り組む。③戦後六十年にわたり放

置されてきた皇室制度の諸問題を抜本的に解決するため、皇室制度を検討する国会議員の会の設立を要望する。そして、大会決議は、その場で、各党の国会議員の代表者に手渡され、代表者達は、全力を尽くして、その実現に当たることを誓った。

最後に、一万数百名の天皇陛下万歳三唱の声は、さしも巨大な武道館を揺るがして響き渡った。



陸軍の空挺戦史にみる特攻精神

この命令を受けて我々は意外に思った。

田中 賢一 内地を出る時からパ

空挺特攻といえは義烈空挺隊のこと
と思うが、それ以外の作戦に於いても
特攻精神は随所に発揮されている。陸
軍の空挺作戦には、パレンバン空挺作
戦、レイテ空挺作戦及び義烈空挺隊の

レンバンの精油所を奪りにゆくのだと
聞いており、徳永中尉以下二十名ばか
りを、大本営の指示で日石の鶴見精油
所に派遣し、精油所の要点など習はせ
てあった。

作戦の3つがあるが、ここではパレン
バンの精油所攻撃とレイテ作戦の中で
島の東部平野に対するものについて考
察する。

まだ第三飛行集団から何も示されて
いないが、挺進団ではいろいろな場合
を考えて計画を練っていた。

(戦例1)

第一挺進団司令部はその時マレーの
スンゲーパターニーにあった。私は司令
部の部員だったが、17年1月31日左記
の南方軍命令を受領した。

その時二聯隊の徳永中尉が司令部に
現れ、高級部員の木下中佐に自分の中
隊(第一中隊)を初めから精油所攻撃
に使ってくださいと懇願した。木下中
佐が輸送機が少ないので、中隊といっ
ても100人ぐらいしか連れてゆけないが、
それでも出来るのかと問うと、やりま
す、鶴見で講習を受けて以来そのこと
ばかり考えていましたと、決意を面
にして答えた。

一、自今第一挺進団ヲ第三飛行集団
長ノ指揮下ニ入ラシム

二、第三飛行集団長ハ作戦ノ為第一
挺進団ヲ左記ニ依リ運用スベシ

一 第一挺進団ハ「パレンバン」飛
行場ヲ占領シ「L」及「H」作
戦ヲ容易ナラシムルト共ニ成シ
得レバ敵ノ破壊ニ先ダチ「パレ
ンバン」精油所ヲ占領確保ス

註 Lはパレンバン作戦
Hはジャワ作戦

(以下略)

木下中佐は早速久米団長に具申し、
第三飛行集団に挺進団の意見を述べ、
集団命令では「第一挺進団長ハ作戦開
始前日(2月14日のこと)一一三〇ヲ
期シ「パレンバン」飛行場及精油所付
近ニ挺進ヲ決行シ同地付近ヲ占領確保
スルト共ニ集団及三十八師団ノ戦鬪ヲ
容易ナラシムベシ」と示された。

これを受けて挺進団では、挺進第二

聯隊長の指揮する二個中隊をもって飛
行場を、第一中隊を以って精油所を奪
取させる部署を採った。精油所はBP
Mという大きな工場とNKPMという
小さな工場があり両者はムシ河の支流
で劃されていた。降下場はその南の狭
少な地域しかない。中隊は主力をもつ

て大きい方を、一個小隊をもって小さ
い方を狙い、結局両方とも成功した。
後から考えれば当然のことのようにも
思えるが、初めての戦でこれだけの決
心を実行したことは、高く評価され
なければならぬ。



松本 武仁 画

(戦例2)

パレンバン作戦の事は私が現実に見聞した事例であるが、次の事は第二挺進団司令部の部員だった弘中少佐や、海上に撃墜され捕らえられた下士官等から聞いた話を総合したものである。

第二挺進団司令部と挺進第三聯隊がアンフェレス飛行場に隣接する宿舎に入ったのは、19年11月14日だった。ここでレイテ空挺作戦の計画を練ったが挺進第四聯隊はまだ到着していないので、初めの計画では第4航空軍から示されたブラウエン地区の三飛行場だけを目標と考えていた。ところがレイテに向かう輸送船団が敵の航空攻撃で大打撃をうけいることを聞き、かつ敵の航空基地はブラウエン地区よりもレイテ湾沿いのタクロバンやドラクが、多く使われているという情報を得たので、そこも初めから攻撃目標にすべきである、それを自分の中隊にやらせてくれという意見が中隊長連中から出た。ブラウエン地区にはブラウエン北及び南の両飛行場とサンパブロの三つの飛行場があった。ここに空挺を使うというのは、方面軍が計画し第35軍に実施させようとしていた和号作戦の一環である。即ち方面軍がレイテ増援の第二陣である第二十六師団を、ルビから脊稜山脈を越してブラウエン地区に進

出させ、東部平野に決戦を求めようとする構想の先遣隊を、空挺にさせようとしたのである。

現実には方面軍の参謀が地図の上に線を引き出したような簡単なものではない。それより先二十六師団を乗せた船団はイピルに到着したものの敵の空襲を受け沈没し、人員は上陸したが装備は殆ど失ってしまった。挺進団にはそのような状況は伝えられていなかった。師団といえど堂々たる陣容の部隊が進出してくるものと思っただけ。しかし東部平野に決戦と言っても、レイテ湾岸まで友軍が進出できるとは思っていなかった。それなのにタクロバンやドラクの飛行場にも降下させろというのである。第四聯隊が11月30日北サンフェルナンドに上陸し間もなく追及できることがわかり、台湾まで来ていた挺進飛行第一戦隊も、第二戦隊の一個中隊の増援を得て四個中隊になったので、挺進団長徳永大佐は四航空軍に具申して二目標を追加してもらった。やがて第四聯隊も到着して別表のような部署がきまつた。

ここで特攻ともいふべきドラッグ及びタクロバン攻撃部隊について説明するのは、降下部隊の兵力が少ないことに配慮し、四航空軍が第七十四戦隊と第九

十五戦隊から重爆各二機(操縦者各機二名)を差出させたからである。ドラッグに向かう宮田中隊(四聯隊第二中隊)と竹本小隊(三聯隊第三中隊の小隊)は建制部隊で、指揮官が熱望してその任に就いたが、タクロバンに向かう部隊は両方共特攻隊として人選された。第三聯隊から出た強行着陸部隊にレイテ湾に撃墜され、浮游していて捕えられた下士官がいるが、その人は次のとおり述懐している。

《中隊で下士官一名の特攻隊志願者の募集があったが、そのときはタクロバン強行着陸ということは知らなかった。フィリピン上陸以来、どうせ早く遅かれ死ぬのだと思い、まっ先に志願した。》

その後でタクロバンに強行着陸し、敵飛行機を爆破するのだと聞かされた。出発にあたり挺進団長から死に急ぐな、生き永らえよと言われた。強行着陸機は重爆で、落下傘は着けず救命胴衣だけで、全員が手榴弾と小銃を持って乗り込んだ。座った場所からは天蓋を通し上空だけしか見えなかったが、目的地近くに来たと思う頃、上空を見ると敵の対空砲火は物凄く、まるで打上げ花火を見るようだった。何発か機体に命中したような感じがし、そのうちに海上に着水した。操縦者の指示で全員無事脱出し、飛行機は数分後に沈んだ。あたりは薄暗く、どの方向が陸か判明しなかった。水は温かく救命胴衣のお蔭で浮いているのは楽だった。よく泳げる者は勝手に泳いで行き、最後は四人になった。

目 標		部 隊 別		指 揮 官		配 当 機 数		降 着 別	
ブラウエン北	タクロバン	第三聯隊	白井少佐	輸送機一七	降	下			
		第三聯隊	桂 大尉	輸送機六	降	下			
		第四聯隊	穂田大尉 <small>あき</small>	輸送機三	降	下			
		第四聯隊	竹本中尉	重 爆 二	着	陸			
ブラウエン南	ドラッグ	第三聯隊	宮田中尉	輸送機七	降	下			
		第四聯隊	神原大尉	輸送機二	降	下			
		第三聯隊	司令部	重 爆 二	着	陸			
		第四聯隊	佐藤中尉	重 爆 二	着	陸			

闇をすかしてみると、遠くに山があるようにも見え、大きな船のようにも見え、潮で流されていることが判った。

そのうちに夜が明けてみると、四方八方敵の軍艦ばかりで、上陸用舟艇らしいものが走って来て、自動小銃で撃たれ、もはやこれまでと観念している

と、鉤で舟の上に引き上げられた。殺せ殺せと叫んだが、殺されなかった。

軍艦の営倉に入れられ、その後タクロパンの収容所に入れられた。通訳にそれとなく尋ねてみると、そのとき海上で捕えられた者は三人で、二人は豪州に送られたということを知った。

米軍の記録によれば、タクロパン飛行場内に一機が着陸し、地上にある五機と激突して炎上し、機内には日本軍落下傘兵八名と乗員三名が死んでいたとなっている。従って飛行場内に着陸できたのはこの一機だけらしい。別の機がタクロパン西北方(地名不詳)に着陸し、乗っていた日本兵は駆けつけた米軍と激しく戦い、全員戦死したとも記されている。

サマール島から当日の状況を遠望していた兵士の話では、当日夕刻レイテ湾沿岸の対空砲火は物凄く夜まで続いていたという。

次はタクロパン降下部隊の榊原小隊についてである。榊原大尉は第一中隊の小隊長だったが、少し前に大尉に進級したのでこの時は本部付になっていた。従って部下をどのようにして人選したのか伝わっていないが、榊原達哉という人には私は印象極めて深いものがある。

第二挺進団に動員が下令される前、私は挺進練習部下士官候補者隊長だった。区隊長五人は聯隊から派遣されており、その一人が榊原中尉だった。彼は直情径行激情の持主で、隊務については積極的、実行力極めて旺盛だったが、心に一つだけ翳りがあった。それは更に一年前、聯隊で彼が計画指導した演習で、小丸川を渡渉する場面があり、八名の殉職者を出してしまった。

勿論事前に自ら渡渉し安全を確認してあったが、たまたま山間部に豪雨が降り俄に増水した為だった。聯隊から救援隊がかけつけ遺体捜索が始まるや、彼は軍刀を引抜き自決しようとしたがそれを予期して聯隊長が付けて置いた数名の下士官に取押えられ果たさず、聯隊長に戦場ではいくらでも死ぬべき機会があると諭され、思いとどまった。爾来常に命を投出す機会を求めていたが、ここにその機会が訪れた。タクロパン攻撃隊の話が出るや、彼は真先に

名乗り出た。同僚達も当然の事だと思っ

た。徳永挺進団長はこれら特攻隊に対して、死にいそぐな、敵の飛行機等を破壊したら潜行してでもブラウエンまで来いと言ったが、榊原は刀の目釘の続く限り切りまくりますと答えたという。その頃はブラウエンの飛行場は奪取でき、二回三回と空輸し、二十六師団とも提携し、この地域に地歩を確保出来ると思っていた。団長自らもこの地に乗込むつもりでいた。

レイテ湾沿いの二目標に向かったのは、輸送機九機と強行着陸機四機だが輸送機の中隊長三浦大尉は、敵の対空砲火が熾烈だという情報を得て、到底落下傘降下は不可能と思ひ、出撃直前になって全機着陸と指示した。空挺隊員も飛行隊員も海上に墜落し浮游中捕えられた数名以外、一名の生存者もないのであったのか一切不明である。そればかりでなく、主力方面もブラウエン北飛行場に降下した三聯隊主力が一時飛行場を制圧した以

外何の戦果もなかった。敵一個師団がレイテ西海岸に翌7日上陸して来たので、和号作戦は一回の降下で取止めになってしまった。

このように生還の見込みの全くない任務に、進んで就こうとした人達のことを、後の世に語り伝えておくことは我々の使命であると、胆に銘じておかねばならぬ。

余談ながら榊原は小丸川の事故の後小丸川の堤防の上に「八勇士殉職之地」と刻んだ碑をたてた。自分一人で建るつもりだったらしいが、同僚が資金援助したという。今でも人々は榊原中尉が建てた碑とよぶ。戦後堤防補修の為高鍋大師の庭に移された。私はその碑をみると榊原の顔と独特な語り口を思い出す。





搭乗機は100重



恩賜の酒を頂いて

(戦例3)
ベナベナ・ハーゲン作戦
この作戦は準備に入ったものの具体化しなかったもので、ここに述べるに値しないかも知れないが、その中に特攻精神の片鱗を認めるので敢えて記述する。
18年5月19日第一挺進団に再度動員が下令された。その頃の全般戦局の焦点は東部ニューギニアにあった。この地域を担当しているのは第十八軍で、この軍は第二十、四十一の両師団を擁していたが、東方から敵の侵攻をうけるに至り、3月初め新に第五十一師団を上陸させようとしたが、敵の航空攻



タクロバンの敵飛行場

撃によって船団が甚大な損害をうけた。航空は第六飛行師団が展開していたが、6月に第七飛行師団が加わり第四航空軍司令部が設けられた。

それより先この島の脊稜山脈の南側の高原地帯に、敵が飛行場を設定中であることを4月下旬航空偵察で発見した。それまで敵の航空基地は島の南側ポートモレスビー付近にあったが、新島の中枢ベナベナ・ハーゲンに進出して来ると島の北岸に展開している我が軍の脇腹に、短刀を突き付けられたような格好になる。5月10日現地視察中の大本宮瀬島参謀はベナベナ・ハーゲン問題を重視し、空挺部隊をもって対処させる案を電報で上申した。これによって第一挺進団の動員となったのである。

動員によって挺進団長となった河島慶吾大佐は、早速上京して参謀本部に出頭し、杉山参謀総長から激励をうけた。そのときの趣旨はつぎのようなものであった。

ニューギニアの戦況は重大化している。現在のところ同方面の航空状況は彼我同等であるが、ベナベナ・ハーゲン付近に多数の飛行場が建設されつつあり。同地区に敵戦闘機が進出するようになれば、ウエワク、マダン方面に

対する我が海上輸送は不可能となり、彼我のバランスは一挙に崩れる危険がある。この挺進作戦の成否はニューギニア方面の全作戦を左右するものである。この度陸軍航空の精鋭を増加集中しておるので、安心して作戦を遂行し光輝ある成功を祈る。(故河島大佐の述懐)

杉山参謀総長には、一昨年河島中佐が練習部長として落下傘部隊を創設した際親しく指導をうけたこともあり、感激一入だったという。

河島団長は部隊を内南洋のペルリユーに進める手配をして、所要の幕僚を伴い7月22日ウエワクの第六飛行師団司令部に出頭した。その時はまだ第四航空軍は出来ていなかった。ついで第十八軍司令部に向き、更にラバウルの第八方面軍司令部に出頭したが、どこでもベナベナ挺進作戦の準備は何もなされておらず、またさほどの熱意も感じられなかった。集めた情報によれば、同方面の高原一帯は人口約六万、耕地多く食料豊富、飛行場四個在り、内一個を使用している。豪州軍一個大隊と高射砲のあることは確実。挺進作戦を実施するとしても一ヶ月先になると示され、挺進団としては、とにかく先遣隊をウエワクに進め、作戦の準備をした。

その後現地軍で仔細に調査してみると、挺進部隊が降下しても地上部隊が進出する為には道路を啓開しなればならないし、補給は担送によらなければならない。それが為には一個師団の人員が必要だということもわかった。すべて空輸によれば解決することだが第四航空軍が出来たというものの、優勢な敵航空に圧倒され青息吐息の状態だった。

このような状況を知り挺進団では、地上部隊が来てくれなくてもよい、降下したならば敵を蹴散らし現地物資を奪い作戦するという意見を具申した。正に特攻隊である。比島作戦や沖繩作戦の頃なら認められたであろうが、まだ統帥は正常だった。このような用法が認められる筈もなく、延期という形で保留され9月25日正式に取止めときまった。

戦後河島さんが私に語ったことは、今考えれば確かに特攻隊だが騎虎の勢というか、それほど大事な目標ならば最後は皆そこで討死してもよい、やってやろうという気持だった。この考えに我が挺進団で誰も反対する者はなかったろう。新座市野火止の寓居に伺って聞いた話である。この人は大言壮語するような人ではない、極めて合理的な考えの方だった。

(戦例4)

ラシオ空挺作戦の強行着陸部隊

この話は私自身のことになるので少々面映ゆいが、特攻と一派通ずるものがあるのと、実現しなかった空挺作戦なので、ここに発表しておかないと永遠に消えてしまう史実なので、敢えて活字に残しておくことにする。

第一挺進団はパレンバン作戦が終ってからビルマに移り、第五飛行集団に属し第十五軍の作戦に協力することに決めた。その作戦はラシオに降下し、第五十六師団の攻撃を受け雲南に退却しつつある重慶軍を捕捉撃滅しようとするものだった。

ラシオには兵営と飛行場があり、敵は浮動してはつきりしないが、英軍の一部と雲南省から出て来た有力な重慶軍がいることは確かだった。我が挺進団の手持ち兵力は、四個中隊より成る挺進第一聯隊及び第二聯隊の二個中隊の計六個中隊と、輸送機は五個中隊を持っていた。

退路遮断に適する地形はないので、とにかく敵のおりそうな所に飛び込んでいって、潰乱に陥らせようと考えて作戦を練った。先ず聯隊長の指揮する三個中隊を兵営に降下させ、その輸送機を引き返してきたら、団長直轄の三個中隊を飛行場に降下させるという大

綱を定め、細部計画を研究した。

当時私は団司令部の部員だった。司令部は第二次挺進で飛行場に乗り込むことになったが、兵営や飛行場にどれほどの敵がいるのか全くわからない。重慶軍が一杯入っていたという捕虜情報もあるし、とにかく敵情は流動的だった。航空写真で飛行場にトーチカがあることだけは判明していた。兵営と飛行場は一〇キロ離れており、兵営攻撃の第一次挺進部隊が攻撃成功しても約五時間後に到着する飛行場降下部隊の降下を援護することは期待できない飛行場にまともな敵がいたとしたら、当然配備についており、降下直後熾烈な火力で薙ぎ倒されるおそれがある。

降下を援護するためには、着陸すると直に戦闘できる部隊を載せた強行直機を超低空で進入着陸させたらよい。ドイツ空挺部隊がグライダーでエバンエマール要塞を奪った戦例は、既に承知していたのでその伝でやるべきだと高級部員木下中佐に具申したところ、俺も考えていた、お前その指揮官をやれ、ということになった。

司令部にはそれができる兵はいないので、団長直轄となっていた三個中隊から要員の差出しを命じてもらった。飛行戦隊では強行着陸編隊の指揮官を三島木中尉と決めしたが、唯でさえ少ない輸送機を潰すのは勿体ないとて、機種改編で不要になった97重1型が、西貢の航空廠にあると聞きそれを三機買ってきた。

各機八人搭乗として私以下二四名の部隊を編成し、軽機七、重機一、火炎放射機一、手榴弾各人六発づつ持つことにした。飛行機から跳び出したならば最大火力を発揮し敵を圧倒震駭し、敵が慌てふためいている時に、頭上に主力が降下するという計画だった。

17年4月29日トングー飛行場で第一次挺進部隊を見送り、強行着陸機の傍で待機していた。団長直轄の三個中隊は輸送機が帰ってこなければ乗る飛行機が無いので、滑走路の向こう側で待機していた。やがて時間がきて戻ってきた輸送機が着陸始めると、驚いたことに部隊が乗っているではないか。ラシオの手前まで行ったが雲が立ちこめていて進入できないという。かくして戦機を逸し遂に作戦取止めとなった。

若しも飛行場に敵が待ち構えていたら我々はどうなったであろうか。勝いくさの波にのっていた時期なので、それほどの悲壮感は無かったが、トングーの宿舎に残した私物などは整理し、留守宅の住所氏名を明記した。今思えば特攻精神の片鱗に触れたと言へぬこともない。

海軍落下傘部隊一代記

二つの落下傘部隊を持つ国

日本の落下傘部隊は、奇妙なことに、陸軍と海軍の両方であった。

米国や英国は陸軍が、ドイツは空軍が落下傘部隊を持っていたが、日本は陸軍と海軍が別個に落下傘部隊を作り、

陸軍も海軍も自分の航空部隊にそれを組み入れていた。

海軍が陸戦隊を持つことは理解できるが、落下傘部隊まで持つ必要があったのだろうか。

それには歴史的な背景がある。

日本の陸海軍は、明治の建軍以来大陸の方を向いていた。ところが日露戦争でロシアを破った後、陸軍はロシア軍の回復に備えて、益々大陸向きの戦備を固めていったが、海軍はロシア海軍を日本海海戦で再起不能なまでに叩きつけたため、一時主敵を失ったような恰好になった。

しかも、第一次世界大戦で帝政ロシアが崩壊すると、日本海軍はいよいよ相手がいなくなった。

しかし、それはほんの一時的な現象であって、日本海軍の前に新たに立ち上がったのは、米英の海軍だった。

日露戦争当時両国とは無一の友邦だっ

たが、日本が実力を持つに従い、国益は一致しなくなる。それでも、第一

次大戦中は連合国として、手を取り合っ
て戦ったが、ベルサイユ条約の結果、
日本が内南洋に領土を獲得し、米国と
西太平洋で勢力が対抗するようになっ
た。

英国も日本の強大化を嫌い、日英同盟を破棄し、支那における利権や市場の争奪で利害が対立するに至った。

このような情勢で、わが海軍の仮想敵国が米英になることは当然だった。

一方、新興の赤軍は、帝政ロシア以上の陸軍を建設し、わが北辺を脅かすようになった。満州事変以来、わが国防の第一線はソ満国境であって、欧州大陸の諸国と同じように、日本も初めて国境会戦を意識するようになった。陸軍の目はここから離れられない。

日本陸軍は北と西を向き、海軍は南と東に注目するという、複雑な姿勢になったことも肯定せざるを得ない。

それが、石油資源獲得がもとで、両方の目が否応なしに南に向いて行ったのである。

陸軍が、米英相手の作戦計画を、真剣に検討し始めたのは、十五年末である。海軍は以前から南を向いていたというものの、陸軍がその気にならねば、

計画は具体化しない。十五年末から両者は、互いに連絡を取りながら計画を進めた。

その作戦計画を説明することは、主
題から離れ過ぎるのでやめるが、要するに、陸軍が主体となって進攻するのは、香港、フィリピン、マレー、ジャワ、スマトラ、ボルネオ、ビルマ等であって、それ以外に大本営直轄の一支隊を、グアムからピスマルク諸島に進めるが、この方面の主体は海軍とされた。

一方海軍は、内南洋からピスマルク諸島、ソロモン群島、北部ニューギニア等の陸上基地の攻略をたとえ陸軍の派兵がなくても進める考えを持っていた。

後のことになるがソロモン群島のガダルカナル島に、最初の敵の反攻が指
向されたとき、大本営陸軍部の参謀は、
そんなところまで海軍陸戦隊が上陸していたことを、初めて知って驚いたという話がある。

とにかく、海軍は広大な中南部太平洋域を、独力でも抑えようと考えていたから、陸上基地を奪取するために、
唯陸戦隊だけでなく、落下傘部隊も自
ら持たねばならぬという考えを抱いた。
先にも述べた通り、陸軍がいつまで
も大陸の方を向いており、南方作戦の

具体的な検討に手をつけたのは、十五年末だったが、この頃、海軍は既に落下傘部隊の研究を始めていた。

陸軍も偶然同じときに落下傘部隊の研究を始めたが、これはまだ、南方で使うという確たる見通しを持ってのことではない。

さて、いよいよ主題に入るが、私は陸軍落下傘部隊の一員であり、その一部始終を「あゝ純白の花負いて」と題し世に問うたので、これと対比しつつ述べてみたいと思う。

海軍がドイツ落下傘部隊の活躍に刺
激されて、研究を始めたことは陸軍と
同じである。

十五年十一月、横須賀航空隊の中に、
実験部隊が作られ、山辺中尉以下二四
名が研究員となって、まず落下傘降下
の研究を始めた。

資料は皆無であり、飛行機事故で降
下した人の体験などを基礎にして研究
を進めた。勿論空挺部隊用の落下傘は
なく、偵察者用の落下傘を使うことと
した。

忍者のような身のこなし方ができな
ければ、危険だという論者があるかと
思えば、落下傘さえ完全であれば、誰
にでもできるという説を立てる者もい
る。暗中模索だった。

そこで、ダミーを使って何回も投下テストを行う一方、研究員達は毎日激しい体操をやり、機体からの跳出し訓練や、特別に工夫したブランコによる着地訓練で、無茶苦茶に体を鍛えた。

ところが、ダミーの投下テストでは八〇%ぐらいしか開傘しない。ダミーが回転するからである。姿勢さえよければ必ず開傘するという理屈になるが、人命に関する事なので、なかなか実降下に踏み切れない。

陸軍も、同じ頃同じようなことを浜松で実施していたが、お互い何の連絡もない。

いつまでも、体操ばかりやってもおれないので、翌十六年一月十五日、意を決して実降下をやってみた。使用機はダグラスで、とにかく、山辺中尉以下全員が無事に降下することができた。

陸軍の落下傘部隊は、二月二十日に初めて降下しているので、海軍の方が一ヶ月ほど早い。

ここで、余談になるが、日本で初めて落下傘降下をしたときのことを紹介したい。

大正三年のことである。わが海軍が、当時落下傘の世界的権威者である英国のオードリース少佐を招き、その指導のもとに藤吉中尉、田中少尉、猪薙一等水兵、蓮見一等水兵、それに陸軍の

飯島工兵中尉、民間の日野飛行士の計六人が、六週間の訓練を受けた。場所は霞浦だった。

最初は気球から水上に、次で気球から陸上に、そして三回目になって飛行機から陸上に降下した。

海軍ではこれを機会に、飛行船の救命具として落下傘を装備することになった。

陸軍では、霞浦で習った飯島中尉が、所沢に帰って研究を重ね、気球塔乗員の救命具としてこれ採用した。

初るときから、海軍の方が僅かに先行していたということは、興味深いことである。とにかく陸海軍とも落下傘の歴史は古い、目的が非常の場合の救命具だったため、実際に使った回数は徹々たるものだった。

話は元に戻る。

その後何か降下し、跳出し動作や着地姿勢などに成案を得た。その間研究員は七五名になり、六月には館山海軍砲術学校内に移り、陸戦兵器の研究と陸戦訓練を始めた。

この頃、陸軍の方は浜松が手狭になったので、満州の白城子に移り訓練を続けており、既に三〇〇人ほどの者が訓練を終っている。

九月初旬、海軍は十一月末を目前に

七五〇名の落下傘部隊二個を作ることきめ、それまでに一、五〇〇名の養成を命じた。部隊名を横須賀鎮守府第一特別陸戦隊と称し、館山には連日編成要員が各海兵団や艦隊から到着した、また九六式陸上攻撃機を改造した九六式輸送機も到着し、輸送機隊も編成された。

二カ月余りの期間に、一、五〇〇名も養成するということは、決定的な訓練だった。しかも始めたときには、落下傘が一五〇個位しかなかったという。

落下傘は東京の藤倉航空工業で作っていたが、出来たものは投下試験未了のまま送り込んできた。そこで、これを各人に交付し、自分で折畳んで投下試験を済せるという方法を取った。

デンマーク式体操二時間、ブランコおよび跳出し訓練一時間、落下傘折畳三時間、慣熟飛行一時間、飛行機・落下傘に関する学科一時間、——これが基礎訓練であって、次は自分の落下傘投下試験、その次は実降下という強行スケジュールだった。

このようにして、目標の期日までに一、五〇〇名の降下訓練は完了したものの、その間、開傘事故で二名、誤って海上に降下して一名の殉職者を出した。

開傘事故は、吹き流し状になって墜

ちたもので、陸軍でもそうだったがこれはなかなか原因が掴めない。これをきっかけに、訓練時は予備傘をつけることになった。

陸軍落下傘部隊では、七月に一名の殉職者を出している。このときは補助傘の紐が足からみ着いたためだった。——補助傘とは主傘を引出すための小さな落下傘である。陸軍も間もなく、予備傘のある空挺用の落下傘を使うようになった。

十一月十六日、軍令部総長以下海軍首脳部立会のもと、霞浦で最後の総合訓練が行われた。演習の構成は、霞浦飛行場占領ということ、三十数機の輸送機は、堂々の編隊を組み、百千の花が湖を見下す台上に咲いた。

この総仕上げの演習が終って、それぞれ七五〇名の降下員を基幹とする二つの部隊を編成した。

横須賀鎮守府第一特別陸戦隊(堀内部隊)と同第三特別陸戦隊(福見部隊)だった。

同じ頃、陸軍では教導挺進第一聯隊が、十月初にできており、十月中頃に参謀総長、陸軍大臣等首脳部が立会し、海軍が霞浦をやったと同じような総合演習を実施した。場所は宮崎県の唐瀬原であり、演習は、精油所占領を設想

したものだった。海軍より一ヶ月ほど早い、海軍が一ぺんに二個隊作ったのに対し、陸軍は二番目の聯隊が出来上ったのは、十二月の末だった。

メナド攻略作戦

編成早々の両陸戦隊は、十一月二十六日、徴用輸送船新田丸に乗り、密かに東京湾を出て台湾に向った。まだ開戦になっていない。

高雄に上陸して嘉義飛行場に入った。ここは陸軍の飛行場だったが、陸軍航空部隊は更に南の屏東、佳冬、潮州に作戦展開し、嘉義は空いていた。

輸送機隊もすぐに追及し、両隊は休む暇なく、降下訓練と地上戦闘訓練に明け暮れる。意気盛んであっても、二ヶ月余りの速成訓練では、どちらもまだ十分でない。ここでまた吹き流し状になって一人を失う。予備傘を着けていなかった。

十二月八日開戦、真珠湾攻撃の二ニューに基地内は湧き立つ。

陸軍落下傘部隊の挺進第一聯隊は、この翌日宮崎県新田原基地を出発し、南方に向うのだが、勿論お互には何も知らない。

嘉義にいる海軍落下傘部隊のうち堀内部隊は、十二月下旬、輸送機でダバオに前進した。

ダバオはミンダナオ島にあって、セレベス海を制する要地。陸軍の坂口支隊が十二月十九日夜ここに上陸し、激戦の末ダバオ市と飛行場を占領した。占領後海軍の基地航空部隊が、ここに進出し、警備も海軍が担当している。堀内部隊は、ダバオに進出して何をしようとするのか。

大東亜戦争の目的は石油資源獲得だが、その資源は、ジャワとスマトラにある。フィリピンやマレーは、目的地に行くための邪魔物のようなものだ。蘭印(今のインドネシア)の本拠はジャワであり、大本営としてはジャワ攻略を最も重視していた。

結果的には、ジャワは簡単に奪取されたのだが、初めはそう簡単には片付くまい上思っていた。

ジャワの北にはボルネオが横たわっている。これはジャワよりも大きい島だが、内陸には資源的にも軍事的にも価値あるものはない。そこで、ボルネオの両側を通じてジャワに迫るということになる。その進路に沿う作戦上の要点は、次々と奪取してゆかねばならぬ。要点というのは航空基地である。

東側の通路を扼する要点として、ボルネオ島のタラカン、バリックパパン、パンシエルマシなど、セレベス島の

のメナド、マカッサルなどがある。特にマカッサル海峡(ボルネオとセレベスの間にある海峡)の入口両側に頑張っているのが、メナドとタラカンである。

この方面の航空作戦は、海軍の第十航空艦隊が担当していた。第十一航空艦隊では、メナドかタラカンの攻略に、落下傘部隊を使う考えだった。

余談になるが、ボルネオの西側を通じてジャワに迫る進路に沿って、同じような関係位置にあるのが、パレンバン飛行場だった。パレンバン精油所は、戦争目的そのものだったが、飛行場は、ジャワ攻略の一布石だった。

この方面の航空作戦は、陸軍航空が主体になっていた。陸軍航空が主体になっていた。陸軍の落下傘部隊がパレンバン飛行場奪取に使われた。

ジャワ攻略の両進路に沿って左右対称の位置に、陸軍の落下傘部隊が期せずして使われたということ、興味深いことである。

さて話は元に戻り、海軍落下傘部隊の目標として、メナドとタラカンが挙げら

れていたが、一月七日になって、メナドに決定した。タラカンに降下するためには、ホロ島の飛行場を使わねばならないが、この飛行場の整備が間に合わなかったためである。

メナド降下は一月十一日。タラカンには、同じ日に陸軍の坂口支隊が上陸作戦を行うことになっていた。

いよいよその日、堀内部隊長の指揮する二個中隊三三四名は二八機に分乗し、〇六三〇ダバオ発った。研究員が初めて降下してから丁度一年でこれま

メナド攻略関係地点



でなくなったということは、どこの国の空挺部隊にも例はない。

行くこと三時間、セレベス島間近の洋上で想わぬ椿事が起きた。

味方水上機が、何を感じたのか攻撃を仕掛けて、輸送機を一機撃墜してしまった。高射砲が間違つて友軍機を射撃したという例はあるが、空中戦闘をやったということは、前代未聞である。戦争中は勿論極秘にされていた。

〇九五二、ランゴアン飛行場上空、対地高度一五〇で一斉に降下。飛行場にはトーチカがあり、滑走路には障害物が置いてある。投下した物料を拾う暇もなく、拳銃と手榴弾だけで応戦する。

味方の戦闘機が超低空で飛ぶが、彼我混淆して支援もできない。敵は装甲車まで繰出して来た。

物の力だけでは、敵側が絶対優勢だったが、二番目に降下した中隊が、敵トーチカ陣地の真上と背後に着地するに及び、敵が崩れ出した。防者と攻者の心理的な違いは大きい。激戦二時間でランゴアン飛行場を占領した。戦死二二名、重傷二六。

夕方までにカカス市街及び水上機基地も占領した。カカス市の北にトンダノ湖があり、ここに、速射砲や医務隊を乗せた飛行艇二機が着陸し、降下隊

と合流することができた。

翌十二日、後続の中隊七四名が降下し、この日の夕刻には戦闘機一〇機と偵察機一機が、着陸した。

前日未明、ケマとメナドにそれぞれ千数百名の陸戦隊が上陸したが、この部隊とも十二日昼頃連絡成り、メナド地区の攻略が完了した。

かくして、わが国が極秘裡に編成していた落下傘部隊が、初めて戦場に姿を見せたのだが、国民にはそれが発表されなかった。陸軍がパレンバンに奇襲的に使用しようとしていたので、海軍に対し発表を待ってくれるよう頼んだのである。

相手はどちらもおランダ軍であり、どれほど奇襲のたしになるか疑わしいが、海軍はこれを了承した。

パレンバン空挺作戦は、これより一月遅れ二月十四日に実施、翌十五日十分差で次のように発表された。

大本営発表(二月十五日一七〇〇)
帝国海軍落下傘部隊ハ去ル一月十一日「セレベス」島攻略ニ参加シ赫々タル戦果ヲ収メタリ

大本営発表(二月十五日一七一〇)
強力ナル帝国陸軍落下傘部隊ハ二月十四日一一二六蘭印最大ノ油田地帯タル「スマトラ」島「パレンバン」ニ対スル奇襲降下ニ成功シ敵ヲ撃破シテ飛

行場其ノ他ノ要地ヲ占領確保スルトト

モニ更ニ戦果ヲ拡張中ナリ
これを聞いた国民は、わが国が、陸海軍両方でこのような素晴らしい部隊を持っていることに驚き、かつ感激した。

そして戦争目的に直接撃りをもつ油田地帯を奪取したということで、陸軍落下傘部隊に、より多くの魅力を感じたことは否み難い。

海軍落下傘部隊に対しては気の毒なことだった。

クーバン攻略作戦

嘉義に待機しているもう一つの部隊、横須賀第三特別陸戦隊(福見部隊)をどこへ使うべきか、第十一航空艦隊司令部では迷った。

メナド降下作戦が予想外に損害多く、生れたばかりの精鋭部隊を、つまらぬことに使つてはならぬという考えがあった。しかし、漫然と待機させておいては士気に影響する。

嘉義からタラカンに招致した。バリックパン攻撃に使用しようとしたが、バリックパンの飛行場が、大したものでないことが判明して取りやめとなり、次でパンジェルマシンの攻撃に使う案も出たが、これもジャワ攻略にそれほど必要ないということで、見送った。

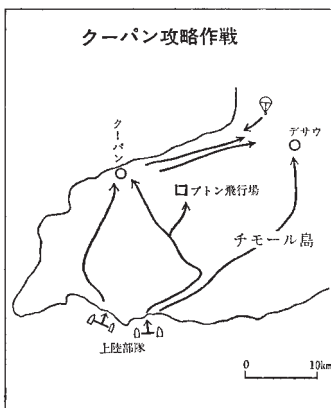
これらの目標は、マカッサル海峡を通過して東部ジャワに迫る進路沿にある。

ところが、蘭印攻略の進路は、セレベスの東側にもう一本ある。この進路の突き当たったところが、チモール島だ。この島を奪取するのは、ジャワの手足を挽き取るような具合になる。

結局、チモール島のクーバン飛行場を狙うことになり、海上輸送でセレベス島のケンダリーに進出した。

チモール島は、東半分がポルトガル領、西半分がおランダ領、陸軍の東方支隊(第三十八師団)の一個聯隊基幹が、クーバンとデリーに上陸するが、それに先駆けてクーバンに降下することに決定した。

メナド作戦で、敵飛行場に直接降下し苦杯をなめたので、今度は飛行場東北方四キロの草原に降下することにした。



前回と同じく、第一日は二個中隊(三〇八名翌日残りの三二三名が降下する。輸送機は二八機が二往復という計画だった。

二月二十日一〇三〇計画通りに降下する。草原と思ったのは膝を没する湿地だったが、敵がいないので、完全に武装を整えることができた。

態勢を整え道路沿いに飛行場目掛けて前進すると、敵の兵舎がある。これは難なく占領したが、やがて飛行場方向から次々と敵が現れ激戦が展開された。装甲車も機銃を掃射しつつ突進して来る。

この日未明、わが陸軍部隊はマリー岬に上陸し、クーパン市に迫りつつあったが、クーパン附近にいた二、〇〇〇の敵は、これに怯えて東方に退却した。後で判明したことが、落下傘部隊がこの敵の退路を遮断する恰好になったのである。

窮鼠猫を咬むというが、この敵がなかなか手強く、戦死二四、重傷三五の損害を被るに至った。

翌日、プトン飛行場(クーパンの飛行場)に到着したが、そのときは、落下傘部隊の一部で陸軍と一緒に海路上陸した者の方が、先に飛行場に到着しているという奇妙なことになった。

ここでクーパン降下作戦の話から離れるが、目標の直上に降下するか、離隔して降下するかということについて、史的考察を試みたい。

海軍落下傘部隊は、初陣のときはランゴアン飛行場の直上に降下し、苦しい思いをした。二回目には大事をとって、プトン飛行場から離れて降下したため、上陸部隊の後塵を拝するという結果になった。

面白いことに、陸軍落下傘部隊はその逆をいった。

パレンバン飛行場を攻撃する際は、奇襲の利を最大限に發揮するためには、飛行場直上に降下したいと思いつつも、物料収集し態勢を整えるまでに、開濶地で敵火に薙ぎ倒されることを恐れ、飛行場の両側に降下した。

このときは成功したが、勝因は敵の戦意が乏しかったことに依るとみてもっと強い敵に対しては、更に強烈な奇襲を加えなければならぬと考えた。

それには降下時身につける兵器についても改善を要するが、とにかく、降下即ち突撃という根本原則を打ち建てた。

クーパン攻略作戦より二ヶ月後になるが、陸軍落下傘部隊は、ビルマ進攻作戦の渦中に投じ、ラシオに降下して退路遮断に任じようとした。

この作戦は、発進後天候不良で引返となった。

一次降下部隊は、ラシオの兵営の直上に降下しようとした。この頃は、パレンバンのときと違い、新たに支給された機関短銃(機関銃の小型のもの)を身につけて降下することができたことも、この戦法採用の一因ではあった。

なお、その日の午後、ラシオ飛行場に降下する第二次部隊は、先遣隊を飛行場に強行着陸させ、その援護の下に降下する苦だった。

いづれにしても、目標に直接飛込んでゆき、奇襲の利を最大限に収め、物的戦力の弱体をカバーしようと考えていた。

三十数年を経た今日、海軍落下傘部隊を批評しようとは思はぬが、メナドやクーパン作戦当時、降下戦闘の要訣をどのように考えていたのか、お尋ねしたい気がする。

サイパンで玉砕

その後、両降下部隊とも濠北方面の警備についていたが、南方に対する進攻作戦は半年で一段落したので、内南洋部隊に編入され、マーシャル群島に移った。

十七年十月横須賀に帰還し、一個隊に改編し、横須賀第一特別陸戦隊だけ

となった。

久里浜を基地とし、新に開発された落下傘を装備し、携行する兵器も改善を加え、戦力は格段の向上をみた。降下訓練は主として木更津で実施した。

十八年に入り戦局逼迫に伴い、サイパンの防備強化を急ぐことになり、十八年九月、聯合艦隊の指揮下に入り、サイパンに進出した。

既に落下傘部隊としてではなく、海軍の最精鋭陸戦隊という取扱を受けていた。

更に南東方面の戦局悪化に伴い、ソロモン群島モノ島に、潜水艦で潜入し後方攪乱に任ずるため、一部の部隊を差出したが、作戦取止めとなり、この人員はトラック島で終戦を迎えた。

サイパンに残った主力は、十九年六月、敵の上陸を迎え、華々しく戦って玉砕した。



メナド降下の油絵

「中国を読む」

会員 深堀 道義

はじめに

わが国にとっては、日中と中米の2国間関係、及び日米中3ヶ国の相対的關係が最も重要な対外問題となっている。とりわけ中国は隣国として長く且つ深い関係がある。一つは文字を始めとする文化を取り入れた古代からの係わりと、19世紀末よりの戦争の歴史である。そして最も重大な因子は、大戦後間もなく中国共産党（以下中共と略称する）が中国大陸を支配し、ソ連と協力して反米政策をとり、アメリカの勢力下にある日本に対しても、反日政策をとるようになったことなのである。

中国は政治の国である。中国との交渉にあっては陰謀・偽善・虚言・欺瞞・背信などが常に渦巻いているのであり、それをどう読むかの能力がなければ、してやられてしまう。4千年来培われてきた彼等の資質なのであって、島国育ちの日本人は概してお人好しであり、いように扱われている実態を知らねばならない。多くの日本人はそれに気がついておらず、こんなままでは中国の属領にされかねないのである。

日本はアメリカの占領下にあったので、その間は外交そのものがなく、講和後も日米安保体制のもと完全な自主外交は行なえず、外務省は相手国の言いなりの政策しかとれないような、国益を損

ねる無能集団になっている、と言ってよい。

筆者は中国海軍史を研究し、中国民族のその大部分を占める漢民族の性格を考察し、又中国人との交際によって知り得た経験を元に、現在中共政府が日本に対してとっている行為、行動をどう読むかについて、日本人々に知って欲しいと思ひ、筆をとったのであり、些かなりとも読者の参考になれば幸いである。

江沢民政権はなぜ声高に 歴史認識の問題をいうのか

北清事変の時、といっても北清事変を知らない世代も増えたから説明すると、19世紀末山東省で起こった義和団による反キリスト教運動が排外運動に発展し、丁度百年前の1900年に義和団は北京に乱入して、外国公館と外国人を襲うようになった。そこで日英米仏独墮伊露の8ヶ国は居留民保護に出兵した。日本は地理的にも近いので最も多い兵力を出し、最も勇敢に戦い、軍紀も厳正で世界中から賞賛の声を受けた。なおこの時、暴行、掠奪を恣にしたのはドイツ兵とロシア兵であった。

日本軍はこのように軍紀厳正であったが、战斗中は民衆との間にトラブルが起ころのは避けられない。清国側が日本側に抗議した時、イギリス公使は日本公使に忠告した：「絶対に謝るな、たとえ日本兵の方が悪くても謝ってはならぬ」と。南京事件の時、といっても今中国側がいつている虐殺問題ではない。1901年、蒋介石の国民革命軍

は広東より北京への進撃を開始した。世にいう北伐である。蒋介石の直系の部隊は規律は正しかったが、途中から加わった軍閥の兵士は、戦争は暴行、掠奪、強姦が自由な時と心得ていたから、国民革命軍が南京に入った時には、彼等は狼籍を働き、各国の領事館も襲撃された。その時、揚子江にあった英米の軍艦は、革命軍に対して砲撃を加えた。英米の軍艦と並んで日本の軍艦も碇泊していたが、対中国外交を考慮に入れて砲撃しなかった。

事件後、中国側は日本が砲撃を加えなかったことに感謝の意を表し、英米に対しては抗議を行ったが、彼等の肚の中は次のようなものであった：「日本は自分の国の領事館が襲われ、日本人が殺されながら撃つてこなかった、侮るべき行為だ。英米はさすがに怖い、恐るべき存在だ」というものであった。

中国人の性格は日本人のように単純ではない。日本人は単純というのに反論したい人もあろうが、それは島国日本の中に於いての日本人同志間のことであり、多民族と国境を接した西欧人、広大な土地で多民族が住んでいるのと同様の中国人は、日本民族に比べれば如何に生き、如何に勝つかの処世術を身につけているといつてよい。日本政府の外交下手といわれるのは、実にこのような民族性に関係がある。

さて、中国人はこちらが下手に出ればつけ上がるし、上手に出れば反抗するという性格を持っている。中国政府も同様である。この南京事件は日本側が下手に出たわけではない。温和な姿勢を示

したに過ぎないが、強硬姿勢を取った英米に比べれば、侮られるだけだったのである。戦前の日中関係では、日本は結構強い姿勢を取っていて、彼等のナショナリズムを目覚めさせてしまった点もあったが、英米に比して日本は組し易いと見られ、毎日↓反日↓抗日へと進ませてしまったのは、硬軟両方で日本はその外交政策を失敗した結果に他ならない。

第二次大戦で日本は敗れた。当時、日本人の大部分は中国、その頃は支那と我々は称していたが、その支那に負けたという認識はなかった。アメリカにやられたと思っていた。蒋介石の対日政策とその態度から、即ち蒋介石の共産軍への対策上、日本及び日本人を国民政府の味方に付けておきたいということもあって、日本人は中国に対して卑屈になることはなかった。けれども毛沢東の共産党が内戦に勝って大陸を支配下に置き、反米反日を叫ぶようになってくると、それに応えるかのようになり日本国内にも進歩的と称する左傾学者が勢力を占めるようになっていたから、日本の侵略戦争という定義づけが行なわれ、以後日本は、政府も国民の大部分も謝罪一辺倒になり、その有様は揉み手でひたすら頭を下げる、下手、下手の態度しか取れなかったのであった。中国が最も恐れている国はアメリカでもなく、ロシアでもなく、日本なのである。近代に入って明治7年の日本の台湾征討、そして日清戦争、北清事変、満州事変、支那事変と中国は日本に叩かれ放しなのである。しかし中国人の心の中に、日本は怖いという先入観を抱かせるようになったのは実はもっと昔の

「倭寇」だったのである。明の後期から清に至る約3百年間、中国沿岸は倭寇に襲われ、時には内陸深くまで進攻されていた。倭寇は強かった。中国人は恐れた。そこで中国の盗賊たちの中には倭寇の名を騙るものが多く、時には倭寇の9割は中国人の盗賊集団であるほどだった。

このように最も恐ろしい東の小島の日本が、自分の国の脅威にはならないのは、中国にとっては願ってもないことなのである。毛沢東、周恩来から鄧小平に至る時代は、反米反日を唱えていた時期もあったが、彼等の見方からすれば、日米安保条約はあっても、それは米軍による日本占領の継続と思っていたから、安保条約は日本にとっても望ましいことだ、などと称していた。

然し日本の経済力は強大になり、軍事技術の面でも米国に劣らない力をつけてくると、安保条約は日米同盟の様相を呈してきた。中国は日本が再び強力な力を持つことを恐れるようになり、日本人の心、即ち戦後50年を経て漸く普通の国家として自力自存しようとする民族としては当たり前その心の芽を摘み取ろうとした策略が、歴史認識の問題なのである。

中国の称する歴史認識とは…侵略、虐殺、暴行、強姦、慰安婦というような、人の心の中の表面化されたくない恥部を、あからさまに、誇大に、時には無実の話を声高に述べたて、日本人の贖罪の意識を煽り立てる、その結果は日本人は常に中国に対して謝罪し続け頭を垂れたままでいる。実に巧みな彼等の戦術なのであり、一度謝ればもっともっとと声高に出てくるのであって、これが日中

間の現実の姿なのである。

この中国の策略が成功を収めているのは、日本の中にそれに同調する少なからざる勢力、その大部分は一部の学者とジャーナリストであるが、中国人は自分が吠えれば、日本人も一緒に吠えてくれる階層があることを認識しているし、場合によっては日本のその階層が中国に吠えさせて、それによって自己の主張を顕在化させようとするこゝさえあるのであって、実に憂慮に耐えない。

もう一つ注目しておきたいのは、江沢民の共産政府が殊更に歴史認識の問題を言い立てるのは、国内に不安材料が存在するからである。古来より国内政治に不安がある時には、国民の目を外に向けさせるのは、施政者のとる万古不変の政策なのであって、特に独裁政権の場合がそうである。中国は共産党（既に本質的には旧来の共産主義政党ではないが）の一党独裁の国なのである。

日中間の歴史認識の問題は、鄧小平の時代、彼の来日、天皇の訪中により一応の解決を見て沈静化したのであったが、江沢民政権になって蒸し返され、却って悪化し憂慮すべき状態になっているが、これを世界の動きの中で捉えてみると、中国側のこの政策は成功を収めつつある。即ち世界の国々に中国のいうのが正しく、日本は言い逃れをしているのか、又は謝っているのだと取られている。中国は日本を悪者することに依って、国内にあるおぞましい人権問題などから世界の目をそらそうとしていて、中国がアジアでの覇権を制するには、日本を叩かねばならない。武力ではなく心理面で勝つ、孫子のいう「武力を用いずして

勝つ、これ最良の戦略なり」を行なって、ある程度の成功を収めつつあるのではないだろうか、南京大虐殺についての欧米の反応を見てみると、そう考えざるを得ない。

こうなったのは、日本政府が有効な対策を取らずに頭を下げ続け、他の外交上の問題で、正当な主張をするべきことでさえ遠慮しているからなのである。中国側が益々尊大になり増長してくるであろうことは、冒頭に出した事例からも十分に予想されるのである。中国に倣って北朝鮮も日本側に対し歴史認識の問題を執拗にわめき立てているが、わが国の東アジアに対する外交を、国益を損なわずに、国の威信を傷つけずにやっていくのは、難関に差しかかっていることを認識せねばならないのである。

中国人と賄賂

これは、昭和の初期に日本に来たことのある中国人の間で語られていた「笑話」である。

『日本に来た或る中国人が、日本の役所の裏口から中に入っていたら「賄賂」という部屋があった。その中国人は、「フーン、日本の役所は大したものだ、賄賂の受渡しをする部屋がある」と、感嘆した。更に進むと「御婦人」と書いてある所があった。中国人は、「フーン、これは魂消た、婦人を御する部屋まであるとは、日本の役所は大したものだ」と、感嘆措く能わざるほどであった』

さて、この「改革」誌を読まれる方に対しては、何の解説も必要はないと思うのだが、若い読者の

ためにいえば、「賄賂」は厨房のことであり、「御婦人」はトイレのことである。御するという動詞は……いわずもがなだ。

閑話休題——わが国でも太古から賄賂はあり、現今も毎日のように新聞紙上をにぎわしている。けれども日本人は、それを隠れて行い、如何にばれないようにするかに腐心する。即ち、罪の意識がある。

けれども、中国人には賄賂についての罪悪感はない。その身分と地位に応じたことをしていれば、問題にされることはない。例えば、派出所（中国にも派出所はある）に居る警官が、少し小遣いが欲しいと思った時、客待ちで駐車しているタクシーの運転手に、「ひげが伸びている」とか「服が汚い」などといって免許証を取り上げる。そして派出所で待っていると、運転手が日本人の感覚でいえば2〜3千円くらいを持ってくる。難しいのはその頻度と金額で、度を超すと訴えられることになる。その度合いは中国人同士でないと解らない。

鄧小平が開放政策を唱え出した1980年代中頃、外国貿易や旅行ができるようになった時、「走后門」という話が流行した。走は走るという意味ではなく、行くという意。后門は後門で裏口のこと。即ち、パスポートをもらうにも、貿易の許可を取るのも、ドルを入手するにも、裏から手をまわさない限り、手続してもらえないことから、生まれた言葉であった。

その頃、日本人と結婚して来日した女性に聞いてみたところ、それは本当のことで、何でも「走后門」をしない限り、事は進まなかったと言って

いた。平成5年頃日本の企業に来た中国人（彼は一流大学出のエリート）に、まだ「走后門」は流行しているのかと聞いたら、いや、そんなものではない、今は「送賄受賄」だ、裏口に行かずとも大っぴらに行われている、と言っていた。

ここ数年來、中国の汚職、腐敗が根深く進行し、江沢民政権が屢々その是正に警告を発しているという新聞報道を目にする。1980年代の経済開放に伴って、経済犯が一気に蔓延し、止まる所がないような状態になっていると見てよい。

見せしめに、敢て高級幹部の処刑も行っている、けれども、構造的なものであるから、益々ひどくなることは有っても改善されることは無いであろう。本来ならばそろそろ共産革命が再び起ってよいような政情なのである。1930〜40年代のように、若き毛沢東のような勢力によって、今の共産政権を倒すような、共産革命の芽生えが起ってもよいような社会情勢であるが、昔と違って大都市の住民は、金儲けに狂奔し、農村は逼塞しているが、農民は出稼ぎに逃げ場を求めている現状では、今すぐに爆発する情況には至っていないが、地下のマグマが動き始めていることは、歴史的な動きの中から、十分に窺うことができる。

第二次世界大戦が終わって、そう時間をかけずに国民政府は共産軍によって大陸より追い払われ、台湾へ逃げ込まねばならなかったが、それは蒋介石の国民党による統治の腐敗によるものでしかなかった。

戦争が終わって住民たちは、何かしら新しい時代への曙光を求めていた時、重慶政府から役人が

来て、白本軍に接收されていた物件の回復事務にやって来た。日本軍に土地や建物を使われていた者は、やっと返ってくると思っていたのが、重慶政府から来た役人たちが、国家として接收するのではなく、その役人個人の財産として取り上げてしまうようなことが公然と行われ、人民たちの心は、きれいだと思われていた共産党へと靡いてしまったのであった。今でも中国人は、1950年代が一番良い時代であったといっている。この10年間は毛沢東の共産党が、新しい人民共和国を設立して以後の10年間であり、革命の情熱と共に、古い時代の破壊に全力を入れており、人民が等しく貧しかったので、中国伝統の賄賂、汚職、不正が行えない環境にあったからである。

ところが、文化大革命が終り、世情も落ち着いてきて、経済の開放策によって、懐が温くなる人が増えてくると、中国人の体臭となってしまうている、賄賂↓不正蓄財の血が黙っていらなくなり、現在もそれが衰えるところを知らないのである。

戦前の国民政府の時代も同様であった。そして日本との戦いの間も、同様であった。昭和16年12月8日、日本が対英米戦に入ると、米軍は同盟軍として中国戦戦へ、その航空部隊が入って来た。

その頃の米軍の指揮官たちと、中国陸軍の指導に來た軍事顧問団が見たのは、腐敗にまみれた重慶政府であって、延安にある共産政府とその軍の方を高く評価していた。こういうことから、第二次大戦中の米英ソ中の首脳会談でも、蒋介石は常に軽視される立場にあった。勿論、有色人種に対す

る白人たちの潜在的に持っている蔑視の感を否定することはできないのだが。

腐敗の最も激しいのは、公安（警察）と軍であるといわれている。下級警官や兵士の俸給の少ないことから、冒頭に述べた警官の行為のようなものは大目に見られている。解放軍兵士の行為としては、軍用車のナンバープレート民間に貸すことによる収賄である。軍ナンバーをつけた車は、渋滞にあっても、優先専用車線を走れるからである。

けれども、軍について言えば、軍は自ら稼ぐことを認められていることに起因するようだ。これは延安時代の共産軍は、半軍半農の組織であって、自分の喰い扶持は自分で稼ぐという習慣の名残である。軍が経営する商社やホテルがあるのは全く奇異に感じるのである。

軍司令官は、ペーパーカンパニーを作って自分の部隊が購入する物品はそこを通させてピンはねをする。艦長は密輸品を運んで収賄する、連隊長は実弾を射たせる射的場を経営する等々。首相朱鎔基はこれを憂いて、軍の商売禁止を2年程前に提案したが、軍はそれを拒否したまま現在に至っている。軍に背かれたら政権は維持できない。

中国史を繙くと、秦漢隋唐宋元明清と続いた王朝は、長いのは三百年、短いのは三十年で倒れている。中世以降を見ると、政と軍の腐敗が因をなしているが、清朝では末期になると、宗教による反乱が見られる。即ち、白蓮教徒の乱、天理教徒の乱、太平天国の乱が起こっている。中華民国は対日戦、第二次世界大戦の影響で約40年で倒れたが、共産政権は既に50年余続いているが、軍の荒

廢と共に宗教に絡んだ法輪功の反政府運動が起こって来たことは、共産政権が末期に入ってきた象徴的な動きと捉えてよいのかも知れない。

末期に入れば、内乱の起こるのは必至である。元來、北の北京と、南の広州はそりが合わない。蒋介石は広州を拠点にして国民革命軍を興して北伐を行い、北京を占領して民国を統一した。数年前に広東軍区が葉儉英の子息を担いで反乱を起こすと聞こえて来たが、事前に安定されたようだ。現在の北京政府は、江沢民一派の上海閥に支配されている。北方の人脈が反撃する可能性もある。北京人と上海人も仲は良くない。

最も懸念するのは、国民の混乱を対外強硬策によって、民心の統一を計ろうとする手段で台湾問題、南沙群島問題、はた又対日問題などで武力を行使する暴挙に出ることである。

古典詩に見る人民の声(編者)
詩経国風 魏風

伐 檀
坎坎と檀を伐り
之を河の干に奠く
河の水清くして且つ漣だつとや
稼もせず稿もせざるに
胡んぞ禾の三百塵を取るや
狩りもせず狐もせざるに
胡んぞ爾の庭を瞻るに梟けし貉有るや
彼の君子は
素に餐わさるに
はじめの三句は自分等の働いている様をべている、そして権力者は農耕もしないのに稲を三百軒もぶん取るのか。狩猟もしないのにお前の庭には貉がぶら下がっているのか。君子は働かないでは飯を食うことはいというのに。

海軍終局期の特攻作戦

パナマ運河爆破計画

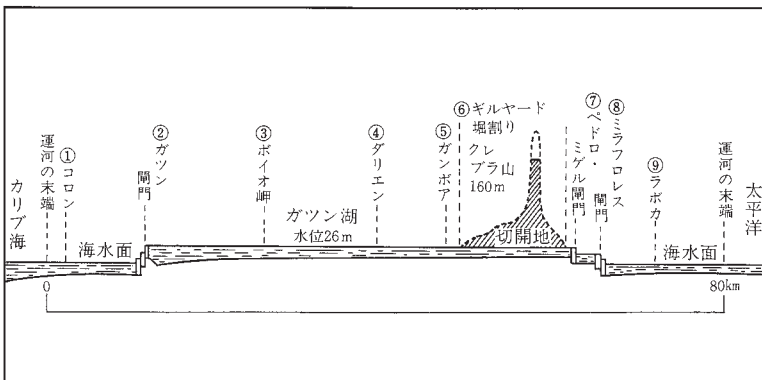
実施されなかったけれども、特異なものとしてパナマ運河爆破計画を挙げよう。

排水量三五三〇吨、水上攻撃機二機搭載の特型潜水艦の建造が戦備計画に組み入れられたのは昭和十七年（一九四二）六月のことであった。当初十八隻建造の計画で、その第一艦「伊号第400潜水艦」が十八年一月呉工廠で起工された。その後戦局の急速な進展のため建造隻数が五隻に縮小され、そのかわりとして「伊13潜」型潜水艦四隻を水上攻撃機二機搭載して特型に準じて使用することに計画が変更された。

「伊400潜」も排水量五二〇〇吨、三機搭載に変更したため工事が遅れて、十九年十二月ようやく竣工した。

搭載予定の水上攻撃機は昭和十七年五月に「十七試攻撃機」として計画要求を出したもので二五〇kg爆弾一個携行の双浮舟二座機である。十八年十二月第一号機が愛知飛行機会社で完成。「晴嵐」と呼ばれることになった。

軍令部では比島沖海戦直後、「特殊戦略作戦部隊として、晴嵐搭載艦を以って潜水戦隊を編成する」目的で、第一



パナマ運河断面図



パナマ運河地帯



パナマ運河



▲特殊爆撃機「晴嵐」 搭乗員2名、発動機単発1400馬力、最大時速高度4000米において254軒、航続距離610～830海里、武装13耗旋回機銃1、爆弾800kg 1。

潜水戦隊の編成準備に着手した。パナマ運河破壊をねらったもので、大西洋側の開門を破壊すればガソン湖の水位が低下して当分大型船が通行できなくなるという着想である。

昭和十九年十二月十五日「晴嵐」をもって第六三一海軍航空隊を編成、第六艦隊に編入して横空で訓練を開始した。潜水艦は予定より遅れて同年十二月十六日「伊13潜」、同月三十日「伊400潜」が竣工したので、両艦をもって同日付第一潜水隊を編成、第六艦隊に編入した。その後「伊401潜」が二十一年一月八日、「伊14潜」が三月十四日に完成して第一潜水隊に編入された。第一潜水隊の準備ができたときには、戦況はすでにパナマ運河攻撃よりもウルシー攻撃を必要としていた。この巨大潜水艦はウルシーに向う途中終戦を迎えたのであった。

「玄」作戦

昭和十九年二月、米機動部隊がマーシャルの泊地を前進基地とするようになると、大本営海軍部は、特殊部隊をもってリーフを乗り越えて環礁内にある米在泊艦隊を攻撃しようと考えた。このため特殊水陸両用戦車（特四式内火艇）を開発し、これを潜水艦から発

進させようとして準備を進めた。この考え方にはさき述べて「雄」作戦計画のなかにも組み入れていた。「雄」作戦が流れた後も、この考え方は受け継がれ、「龍巻」作戦という名で準備を進めた。しかし完成した水陸両用戦車の性能が貧弱で、この計画は断念するほかなかった。

回天の準備が進むとともに海軍部と聯合艦隊は、回天で泊地にある敵艦隊を攻撃しようと企図した。回天は大きな航続力(十二節七八杆、二十節四三杆、三〇節二三杆)をもっており、潜水艦から発進させて奇襲を敢行すれば、大きな効果を期待できると考えられた。後述の「丹」作戦に対照して、この潜水艦と回天による敵泊地奇襲攻撃を「玄」作戦と呼称するようになった。

十一月三日、奇襲決行を目標として準備を進めていたが台湾沖航空戦と比島沖海戦のとき潜水部隊全力による攻撃を命じたため、回天搭載工事済みまたは工事中の潜水艦が全部出撃してしまい、「伊36潜」が機関故障修理のため一隻残っただけとなった。

大津島で必死の訓練を強行していた回天十数基は、十月中旬になると出撃可能な状況になった。また回天の防水の技術的な問題も解決したので、海軍部と聯合艦隊司令部はいよいよ「玄」

作戦決行の決意を固めた。印度洋作戦から帰った「伊37潜」、新造艦の「伊47潜」と前記「伊36潜」に各艦四基の回天を搭載して、ウルシーとパラオ本島北側の泊地コッソル水道をねらうことになった。回天四基のうち二基は艦内から乗員が交通筒で出入りできるが、他の二基は潜水艦がいったん浮上して上甲板から出入りするようになっていた。そのため、隠密奇襲を重視して暗夜を選び、十一月二十日早朝攻撃にきまつた。

「回天特別攻撃隊・菊水隊」と呼ばれた三隻の潜水艦は十一月八日大津島を出撃して、「伊38潜」はコッソル水道に、他の二隻はウルシーに向かった。十一月二十日午前五時五八分、大和田通信隊はウルシーの敵部隊が「空襲警報」を発し、また作戦緊急信を発信するのを聞いた。「伊47潜」は二十日未明四基発進、大火柱および付近大震災を二回確認、哨戒艇を発見したため潜行したが、大爆発音数発を聴いた。「伊36潜」は同じ頃、一基のみ発進(三基故障)、攻撃を受けたため戦果を確認できなかったが爆発音を二回聴いている。コッソル水道に向かった「伊37潜」は攻撃の前日、コッソル水道付近で撃沈されたことが戦後判明した。

第二次「玄」作戦

第六艦隊では聯合艦隊の命令(機密命令作特第五号)により、昭和十九年(一九四四)十二月八日、第十五潜水隊所属の潜水艦六隻をもって「回天特別攻撃隊・金剛隊」を編成し、第二次「玄」作戦の準備を開始した。

各潜水艦の攻撃地区は次のとおりであり、二十年一月十二日攻撃決行とされた。

伊36潜 } ウルシー

伊48潜 } (ニューギニア中部北岸)

伊47潜 } フンボルト湾

伊53潜 } コッソル水道

伊56潜 } アドミラルティ、ゼアドラ港

伊58潜 } グアム、アプラ港

ただし、「伊48潜」は出撃を一月九日、決行日を二月二十一日とされた。

「伊47潜」は十二日午前三時十六分

二六分間に四基発進、水上避退中に

フンボルト湾に大火焰の上がるのを認

めた。「伊53潜」は十二日午前三時四

九分一五六分間に四基を発進したが、

うち一基は発進後爆発を起こして沈没、他の一基は漏気および悪ガスのため搭乗員人事不省となり、人員救出後回天を沈没させた。同艦は水中避退中に大爆発音二を聴取した。「伊58潜」は十

二日午前三時一〇分―二七分の間に四基発進、水上避退中に敵機影を認めたので深々度に潜航、ために命中音は聴取しなかった。しかし午前五時三〇分アプラ港から黒煙二条が天に沖するのを認めた。「伊36潜」は敵陸上レーダーに見えられて潜航中に爆雷攻撃を受け、回避中に座礁、離礁に成功したのちの十三日午前三時四二分―五七分の間に四基発進、水中避退中に大爆発音四を聴取した。「伊56潜」は再三発見されて攻撃の機会を得られず、十五日再度奇襲に努めたが発見されて不成功におわった。二十一日ウルシー攻撃予定の「伊48潜」は出撃以後消息を絶つたまま未帰還となった。

「伊48潜」を除く他の五艦は、一月二十一日から二月三日の間に呉に帰着した。



昭和20年1月9日、ウルシーに向かって大津島を出撃する金剛隊を載せた「伊48潜」。



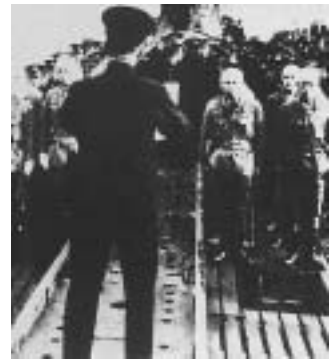
伊58潜の金剛隊



伊53潜の金剛隊



伊47潜の金剛隊



伊36潜の金剛隊

「丹」作戦

昭和十九年（一九四四）二月にマーシャル諸島の主要島嶼を失い、米高速空母群がその前進泊地を同諸島に進めてから、大本営海軍部は米正規空母群を泊地で攻撃することを企図した。わが基地航空部隊と機動部隊艦載機を主力として米艦隊をクエゼリン泊地に撃滅しようという「雄」作戦は五月末か六月初頭の月夜に行う腹案であったが、聯合艦隊司令部の壊滅により実施に至らなかった。

大本営海軍部はマリアナ失陥後も、基地航空部隊による敵泊地奇襲の企図を捨ててはいなかった。昭和十九年七月二十一日の「聯合艦隊の準備すべき当面の作戦方針」のなかでも「努めて奇襲作戦を行い特に好機敵艦隊を其の前進根拠地に奇襲漸減するに努む」と指示されている。海軍部はこの「あ」

号作戦以後の敵泊地航空奇襲攻撃を「丹」作戦を呼称していた。

昭和十九年十月三日の満月を中心とした前後十日間に敢行を計画した「丹」作戦は、次のような計画であった。

一、使用兵力

偵察隊 偵察第一一飛行隊 彩雲六

機

攻撃隊 攻撃第五〇一飛行隊 銀河三

六機 攻撃第二六二飛行隊

天山一八機

二、作戦要領

偵察隊 トラックからポナペまたは

ナウルを利用し、メジューロ、ブラ

ウン、クエゼリン、アドミラルティー

諸島を偵察

銀河隊 薄暮に到着するよういっきよ

にウエークまたはトラックに進出

して補給し、当夜黎明前にメジュー

ロ、クエゼリン、ブラウンを奇襲。

天山隊 機宜硫黄島およびバガンを

経てトラックに到り、その後薄暮

ポナペに躍進、銀河隊と協同作戦

する、状況により躍進基地を硫黄

島、南鳥島を経てウエークとする。

十月三日、硫黄島に進出した彩雲五

機は、翌四日マリアナ方面の偵察を行っ

たが空母を認めなかった。通信諜報で

も前日の三日に機動部隊が西方に向け

て出動したと思われた。「丹」作戦は

次の月明期間まで延長されたが、台湾沖航空戦と比島沖海戦のため作戦使用兵力を消耗したので、次回に決行できたのは翌二十年になってからであった。

第二次「丹」作戦

米機動部隊関東東来襲二日目の昭和二十年二月十七日、豊田聯合艦隊長官は、そのウルシー帰着の好機を捕えて奇襲攻撃を断行することを決意、宇垣五航艦長官に対し「銀河二四機を基幹とする特別攻撃隊を編成し、ウルシー挺身攻撃を準備」するよう命じた（信電令作第一号）。進撃路として沖繩経由の第一案とトラック経由の第二案が考えられたが、二十二日に至って南九州鹿屋基地からウルシーに直行することになった。沖の鳥島で機位を確認したのちはウルシー北西二〇〇海里に待機する潜水艦に誘導させようという計画である。

二月二十日、宇垣五航艦長官は特別攻撃隊の編成を命じ、攻撃隊七六二空銀河二四機と誘導隊八〇一空二式飛行艇五機で編成、攻撃二六二飛行隊長黒丸直人大尉を指揮官として「菊水部隊梓特別攻撃隊」と命名された。八〇〇艇通常爆弾一個携行一艦に三機突入と定めた。

通信諜報により米機動部隊は三月七日ウルシーに帰投したと判明したので、豊田長官は三月十日決行と予定し、トラックの彩雲に偵察を命じ、ピケット用潜水艦に進発を命じた。三月九日彩雲はウルシーを偵察し、正規空母五、巡改空母三、特空母七、戦艦八等の在泊と正規空母四、戦艦三その他が入港中であることを報告した。十日午前八時三〇分、攻撃隊が鹿屋基地から出発を開始した直後、第四艦隊からウルシー偵察の写真判読の報告が入電したが電文に不明の点があったため、字垣中将はその日の決行の中止を発令した。

第三次、第四次「丹」作戦

三航艦と五航艦から各一二組を選出して五月一日「第四御盾特攻隊」を編成し、南鳥島経由トラックに進出して、五月中旬ウルシーを攻撃する計画を立てたが、南鳥島とトラックが今までにない執拗さで爆撃されるので、計画を変更し鹿屋から直接攻撃を行うことにして五月七日決行された。準備した二四機のうち発進時に故障四機墜落一機が出て、一九機が予定より遅れて午前六時四五分発進した。途中機械故障のため引き返すものが多く、沖の鳥島で密雲を突破したものは五機となり、さらに敵機に遭遇したことなどで攻撃を断念して帰投した。

このあと十日の再決行は天候不良のため十二日に延期され、さらに十四日となったが、この日九州南部に米機動部隊の来襲あり、ついに本作戦は取りやめとなった。

ウルシー攻撃のため待機させていた銀河二五機で八月はじめ台湾からレイテの奇襲攻撃を企図したが、敵機動部隊が行動を続けるので、実施の機を得

ないままに八月十五日を迎えた。
編集委員会の「海軍」第6巻より



菊水部隊隊梓特別攻撃隊



二式大艇に乗組む801空の誘導隊

入会勧誘の方策について

田中 賢一

特攻戦没者の慰霊祭をやっても現在のマスコミは関わりあってくれぬ。テレビにも出ないし新聞にも載らぬ。結局参列した者がよいことをしたと満足するだけに終わってしまう。

特攻の史実と特攻隊員の精神を広く末永く伝えるには、会員をふやし会報を多くの国民に読んでもらうことが、後に続くを信じて征った特攻隊員に伝える方途であります。

三月から四月にかけて私が出席した四つばかりの小会合で、本会報4〜6頁に掲載してある「特攻隊員とその母」をコピーして配布し、要点を読み聞かせましたところ感銘し、累計で六〇人ばかり新に入会しました。しかし私も齢で発音が不明瞭、読み聞かせることが難儀なので、テープに録音してもらうことにしました。二元来この記事は「朗読劇」と書いておいた通り、男性女性が該当箇所を読み上げるように作文したものであります。この会報がお手元に届く頃は録音テープは出来ておりますので、事務局に申し込まればテープと文面の抜刷りを差し上げますので、活用して会員を獲得して下さい。

北歐に果つ

特操二期 楨 英敏

はじめに

凜冽な祖国愛に燃えた青春時代の極限の特攻体験から一日にして敗戦という冷徹な現実、そしてソ連抑留というこれまた極限の生活体験を数ヶ年余儀なく彷徨した特操二期生を中心にした一期生、三期生が数十人実在したことはあまり知られていない。

魔女狩りならぬ男狩りとも言われたソ連政府の欺瞞と強制による日本将兵約六〇万人の抑留生活者の一人として、特にソ連政府のハーグの「陸戦の法規に関する条約」蹂躪によって、くやしきも異境の地に墮れざるを得なかった特操同窓生のあった事実をここに明記しなければならぬ。特にわれわれは当時学生時代に学んだ「国際法」とはなんだっただろう。国際法の「法」の概念は国際社会の慣習法にさえも通用し得ない「法」だったのだろうかなどと疑念を抱かされるに至ったものがある。いわんや国際法による捕虜の身分は、一般に戦争の終局とともに終了されるのが原則であるにもかかわらず、今もなおソ連抑留生活の悪夢を年一、三度はみる。敗戦の事実を境として、

天然の監獄ともいべきシベリヤにブチ込まれ、厳しき寒さと飢えに呻ぎながら無法な死を賭けられた強制(矯正)労働や洗脳に立ち向かった学徒動員あがりの特操学生にとっては、いかに若かったとはいえ肉体的にも、精神的にも、さらには思想的にもその矜持をどうして持続させるかは到底筆舌に尽くされ得るものではなかった。

戦後百数十冊にも及ぶソ連抑留記があるが、ソ連辺境の地に言い尽くせぬ恨みをのんで非業の死を遂げられた特攻隊要員(特操学生)の事実について触れられたものは一冊も見受けられない。まことにわれわれの怠慢だったのではなからうかと慚愧に耐えないものを強く感ずるものである。

拉致(らち)さる

八月十五日終戦、飛行場周辺の警備、武装解除、十月末ごろか北朝鮮興南港本官収容所への集結、かくて「本土ダモイ」(帰還)という偽瞞とは知らず乗船、あげくの果てが機雷避待とか、故障修理という名目で沿海州ポセットに一時寄港、徒歩にてクラスキナ平原に向かう。なんとそこには急遽張られた幕舎数棟が受入れを待っていたのである。仮泊すること二週間前後か、いよいよシベリヤ特有の寒風身に泌みる。

燃料のための枯れ草、薪の採集に追われ、いよいよ不安と焦燥の中に人心の動揺、荒廃をいかにして喰い止めるかが大きく陰鬱な暗雲のようにのしかかってきた。

我々は幸いにして宙第五二九(通称番号)、第七教育飛行隊(威興、宣徳飛行場)の特攻要員として、猛訓中の特操二期生が数十名集団であったので何かと心強く、死生を共にした同期生愛がソ連抑留という生活環境の中にも発揮されていくのである。

なかには先輩第一期生数名も含まれていた。特に内地防衛準備の特攻要員五三KD威興三〇五隊(双高練)長進藤少尉も混じっていた。進藤少尉はそれこそ大胆、明快に、明日か、明日かとの出撃命令を待つ身であっただけに、八月十五日を境として一転直下敗戦の屈辱には耐え得られないほどの意気消沈を示した。共に死生観なり、国体観なりを語り合っていただけに私は進藤少尉の心境変化を見逃すわけにはいかなかった。

「先輩、ソ連領に入るのも千載一遇のチャンスではないでしょうか。表玄関からばかり入ソしている学者、外交官、とくに政治家のスポイルされているソ連観ばかりでは一方通行ではないでしょうか」

「たしかにそうだ。日ソ中立条約の一方的破棄による宣戦布告はなんとも納得出来ない。ソ連政府の真意を確かめるにも好い機会だ」

「そうですね。官費旅行と思えば気軽なもんですよ」

「だが待てよ。われわれをあつ猜疑心の強いスターリンがなぜ不用意にソ連領内に拉致するかという目的はなんだろう。すでに金日成が北朝鮮に入つたという情報が入つてるにもかかわらず……」

「だが先輩、何れにせよここソ連領内にいるという事実は好むと好まざるにかかわらず致し方ないと思います」

「そうだな。成行きまかせかも知れんが、ソ連領内奥深く入ることは二度とあり得ないことだろう。十年後、二〇年後のスターリンが、しまったと思ふようなことをやってのけるか」などと現在の立場なり環境を自らが納得せざるを得ない冗談話に花を咲かせたのもこの頃であった。

十一月末ごろソ連警備兵のダワイ情報に一喜一憂しながら移動の噂に耳を傾け、一方最悪の場合にはと越冬のため身仕度(軍用毛布で外套、チョッキ、寝袋など)に身も心も働き回った。十二月初めハバロフスクまでという以外は何も言い触らされずに四〇トン

〔五〕トンの有蓋貨車の二段構え、バ
 ン板仕組み棧敷に放り込まれ、いよいよ
 酷寒のシベリヤ鐵道を一路西へ西へ
 と向かうことになったのである。ハバ
 ロフスクはなんのそのお構いなく、ガッ
 タン、ゴットン走り続け、チタあたり
 から寒気ますますつり、バイカル湖
 を進行方向右方に見始めたころには零
 下二五度はゆうに超していたであらう。
 ちようど貨車内は霜とり装置のない電
 氣冷蔵庫のように人間の吐く息で十糧
 〔二〇〕糧ぐらいの厚さの霜壁ができ、
 まるで氷室そのものであった。語るこ
 とと言えば食事のあれやこれやで、満
 腹感(空腹感の反対)を持続するため
 排泄(脱糞)をいかに抑えるかが至芸
 中の秘として行われたものだ。

当時シベリヤ鐵道横断は一週間から
 十日と聞いてはいたが、抑留貨車はソ
 連の捕獲物資の輸送第一優先のためか、
 十日も経ち、二〇日過ぎててもこの目
 的地か知らねども下車の声はかからな
 かった。酷寒、貨車氷室幽閉のための
 運動不足、栄養不足はいかに若かった
 とはいえ、知らず知らずのうちに体力
 を蝕ばんでいった。だが我々学徒兵に
 はかなりの書籍を持参していた者が多
 かった。例えば各国語辞典等小型のも
 のから、哲・文・経の愛読書、中には
 六法全書さえ持っていた者さえいた。

まことに多種多彩であっただけに回し
 読みなどが行われたことは不幸中の最
 大の潤いだった。だがこのような貨車
 生活も三週間となると諦念というか、
 成行きまかせの自暴自棄的思考に陥ら
 ざるを得なかったのも一つの事実であっ
 た。ましてや我々は出陣に際していう
 ところの思弁とか、認識とか、観念と
 かを払拭してきただけに運命の儚さを
 感ぜざるを得なかった。またその不安
 感は夢にまで出るらしく呻唸する者も
 多くなっていったものである。

ウラル越ゆ

明かりとり窓外の風景が変わってき
 たことに気づいた。ウラル山脈を越え
 始めたのか大陸特有の悠大さというよ
 りはむしろ殺伐さを思わせる原生林が
 灰黒色に点在するのが見受けられた。
 太陽がいつ昇っていつ沈むのか不明
 な暗雲というか、寒気によるガス、も
 やがこれまた暗灰色に漂っているため
 なのか、時間の観念が全く薄らいでし
 まった。ちょうどそのころだったろう、
 乗車以来二四、五日目、車外のソ連兵
 のざわめきが伝わってきた。車輪の軋
 みも変わってきた。引込み線にでも入っ
 たのだろうか。

「下車!」「下車だ!」の声。貨
 車扉を叩く音にギョッと、起つにも
 立てず、暗がりの貨車内中で捕虜必携
 生活用具である毛布、飯盒、水筒空缶
 を夢中でさぐりにて身につける。脚
 が萎えているのか降りるにも降りられ
 ない。落ち転がるように押し合いなが
 ら転がり落ちた。睫が凍りついて瞼が
 開かない。防寒帽の毛並みや、髭面に
 氷花が咲く。凍傷を恐れて貨車軸につ
 いている重油のような潤滑油を顔に塗
 りまくる。真黒な顔、顔この世の人と
 は思えない形相。

突如、そこへ「略奪だ!」

「略奪だ!」「略奪だ!」の連呼があちこちに飛ぶ。なす
 術がない。ソ連地方人の強襲だ。ソ連
 警備兵は見て見ぬ振りらしい。
 進藤少尉は完全に無一物になってし
 まったらしい。まさかとも考え得られ
 たい瞬時の出来事だけに茫然自失、お
 互いに声にもならなかった。なけなし
 の毛布を頭から被せて上げた。泣いて
 る。泣いている。お互いに庇い合う言
 葉も出てこない。無言だ。

またしてそこへ「出発!」の通伝が
 飛ぶ。目的地もわからない。何キロの
 行軍距離かもわからない。とり急ぎ病
 弱者や炊事班の櫓輸送を先決し、行軍
 梯団も旧部隊ごとにとまりつつ縦隊
 一列、二列になって氷雨降る雪原を進
 んだ。我々は先輩を含めて特操二期生
 を中心にかたまった。腰をおろすな、
 座るな、手には何も持つな(凍傷を防
 ぐため)、眠るな(声をかけ合いなが
 ら黙々と歩き続けた。雪は降り続ける。
 軍刀を杖代りに、首には飯盒や空缶、
 水筒をブラ下げて。カラン、カラン、
 と鳴り続けている場合は大丈夫歩いて
 いる証拠だなどと。雪を頬張り、頬張
 りの悪戦苦闘の行軍だ。一日目夜だっ
 たらうか、どうしようもなく進藤少尉
 共々雪の上に大の字に倒れ転んだ。眠
 るな、眠っちゃ駄目だと声をかけ合
 ながら十二月の寒冷な北歐特有の夜空
 の星群に見とれた。清澄そのものだ。
 ファーンと吸い込まれるような錯覚に
 襲われる。駄目だ、駄目だ、立とつ、
 遅れるぞと声をかけ合うこと幾度繰り
 返しただらうか。……とは知らず知ら
 ずのうちに傷みのない凍傷に冒されて
 いったのもこのあたりからではなかつ
 ただらうか。三日間にわたる約八〇
 余キロの雪中行軍中、二百数名の凍傷
 患者が出たのも無理からぬことだった
 ろう。うち百数十人の手術者中に両手、
 両足を切断せざるを得なかった悲運な
 人々もあった。

エラブカへ

八月十五日以来約五ヶ月間にわたる
 放浪の末ようやく仙り着いたところは
 「船歌」で有名なヴォルガ河の支流、

カマ河に沿うたエラブカ收容所であった。帝政時代の尼僧院とも言われる建物だった。数十人残っていたドイツ人からしても先住者はドイツ軍捕虜收容所でもあったようだ。特に驚いたことには所内の裏隅々に大人、子供の頭蓋骨や大腿骨が散乱していたことだ。いよいよ来るべきものが来たという感を深からしめた。煉瓦塀の目の高さぐらゐのところ横一線に銃殺した着弾痕が食い込むようにあった。帝政崩壊の革命当時のものなのか、スターリン粛清の犠牲者のものなのかそれともまた今次大戦の枢軸国側捕虜の処刑場だったのかと恐怖はますます妄想を呼び、よからぬ方にばかり傾斜していった。

何れにせよ生きてゆかねばならぬ。一日のラーゲル生活の第一歩を踏み出さねばならぬのだ。将校団に対しては国際法上自活のための自主労務ということではあったが、当初は各地区各部隊の混成集団のためにか意志意見の疎通がはかどらず、不慣れも手伝ってまことに日本人として恥ずかしい無力的試行錯誤の運営であった。しかし生きていかねばならぬための食糧の確保、医療態勢の整備、労働力の提供が緊急の対策として真剣に採り上げられ、所内生活行動の指揮系統の確立、規制が

徐々ではあるが、自らへの反省と自覚

として大きく建設への意欲が湧いていったのである。

一九四六年三月中旬ごろだったろうか、進藤少尉が所外作業から帰った私を暗がりの舎外に呼び出した。

「お前、噂を聞いてるか？八路軍と国民党軍との内戦を」

「うすうすは。その後どうなってるか分かりませんが」

「いや、それどころではないんだ。こゝまで忍び寄ってるんだ」

「どういう意味ですか？」

「お前、支那語やるんだろう。それなんだ。ソ連軍が内々日本将校団の中から支那語の出来る者を物色しているらしいんだ。政治部将校が内偵してる噂が飛んでるんだ」

「まさか、この私が……」

「いや、予断は許せない。ここを離れることも一つの策だ。どうだ俺がここに残留して情報をつかむ。逃亡ではないんだ。伐木隊派遣を志願してハラショー、ラボーターの称号でも貰ったらどうだ。時間稼ぎの意味もあるが」

「そうだ。所内の陰鬱な、単調な生活にあきあきしてるとこなんだ。未知の新天地に飛び込むのも一つの解決策かも知れないと思つた。その上ソ連民衆との肌で接触し合える好機会だとも考えた。……これが私なりの動機となつ

て、同期生数人と四月初旬、早々と收容所を出発することになった。捕虜身上道具を背負い、櫓を引き、どんな事態が待ち伏せているものなのか見当もつかない。同期生、先輩達とも今生の別れになるもののか見送る側の心配、見送られる者の不安の交錯は言葉にもならず、顔、顔を焼つけるようにして別れを告げ、クゼルトウンへと向かった。

進藤少尉もちろん無言だった。

伐採隊の前線屯所はいふなれば堅穴式(半地下)丸木造り二段構え櫓のベツド(止り木式)が待ち受けていた。もちろん電灯などはない。松脂を含んだ木片に火をつけた松火だ。

朝六時ダワイの声に起床、燕麦水かゆーリットル位(四〇粒〜五〇粒)ロシヤ漬けと黒パン一切れを口にし、八名一組で原生林へ約一・五立方米の原木櫓運搬だ(あの有名なロシヤ名画、レーピン作、ボルガの曳き舟人の「舟」を「櫓」に置き換えてみればよくお分かりになると思います)。あの格好での雪との闘いだ。まだしも五月に入ると春は一気に訪れる北歐の気候はまたまた我々にいっそうの苛酷を強いた。

雪の解け込んだ泥濘と櫓運搬との闘いだ。ましてや栄養失調による浮腫と回虫、シラミによる体力減耗は言語に絶

した。あらゆる食われると思う山草や松の花まで採食、Vcの補給を怠らなかつた。

一ヶ月過ぎ、二ヶ月過ぎたころから誰言うことなくお互いの、そして自身の体力の限界を知り尽くしたのである。早期交替要員の派遣を願ったがままならぬ本部との連絡、ましてやソ連式体力判定ではどうしようもなく、ついにA軍医の発案だったろうか、ソ連で最も嫌う結核仮病作戦に出た。結核患者特有の軽い核はなんとかこなすものの、毎日午後五、六時ごろ計る体温三七、八度の体温計の操作は秘中の秘として特技を生み出していった。レントゲン透視、血沈測定などにも特技が発揮されていた。功を奏したかどうか分からないが六月二〇日ごろエラブカA收容所への帰還となり笑話ならぬ真性結核病棟へプチ込まれる破目に相成った一幕もあった。

北歐に果つ

十月からは初水が見られるようになり、またまた越冬のための自活労働はさることながら、所外の強制労働はますます我々の矜持を傷つけた。生きんがため、帰国のためとはいえ、ソ連軍将校宅の床板掃除、便所掃除にいたつてはその侮蔑感、あげくが黒パン一片

の報酬を手にしたときのくやしきは涙も出ない。帰還の夢は破れ、十一月、十二月の夜の澄みきった寒空に輝く星や月を眺めては、そぞろ故国の案否を氣遣わざる者はいなかった。深夜舎外に出て掌を合わせる老将校達を見受けたことも度々であった。中には新興宗教ならぬコックリさん、笹竹を手捌く者さえ出て帰還の夢をかけたものだった。

いよいよ一九四七年を迎え、一応対ソ折衝も軌道に乗り始め、教育宣伝文藝活動等が活発化していった。もちろん反ソ、反思想的なものはおくびにも出せない。したがって我々は自然なことながら作歌、詩、句へと精神を打ち込み得たのも一つの大きな思い出ではあった(帰還のおり全部没収されたものの数句はなんとか持ち続けた)。

四月中ごろだろう。所外作業から帰所した進藤少尉と日時計の台座の所で出会った。

「きょう俺のやってきた作業は我々日本人にとって何を意味するんだろう。奉仕意識もないし目的意識もないこの無力な生活は耐えられないよ」

「どんな作業だったのですか」

「いや、説明してもしょうがないさ」

と投げやりな返事だった。二人でマホルカ(煙草)に火をつけ合った。走馬

灯のように……北朝鮮咸興時代の颯爽たる特操青年士官としての進藤少尉の面影を思い出しながら共々暗然たるを得なかった。

四月下旬ごろだったろう。発熱患者数名が出たらしかった。せいぜい流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)程度にしか考えられなかったが、五月に入ると二〇〇三〇名前後の発熱患者が続発したようだ。所内には培養試験設備などはありはしない。しかし日本軍医師団はソ連当局に対し腸チブス疑似患者発生を報告し、即防疫態制に入ったのである。しかしながら体力の低下、栄養の不足、設備の不完全、ましてや精神的な不安は死を宣告された穴居幽閉の罪人にも等しかった。当然のことながら生水の飲用禁止、カルキによる消毒、衣類の熱気消毒(シラミ駆除)の徹底実施が張られた。その帰り進藤少尉が

「おい、何匹いたか？」
と声をかけてきた。「いや、一匹も」
「血を分けた仲だとかなんとか冗談をとばしていたが、シラミまでもわれわれを弄んでいたのではないか。ここに極まりぬという感じだな」
「全くです。だがダモイまでは頑張らなくては」

「自分で自分を処理出来る奴はりっぱだよ。自分を見究めることが出来るんだから。羨しいよ」(自殺者が出ていた)

「実はな、俺あの禁断というか、盗泉の水を飲んだよ。シラミよりはましだ。うまかったぜ。飲むと言われりゃ飲みたくなるのが人の情だよ」
私の驚き……

「なんでまた先輩！」

「いや、分かってくれよ」

あの上下水道水管の破損によって出来た所内の水溜り場が元凶だったらしいのである。私は返す言葉がなかった。再び、「分かってくれよな」の一言だけだった。

私はなんと行ってよいのかわからず、ただ医務室への診断を強く求めたが「うん、うん」のうなずきだけで行っただかどうかは今となってはさだかではない。

ついに進藤少尉は発熱したとの連絡をうけたのが五月中旬過ぎではなかっただろうか。私はとって置きの一枚をもつて医務室へ飛んだ。すでに隔離病棟(同じ所内)へ移送されていたのだ。無事退室されることを祈るのみだった。

進藤少尉はついに還らなかつた。死亡者二十数名の中の一人として数えられるに至ったのである。二ヶ月有余にわたる病魔との闘いは七月二〇日ごろ

終焉をみたのである。

私はここで進藤少尉の「死」を語るにあたって説明とか、粉飾はしたくない。ただ言えることは、あの切り詰めた言動なり、行動なりからしてけつして病魔(他意)に由るものでないということだ。

自らの生命を凝視し、自らの意志と対決した自らの行動ではなかったのではなからうかと思わざるを得ないのである。

あの極限の特攻隊長から、一転直下流星の窮まる如く鎮かに、北歐の地に果てられた特操学生であった事実をここに記すものである。



この絵はシベリヤに抑留された別の人が描いたもの(編者)

加藤隼戦隊のエース 安田義人さんを偲ぶ

少飛九期 中曽根 慶蔵

安田義人さんは、ビルマや本土の航空戦を戦って生き残った、貴重な戦士の生き証人だった。私は五飛師飛行班において、加藤戦隊の方を多く見てきたが、個々の方はほとんど知ることは出来なかった。安田さんを知ったのは、戦後武蔵野少飛会(後述)であり、そこ立派な人柄に接することが出来た。安田さんの様な生き方をした人は多くおられると思うが、安田さんはその象徴的存在であり、昔風に言えば武人の鑑と言える。安田さんを偲んでこの文を捧げる。

戦時中のこと

飛行第六十四戦隊の加藤隊長が、昭和十七年五月二十二日ビルマのアカ



ブに来襲したプレニム機を追撃して、被弾し戦死したことは戦史として有名である。この追撃には戦隊長の他に四機が参加している。安田義人曹長(当時)が最初に攻撃したが、砲塔銃座からの反撃を受け被弾、顔面を負傷して離脱した。続く大谷大尉機も被弾、伊藤、近藤曹長は無傷、四機は基地に帰還したが、戦隊長機は遂に帰らなかった。その後の戦闘で三人は戦死し安田さん一人が生き残った。加藤戦隊長の戦死を語るこの出来たのは安田さん一人だった。

安田さんは大正五年七月生まれで、昭和十一年十二月に平壤の飛行第六聯隊に入隊し、九五式戦闘機の整備機付になった。機付長はやはり着隊早々の少飛一期の刈谷正意さん(後の四十七戦隊の整備班長、大尉)、パイロットは少飛一期の上坊良太郎さん(七十六機撃墜のトップエース、大尉)だった。陸軍航空の著名な三人が、一時期一緒だったことは不思議な縁である。安田さんはこの環境から刺激を受けてパイロットになろうと考えたと思う。第八十一期操縦学生戦闘班となり、昭和十五年の六月教育終了して満州東京城の六十四戦隊に配属された。

太平洋戦争開戦に伴い、マレー、スマトラ、ビルマ作戦に参加した。苛烈

なビルマ航空戦で、多くのパイロットが戦死する生き残り残っていて、昭和十八年の六月を迎えた。少飛十期生二十一名が戦隊に配属された。彼らを一日も早く戦隊の戦力にしようと意気込んでいた時、突然熊谷飛行学校付を命じられた。安田さんはこれは黒江大尉(当時)の配慮によると思ったと述べている。

黒江少佐は陸士五十期、六十四戦隊に中隊長として着隊後間もなく加藤戦隊長戦死し、その後戦隊付飛行隊長となって戦隊団結の中心的存在として活躍した。十九年一月航空審査部付。戦後航空自衛隊に入り、第六航空団司令となったが事故死した。「日本陸軍戦闘機隊・酣燈社発行」のエース列伝に、陸士出身将校中のトップ・エースと記述されている。

着隊した少飛十期の二十一名は二名を残し次々と戦死した。余談になるが、その中に私の親戚の中曽根康治がいた。彼とはミンガラドン飛行場で三度程会ったが、遂にインパール南方のパレル付近で戦死してしまった。安田准尉は昭和二十年には大阪の二四六戦隊に転属となり、二式単戦、四式戦でB29、P51と戦った。そして八月十四日四式戦を駆って琵琶湖上空でP51を一機撃墜したのが最後で終戦と

なった。陸軍戦闘機隊のエース列伝では総撃墜数十機以上、雑誌丸戦史と旅5では三十余機とされている。

戦後のこと

安田さんは戦後胸を患い、榛名山麓の療養所で闘病生活をしてきた。そこへ民間航空へ返り咲いた黒江保彦さんの操縦するセスナ機が空から見舞いに訪れた。何度も急降下する鮮やかな操縦ぶりに、失意の底にあった安田さんは大変勇気づけられたと著書の中で述べている。

安田さんは私の知る限りで三冊の著書がある。「加藤隼戦闘機隊・河出書房新社発行」「栄光隼戦隊・三人の共著・今日の話題社発行」と「ビルマ隼戦記・発行社不明」である。

鈴木英次さん(故人)は高部隊(第五飛行師団)報道班員、読売新聞記者だったが、ビルマ航空部隊の活躍をまとめた「あゝサムライの翼」を昭和四十七年に光人社より発行した。また続いて観光ジャーナルなる小新聞を発行し、その中で戦友会特集を四十回発行した。特集には安田さんのことが何か所かで出てくるので、その一部を述べ

陸軍航空ビルマ慰霊団は第六回まで実施されたようであるが、安田さんは

第二回（昭和四十八年一月）に参加された。特集〇35の記事に「遺恨三十年アキャブの空」がある。

…翌年第二回の慰霊行で私（鈴木英次）も初めてアキャブを訪れた。アキャブの街は薄い煙霧のために、やかすんでいたが、ビルマ航空のバイカウントは、私たちのために旋回飛行をしてくれた。

着陸するとすぐ、私たちはビルマ航空のバスで岬に行った。誰いうとなく「アキャブ岬」ということになった。

ビルマ海軍の駐屯地をすぎると、一見小公園のようなアキャブ岬についた。

ベンガルの青い海が、三十余年の昔と同じように眼前にあった。『加藤戦隊長殿。相原大尉殿、横井軍曹…』加藤戦隊長の最後について語りうる唯一の人、安田義人准尉は絶叫した。

これほど悲痛な絶叫というものを、私は見聞きしたためしがない。どっと涙がふき出てきた。遺恨まさに三十年である。しかし、私たちは一剣をすら磨くことができず、鬱々たる敗者の三十年を送ってきたのである。

安田さんは特攻平和観音年次法要、全陸軍航空部隊碑前祭、終戦日の靖国神社、そして少飛戦没者合同慰霊祭などの多くの慰霊祭、航空関係の会合に出席された。

背筋をピンと伸ばし、古武士を思わせる風貌の安田さんは武蔵野少飛会（主に武蔵野地区の少飛出身者が会員、現在37名）にも出席してくれた。写真は六十四戦隊の伊藤直之さん（少候22期、大尉、特攻協会の評議員）と共に平成八年九月の会合に出席された時のものである。

赤羽礼子さんが平成十七年十月十六日に逝去された。礼子さんは知覧の特攻の母鳥浜トメさんの次女である。石井宏氏との共著「ホタル帰る」がベストセラーになっている。礼子さんはトメさん亡きあと陸軍航空特攻の顕彰に努められた。その葬儀に安田さんも参



伊藤直之さん

安田義人さん

列された。TVで葬儀の様子が報道されたが、安田さんが祭壇に向かって手を合わせている姿が見えた。それから僅か二カ月後に安田さんが亡くなるとは全然考えられなかった。

平成十七年十二月十三日の通夜に、私は少飛会の方数名と共に出席した。「特攻協会会長山本卓真」の生花が祭壇に見えた。また、「加藤隼戦闘機隊戦友会」の生花が左右にあり印象的であった。

告別式には、六聯隊の上坊良太郎さんが参列されたと聞いた。安田さんと同年齢の上坊さんは、八十九歳の老体で名古屋より来られて大変だったことと思われるが、かつての戦友に対する厚い友情と気迫に感動させられる。

安田義人さんは名の通り義の人として人生を全うされた。ご冥福をお祈り申し上げます。合掌



偶感

嘗て紅顔の美少年 今や八十路の坂に佇む 古詩に謂う 年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず とかや 祖国再建に挺身せしをのこ 多くは鬼籍に入りぬ 我が心境を古人に代弁せしむれば

寒山詩の一節

文を学び 兼ねて武を学ぶ 武を学び 兼ねて文を学ぶ

今日 既に老いたり

余生 二云うに足らず

とは言えど 曹操の詠するあり

老驥 櫪に伏するも

志は 千里に在り

烈士 暮年

壮心 已まず

（蛇足）寒山とは唐の時代天台山に住んでいた隠者で、経歴は全く不明。後の人が寒山が残した詩を集録し「寒山詩」という詩集を作った。個々の詩には題がないので索引に困るが、このようない節がある。

曹操は漢の天下を奪い魏の国を建てた武將で、梟雄と言われたが文才に長じ、多くの佳詩を残した。詩風は雄大である。

老驥 〓 老いた駿馬 櫪 〓 厩の床

世田谷観音寺 文化財紹介(5)

十、六角堂（不動堂）

六角堂は表門と一体となって京都の六角堂を模して、大正年間に新津の富豪中野忠太郎氏が建てたものを、戦後、先代睦賢和尚が譲り受けて、表門は山門に転用されたことは、既に本シリーズ3回目で説明済みである。

堂内には不動明王像と八大童子像が安置されている。清浄童子像の胎内から発見された文書で、鎌倉中期の大仏師康円（運慶の孫）の文永九年の作であることが判明した。

大和一の宮の石上神宮寺であった内山永久寺の秘仏であったが、明治維新の廃仏毀釋で危うく廃滅される処を、庄屋の中山平八郎氏が守り抜き、藤田



伝右衛門、久原房之助、中野忠太郎各氏の手を経て現在に至っている。現在国の重要文化財に指定されている（旧国宝）。

この様に不動明王が八大童子を従えているのは、高野山（雲慶作）と当山の二組のみであるが、像総てが同じ大仏師の作であるのは当山のみである。元々は六角堂には愛染明王像のみが安置されていたが、五島美術館が買取り、更に現在は中野美術館に安置されている。八大童子像は日枝神社隣に在った星ヶ岡茶寮の不動堂内に飾られていたのを先代が買取られたものである。ヒルトンホテル（現在、キャピトル東急）建設に際して寮も不動堂も取壊されて跡形もない。

十一、阿弥陀堂

六角堂と参道を挟んで対面している阿弥陀堂は、先代が六角堂と共に中野忠太郎氏から買い取られたもので、元来は京都二条城に在った。三層の建物

は金閣寺を模したと云われている。堂内正面には阿弥陀如来、向って右に観世音菩薩、左に地藏菩薩が鎮座されている。その左の鬼念佛は左甚五郎が、神橋建築の余材を使って彫ったもので、先代が20代の時に日光の骨董屋で手に入れて、背負って遙々東京迄運

ばれたそうである。先代の蒐集文化財第一号とのことである。

都指定有形文化財の五百羅漢像九体は、目黒羅漢寺本堂に在るものの一部で、松雲元慶が元禄四年（一六九一）から八年（一六九五）頃迄に造立したとされている。像高82・4 cm / 90・4 cm、自然を示す作風は、この時代の彫刻の中で様式・技法共に異彩を放っている。



十二、本堂

山門を入れて正面に見える本堂も、六角堂、山門、阿弥陀堂と一緒に先代睦賢和尚が、一時期石油王といわれた新潟県の富豪、中野忠太郎氏から購入移築されたものである。

本尊の聖観音は、伊勢長島の興照寺からお迎えしたもので、衆生を救う現世利益の菩薩である。左に月光、右に

日光の菩薩像が在る。南北朝時代（14世紀中頃）足利幕府に重用された院派仏師の作と推定され、検造りで宋風の影響が見られる。裳の上端部を折り返してお腹のところまで表現している立像は珍しいと云う。昭和26年5月13日に金龍山浅草寺に請い、聖観音の開眼を修し世田谷山観音寺が開山した。

福井城に飾られていた龍神の彫刻は御一新によって、金澤の豪商宮地伝右衛門の手に渡り、商家の看板になっていたが、やがてポストン美術館の意を受けた大阪の骨董屋に口説かれて遂に手放し、現在も同美術館の所蔵品になっている。



龍神様の彫刻



本堂、最近手摺りが更新された

伝右衛門は子飼いの職人で金澤三名工の一人と言われた石塚他三郎に、模造を命じ、他三郎が7年かけて樺材を彫り上げたものが、現在本堂入口上部に飾られている龍神である。

開山式当日、見知らぬ婦人(伝右衛門の娘)が出席されて、睦賢和尚に、兄は美術に関心が無いので、このようなお寺が開山すると聞いたので、店の龍神様を引き取って貰えないかと出掛けて来た。と話し掛けられたので、先代和尚は即座に承知して、一週間後に引き取られたそうである。

特別攻撃隊の頌 (靖国神社遊就館・世田谷観音)

特別攻撃隊の頌

わが国が存亡をかけた大東亜戦争において、開戦当初から生還を期すことのない特攻作戦が実行された。

弱冠十七、八歳から三十歳代までの勇士が、肉親への愛着を断ち切り洋々たるべき人生を捨てて、空に、海に、陸に、決然として肉弾攻撃を敢行し、偉大なる戦果を挙げ、ことごとく散華された。その数およそ六千柱、壮烈無比なこの攻撃は敵の心胆を寒からしめ、国民はひとしくその純忠に感涙した。

特別攻撃隊の戦闘は、真に至高至純の愛国心の発露として国民の胸奥に生き続け、また世界の人々に深い感銘を与え、わが国永遠の平和と発展の礎となっている。

ここに心から愛惜の情をこめて特別攻撃隊の諸史料をこの遊就館に納め、その精神と偉業とを後世に伝える。

昭和六十年十二月八日

特別攻撃隊慰霊顕彰会

会長 竹田恒徳



上記文面を刻んだ碑が、世田谷観音寺内「特攻平和観音」の堂の前に建っている。

徳川・日野両大尉胸像 台座碑板修復記念式典

故 安田 義人

代々木公園周辺住民により結成されている日本航空発始之地顕彰保存会が、徳川好敏・日野熊蔵両大尉の胸像の存在を衆知させる為に、平成15年9月28日にライト兄弟初飛行100年記念の行事を同所で開催した。その際、両胸像台座の背面に上下2枚嵌め込まれていた説明板が、盗まれていることが参加者の目に止まり、早急に復元しようという事になった。平成17年2月に解散

を決めていた、市ヶ谷谷メモリアルゾーンに在る全陸軍航空部隊碑を護持する航空碑奉賛同人会は、最後の仕事として顕彰保存会に協力して、碑板復元の募金活動を展開した。その結果、計画通りに碑板は復元されて、平成17年4月17日に徳川大尉の子息、豪英氏、日野大尉の子息、虎雄氏以下地区選出国會議員、渋谷区長以下関係者多数の出席の下、修復工事完成記念式典が盛大に開催された。

尚、徳川大尉之像は昭和39年4月17日、日野大尉之像は昭和41年4月23日に建立をされ、それぞれ東京都に献納されている。



挨拶する小野参院議員



手前 徳川大尉像、奥 日野大尉像



代々木上空を飛行中の徳川機



前列左端 徳川豪英氏、その右 日野虎雄氏



アンリー・ファルマン複葉機

明治43年12月19日、徳川工兵大尉搭乗のアンリー・ファルマン複葉機が、代々木練兵場に於いて日本で最初の飛行に成功した。飛行時間4分、距離三〇〇米、高度七〇米。

これより先徳川、日野両大尉は操縦術修業と飛行機購入のためフランスへ派遣された。そのとき購入したのは、アンリー・ファルマン一九一〇年型、グラデー単葉、ライト式改造型、ブレリオIIの四機だった。はじめの二機は代々木で、あとの二機は所沢で初飛行を行った。

比島慰霊旅行に参加して

平岡 辰夫

外国の人でさえ たゝえまつる
いのちさゝげし 特攻のかみ

国憶^{クニオモ}いいのちさゝげし ますらおの
心忘^{ココロ}るな これからの人

気合い出せ生ける日本人ここにあり
大正青年 まだ若きなり

日露戦争大勝百年、大東亜戦争終戦60年の記念すべき節目の年に、(財)特攻隊戦没者慰霊平和記念協会の、比島特攻基地慰霊団の一員として、而も61年前の昭和19年10月25日、世界を驚かした神風特攻隊・敷島隊の関大尉以下5機が発進したマバラカットを訪れて、慰霊祭に参加出来たことは、最大の喜びであった。

リリーヒルの総合慰霊祭場では、敷島隊発進時間の午前7時25分に、比軍楽隊によって「海行いかば」が演奏された時には、萬感胸に迫るものがあった。

マバラカット市長を初め、軍官民から、日比両国旗を打ち振る小学生までが我々を歓迎して呉れたことには驚かされた。

昭和49年に東マバラカット飛行場跡に、神風特攻慰霊碑(第一次)を建立して、現在のような盛大な慰霊祭が行われるようになった原動力となった。親日家D・H・デイソンさん邸を訪問出来たことは、無上の感激、感動であった。

その他、コレヒドール島、モンテンルバ、セブ島、レイテ島、各激戦地の巡拝慰霊、マニラ湾及びタクロバン沖での洋上慰霊祭で、焼香合掌し、花束を捧げ或は海上に投下し、海行かばを斉唱した。その時には声がつまり、涙声にならざるを得なかった。その感動は、現地訪問の慰霊なればこそと思っ

た。参加団員の方々にも皆さんよい人ばかりで、筆者は多くのことを学ばせて頂いたが、特に61年前、201空で零戦の整備下士官として、フィリピンで活躍された河辺 勇さん(86才)の、現場での貴重な数々の体験談を拝聴出来たこと、ガイドでフィリピンに永住している、元海外青年協力隊員の愛国者鈴木道夫さんとの出逢い、鈴木さんは今日まで個人的な立場でも日比親善に貢献されて居られるとのことである。

比島に於ける日米両軍の激戦の歴史、日本軍の勇戦奮斗の模様を、それぞれの場所、日時、部隊名等を挙げて具

体的に詳しく説明頂けたことは、有難い極みであった。

尚筆者は幹候11期、終戦時は新京の関東軍航空通信教育隊(満州第一九九四部隊)で、特幹(航空通信)1・2期生の区隊長として教育の任に当たって、3年余りシベリア抑留されて、昭和23年11月に復員した。

筆者は、世界平和の為に、神風特攻慰霊祭を盛大に挙行している比島の方々へお禮の意味で、又国内に向けて声を大にして叫びたい。
日本人よ目を覚ませ!

よみがえれ日本!
元気! 勇氣! 実行!

最後に、当時 名歌、名曲と謳われた、野村俊夫作詞、古関裕爾作曲の特攻隊讃歌を掲げる

嗚呼神風特別攻撃隊

一、無念の齒がみ こらえつつ
待ちに待ちたる決戦ぞ
今こそ敵を屠らんと
奮い起ちたる若桜

二、この戦に 勝たざれば

祖国のゆくて いかならん
撃滅せよの命うけし
神風特別攻撃隊

三、送るも征くも 今生の

別れを知れど ほゝえみて
爆音たかく基地をける
あゝ神鷲の肉弾行

四、大義の血潮 雲そめて
必死 必中 体当り
敵艦などて逃すべき
見よや不滅の大戦果

五、凱歌はたかく轟^{トドロ}けど
今はかえらぬ 丈夫^{チヒロ}よ
千尋の海に沈みつゝ
なおも皇國の護り神

六、熱涙伝う 顔あげて
勲をしのぶ国の民

永久に忘れじその名こそ
神風特別攻撃隊
神風特別攻撃隊



和漢の詩歌に見る国柄

田中 賢一

標題の漢とは王朝の漢ではない。漢字の漢、漢詩の漢で支那と言うべきか。ところで愛国心の対象となる国家は我が方には歴とした日本国があるが、彼の国には民族はあるが一貫した国家はない。そこで先ず民族について古典詩を拾ってみる。

李白の古風其十四には次のように詠っている。

胡開 風沙饒く
蕭索 寛に終古
木落ちて 秋草黄ばみ
高きに登りて 戎虜を望む
荒城は 空しく大漠
辺邑に 遺堵無し
白骨 千霜に横たわり
嵯峨として 榛莽に蔽わる
借問す 誰か陵虐す
天驕 威武を毒す
我が聖皇を赫怒せしめ
師を勞して 鼙鼓を事とす
陽和は 殺氣に變じ
卒發して 中土を騒がしむ
三十六万人
哀哀として 涙雨の如し
且つ悲しんで 行役に就く

安くんぞ農圃を営むを得ん
征戒の児を見ずんば

豈に関山の苦しみを知らんや
李牧 今在らず

辺入豺虎の飼となる

えびすの関所は風と砂がむやみと多い。殺風景なことは大昔からだ。木の葉が落ちて草が黄ばむ頃、丘に登りえびすの方を眺めると、荒れはてた町のあとには何もなく砂漠になっていて、国境の村にも垣根ひとつ残っていない。白骨が千年もの霜をへて横たわっており、積み重なって藪や草に蔽はれている。誰がこんな酷いことをしたのか、天の驕子というえびすの王が武力を悪用したのである。

我が聖天子は大いに怒り、軍を起し攻め立てた。うらかな世は忽ち殺氣立ち、兵卒はくり出し国中は湧き立った。その数三十六万人、悲哀の涙を流し、悲しみながらも征かねばならぬ。残った者で農業を営むことができようか。出征した兵士の運命を見なければ、遠い戦場の苦しみがわかろうか。李牧のような名將はすでにいないので、辺境の住民はえびすの餌じきとなってしまう。

この詩は支那古来の厭戦思想と異民族に対する憎悪で構成されていて、このような詩ならば他にも幾つか見出せ

るが、民族として愛国心を鼓吹するよ
うなものは見出せない。

ところが自己の仕える王朝に対する
忠誠心を詠ったものならば沢山ある。

諸葛孔明の「出師の表」は、古来この表を読んで泣かぬ者は忠臣ではないといわれたものだが、詩ではないので、ここでは措くとし、文天祥「正気歌」を執る。

正気之歌

天地 正気有り
雑然として 流形に賦す
下れば則ち 河嶽と為り
上れば則ち 日暈と為る
人に於いては 浩然と曰ひ
沛平として 蒼冥に塞つ
皇路 清夷に当たれば
和を含んで 明延に吐く
時窮して 節乃ち見はれ
一一丹青に垂る

天地の間には正気というものがある。それは抽象的で形をなしていないが、下れば山河となり、上れば日や星となる。人に於いては浩然の気と言ひ、盛大に広がり天地に充ち渡る。

世の中が太平なときにはなごやかで政治に具現されているが、非常のときには節操として現れ、そのことは歴史に残る。

この後十六句に亘り史実を列挙し、

忠臣の事例をのべているが略す。
是の気の磅礴する所

凜烈として 万古に存す
其の日月を貫くに当たりては

生死 安くんぞ論ずるに足らん

地維 頼りて以て立ち

天柱 頼りて以て尊し

三綱 實に命を係け

道義 之が根と為る

正気の有るところ凜然として永遠に存在し、正気が日月を貫くときは生死など問題ではない。大地もこれにより厳然としており、天柱もこれによって尊厳を保っている。君臣・父子・夫婦の道もこれによって維持されており、道義もこれにより成立している。

この後十八句に亘り、元軍に捕らえられ獄に繋がれているが、厳然として節を曲げないことをのべている。

此を顧れば 耿耿として在り
仰ぎ視れば 浮雲白し

悠悠たり 我が心の悲しみ

蒼天 曷ぞ極まり有らんや

哲人 日已に遠く

典刑 夙昔に在り

風簷 書を展べて読めば

古道 顔色を照らす

(私がこうして節操を保っておれるのも) 光輝く正気があるからだ。獄舎から仰ぎみれば白雲が流れている。そ

れは悠悠とした我が心、亡び行く末の悲しみである。大空は窮まる事はないが、世の哲人はみな去ってゆき、その残した規範は昔のまま残っている。風吹く軒端に古典を読めば、古人が示した道が私の顔を照らしてくれる。

この一文は亡びゆく末に対する忠臣文天祥の真骨頂を示すものとして、我が日本人に多大の感銘をあたえ、藤田東湖の「文天祥正気の歌に和す」の名詩を生み、むしろその方が人口に膾炙している。

れやがて死んでしまった。屈原は王が秦に行こうとした時、これをやめさせようとしたが、聞き入れられなかったという経緯があるので、反対派は次の頃襄王に更に讒言し、屈原は追放されてしまった。屈原は国を憂いつつ放浪し、遂に汨羅で入水自殺した。

楚辞に漁父という一篇があり、文章が平易で我が国でも昔から読まれていて、屈原の気持をよく表している。しかしこれが屈原の書いたものかどうか判断し難い。

漁父

屈原既に放たれて
 江潭に遊び
 行 沢畔に吟ず
 顔色憔悴し
 形容枯稿せり
 漁父見て之に問いて曰く
 子は何ぞ大夫に非ずや
 何の故に斯に至れるやと

屈原曰く
 世を挙げて皆濁り
 我独り清めり
 衆人皆酔い
 我独り醒めたり
 それ故に追放されたのだ
 漁父曰く
 聖人は物に凝滞せずして
 能く世と推移す
 世人皆濁らば
 何ぞ其の泥を漉して
 其の波を揚げざる
 衆人皆酔わば
 何ぞ其の糟を餗つて
 其の醜を飲らざる
 何の故に深く思い高く挙がり
 自ら放たしむるを為すやと

屈原曰く
 吾之を聞く
 新たに沐する者は必ず冠を弾き
 髪を洗ったばかりの者は必ず冠の塵をはらってから頭にのせ
 新たに浴する者は必ず衣を振うと
 物物の汶汶たる者を受けんや
 寧ろ湘流に赴いて
 江魚の腹中に葬られん
 安んぞ能く酷酷の白きを以てして
 世俗の塵埃を蒙らんやと
 漁父莞爾として笑い
 枻を鼓して去る
 乃ち歌いて曰く
 滄浪の水清まは 以て吾が纓を濯つ可し
 滄浪の水濁らば 以て吾が足を濯つ可し
 遂に去って復与に言わず
 かくして漁父は去り 二度と語ることがなかった

日本の詩歌 和歌について

国柄(愛国心)の現れているものは無数にある。昭和時代のもので持ち出せば応接にいとまないので、ここでは先に挙げた彼の国のものに対応し、遠い昔のものから拾ってみる。

我々が「君ケ代」の次ぐらいに認識しているのは、海行かば水浸く屍山行かば草生す屍大君の辺にこそ死なめ願みは為じ

大伴家持の作で、万葉では短歌ではなく長歌の中に組み込まれている。

万葉集に載っている歌は西暦で言えば、六五〇年代から七六〇年代で、彼の国では初唐から盛唐の時代である。

そのようなことを念頭において、これからかかげる万葉の歌を味わってみよう。万葉には愛国の至情溢れる歌は沢山ある。先ず防人の詠んだもので「大君の」という語句の入っている歌を挙げてみる。天皇の御命令でということにはかならない。

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出て立つ吾は
大君の命にされば父母を齋戸と置きて
参るて来にしを

大君の命かしこみ弓の共さ寐か渡らむ
長けこの夜を
大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父

母置きて
大君の命かしこみ青雲のとのびく山を
越よて来のかむ

(右は壮丁の歌でまだ沢山ある。次の長歌は大伴家持の作で、数首出ているが二首だけ挙げておく)
大君の 命かしこみ 妻別れ かなし
くはあれど 丈夫の 情振り興しと
り装ひ 門出をすれば たらちねの
母かき撫で 若草の 妻は取りつぎ
平けく 我は斎はむ 好去くて 早還
り来と 真袖持ち 咽びつつ 言語す
れば 群鳥の 出て立ちがてに 滞り
顧みしつつ いや遠に 国を来離れ
いや高に 山を越え過ぎ芦が散る 難
波に来居て 夕汐に 船を浮け居る
朝なぎに 舳向け漕がむと 侍候ふと
わが居る時に 春霞 島廻に立ちて
鶴が音の 悲み鳴けばはるばるに 家
を思ひ出負征籠の そよと鳴るまで
嘆きつるかも

万葉集巻の第二十は大伴の家持が編集したものだと伝えられている。家持は兵馬を司っていた大伴族の長で、次の長歌が載っている。

長歌が載っている。
族に喩す歌一首
ひさかたの 天の戸開き 高千穂の
岳に天降りし 皇祖の 神の御代より
梶弓を 手握り持たし 真鹿兎矢を
手狭み添へて 大久来の 丈夫武雄を

先に立て 靴取り負せ 山川を 警根
さくみて 履みとほり 国覓しつと
ちはやぶる 神をことむけ 服従へぬ
人をも和し 掃き清め 任へ奉りて
秋津島 大倭の国の 檀原の畝傍の宮
に 宮柱 太知り立てて 天の下 知
らしめしける 皇祖の天の日嗣と つ
ぎて来る 君の御代御代 隠さはぬ
赤き心を 皇方に 極め尽して 仕え
来る 祖の職と 言立てて 授けたま
へる 子孫の いや継ぎ継ぎに 見る
人の 語りつぎてて 聞く人の 鑑に
せむを 惜しき 清きその名ぞ おろ
そかに 心思ひて 虚言も 祖の名絶
つな 大友の 氏と負える 丈夫の伴
(国の成立と一族の使命を簡潔に述べ
ている)

万葉集の巻の第二十には大君のおん
為即ちお国の為に筑紫に向かう防人の
決意を述べた歌は沢山載ったいる。そ
れと共に父母妻子との別れの辛さを吐
露している歌も沢山あり、読者の心に
迫るものが多い。

明治時代の俳句短歌の巨匠正岡規
は、「貫之は下手な歌よみにて」と
言ひ、古今集を否定し、万葉集を高く
評価したが その説の賛否は別としや
まと歌とはどんなものかを知る為、古
今集第十九にある長歌より一首だけ掲

げて、我が国柄に思いを致したい。
古歌を奉りし時の目録のその長歌
つらゆき

ちはやぶる 神の御代より くれ竹の
世々にもたえず 天彦の おとはの山
の 春霞 思ひみだれて 五月雨の
空もとどろに さ夜ふけて 山ほとと
ぎす 鳴くごとに 誰もねがめて 唐
錦 たつたの山の もみじ葉を 見て
のみしのぶ 神無月 しぐれしぐれて
冬の夜の 庭もはだれに 降る雪の
なほ消えかへり 年ごとに 時につけ
つつ あはれてふ ことを言ひつつ
君をのみ 千代にといはう 世の人の
思ひするがの 富士の嶺の もゆる思
ひも あかずして 別るる涙 藤衣
濡れる心も 八千種の 言の葉ごとに
すべらきの おほせかしこみ 巻々の
中につくすと 伊勢の海の 浦のしほ
がい 拾いあつめ とれりとするれど
玉の緒の みじかき心 思ひあえず
なほあらたまの 年をへて 大宮にの
み ひさかたの 昼夜わかず 仕ふと
て かへりみもせぬ わが宿の 忍ぶ
草おふる 板間あらみ 降る春雨の
もりやしぬらむ

和歌は神代から幾世代をも経て絶えること
がない。音羽の山の春霞を見て思い乱れて
よんだ歌、五月雨の空も響くばかりに夜ふ
けて山ほととぎすが鳴くごとに皆が寝覚め

今集第十九にある長歌より一首だけ掲

今集第十九にある長歌より一首だけ掲

今集第十九にある長歌より一首だけ掲

今集第十九にある長歌より一首だけ掲

今集第十九にある長歌より一首だけ掲

てよんだ歌、龍田山の紅葉ばを見て賞翫してよむ歌、十月になって時雨が降り冬の夜の庭にもうっすらと降る雪のように、まったく消えいるような思いでよんだ歌、……というように、毎年、四季の折々につけて寿ぐ歌、この世の人なら誰でもする駿河の富士の嶺のように燃える恋の炎をよんだ歌、充たされぬまま別れる涙をよんだ歌。喪服としての藤の衣を織っている心をよんだ歌、このようにたくさん和歌をそれぞれに、天皇様の仰せを尊重して、巻々の中に配列し尽そうとて、伊勢の海の浦の潮貝のように美しい歌を拾い集め、収め得たと自分で思うのだが、私どもの至らぬ心で思慮もおよばず、やはり永い間、宮中にのみ昼となく夜となくお仕えするとてかえり見もせぬ我が宿の忍ぶ草が生い茂り、貼つてある板屋根の間が荒いので降る春雨が漏っているのではないかと思われると同様に、すぐれた歌を漏らしているのではないかと心配である。

二心われあらめやも
 の歌は有名だが、実は三首連作の三番目のうたで、前の二首は、大君の救をかしこみちちわきに心わくとも人にいはめやも
 ひむがしの国に我をれば朝日さす波姑射の山のかげとなりき
 （この歌は歌の学者も直訳できないが、自分は後鳥羽上皇のみことへのりに畏み奉るという意味であると解釈されている。）要するに誠心誠意上皇に忠節を尽くすと申している。

江戸時代に入って我々が心ひかれるのは、本居宣長の歌、
 敷島の大和心を人間はば朝日にはふ山ざくら花
 宣長には次のような歌もある。
 くにくにの君はかはれど高光るわが日の御子の時代かはらず
 からごころなしと思えど書らよむ人のところはなほぞからなる
 とつくにはかみ代のつたへなけれこそまことの道をしらずありけれ
 からざまのさかしら心うつりてぞ世人のころあしくなりぬる
 目に見えぬ神のころのかみごとはかしこき物ぞおほにな思ひそ
 神といえばみなひとしくや思ふらん鳥なるものあり虫なるものあり

橘曙覧は、たのしみはまれに魚煮て児等皆がうましようましといひて食らう時等の歌で名が通っているが、次のような国思う歌も残っている。
 たのしみは神の御国の民として神のをしへを深くおもふとき
 たのしみは戎夷よろこぶ世の中に皇国忘れぬ人を見るとき

幕末の志士達の歌で首題に叶うもの身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留めおかまし大和魂 吉田松陰
 君が代を思う心のひとすじに吾が身ありとはおもばざりけり 梅田雲濱
 吾が胸の燃ゆる思ひにくらぶれば煙はうすし桜島山 平野国臣
 おほ山の峰の岩根に埋みけり吾がとつきの大和だまし 真木和泉守
 大君のためには何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも 僧 月照
 もののふのやまと心を縫いあはせすゑ一すじの大綱にせよ 野村望東尼
 国思う心の和歌を捧げるのはこれまです。昭和時代のものを挙げれば数冊の本となるほどあるが、これは別の標題のもと（別の角度から観察）し纏めてみたいと思う。

漢詩とする。先ず和から、
 蒙古来 頼 山陽
 筑海の颯気天に連なつて黒し
 海を蔽つて来る者は何の賊ぞ
 蒙古来る 北より来る
 東西次第に吞食を期す
 趙家の老寡婦を嚇し得て
 此を持して来り擬す男児の国
 相模太郎膽甕の如し
 防海の将士人各々力む
 蒙古来る 吾は怖れず
 吾は怖る 関東の合山の如きを
 直前敵を斫つて顧みるを許さず
 吾が櫓を倒して虜艦に登り
 虜将を擒にして吾が軍喊す
 恨むべし東風一驅大濤に附し
 膾血をして尽く日本刀に
 膏らしめざりを

彼の国に於いては、北方や西方の異民族との戦は、有史以来続いているが本格的な対外戦争は清朝時代の阿片戦争を最初とする。あれだけの大事件なのだから、それに関する詩歌が残っているとかが、肯綮にあたるものは見当たらない。唯阿片が流入し憂慮に堪えないと詠ったものはある。

和漢の詩歌で、国防の戦いに関するものを拾ってみるが、今度は和の方も

憂患を賦す

龔自珍

故物 人寰に少なきに

猶 憂患の俱にするを蒙る

春深くして 恒に伴と作り

宵夢にも亦先駆す

年華を逐うて改まらず

逝水と同一に徂難し

多情 誰か汝に似たる

未だ禳巫に託するに忍びず

故物(かわらぬもの)はこの世に少

ないのに、心配事だけは私につきまとう。春酣になって心配事はついてくるし、宵の夢にも先駆けてくれる。年

を経ても改まらず、流れる水のように行ってしまふことはない。心配事とは

深いなじみになってしまったので、厄払い巫に頼んで追い払う気にもならない。(憂患は阿片に拘る国事を指す)

右は「己亥雜詩」と名付けた本人の手記の中にある。次の詩もある。

九州の生氣 風雷を待む
万馬齊しく瘖す 究に哀しむ可し
我は勸む 天公重ねて抖擻し

一格に拘せず人材を降さんことを全国に生きとし生きるもの、風神や雷神を頼みにしているが、万馬は声もない。何と哀れなことよ。我は天にお願いする。もう一度頑張つて破格の人材を派遣してくれ。

この願いが通じたのか知らないが、時の乾隆帝は欽差大臣として林則徐を

派遣した。硬骨漢林則徐は異人の阿片を尽く焼き捨てたが、朝廷内の異分子の策動により役職を免ぜられ、やがて阿片戦争となる。これらのことは首題と関係ないので触れない。阿片の害悪を詠った詩はあるが、対外紛争、ついで戦争についての詩歌を見出し得ないのは、この記事作成者として物足りない。

以前私は「偕行」に『史上の人物を詠う』と題し連載したことがある。その人物を順を追って列挙すれば、始皇

帝、荊軻、屈原、項羽と劉邦、張良、漢の武帝、蘇武、李広と李陵、衛青と

霍去病、班婕妤、王昭君、曹操、諸葛孔明、煬帝、唐の高祖と魏徵、玄宗、

黄巢とその時代、李煜、元好問、文天祥、成吉思汗、高啓、林則徐

これだけの人物を挙げて彼の国の歴史を辿ってみた。内容が豊富な人物に

ついては、四回に及んだこともあったので、三八回も書き続けた。その中には国を憂う詩もあったが、国という

のは時の王朝である。当然のことながら四千年を通ずる国はないのだから、愛民族ということになるのだが、その

民族を漢民族に限って見れば、漢民族が異民族の王朝を戴いていた元や清の

時代、それに忠節を尽くす詩もあるのだから、我々としては割り切れない。

塞外の異民族を憎みこれを伐つ詩は、

少なくない。冒頭にも揚げた李白の詩

に見るように、塞外の異民族は悪と決

め付けているが、異民族側の歴史書がないのだから、一方的な判断といわざるを得ない。それらの詩歌のうちで一

つだけ紹介しておく。漢の武帝の時代

霍去病という武将があった。卑賤の出であるが、武術勝れ用兵に長け武帝に

信任され、大軍を率い匈奴を征服した。

霍將軍の北伐を詠ぜし詩

虜子陽

旄を擁して漢將と為り 旗將軍

馬に汗して長城を出づ

長城は地勢峻にして

万里 雲と平し

涼秋 八九月

虜騎 幽并に入る 幽并郡の名

飛狐にては白日晚れ 飛狐地名、谷地

瀚海にては秋陰生ず 瀚海地名、平原

羽書は時に断絶し 羽書急便

刁斗は晝夜に驚く 刁斗炊具兼ドラ

壙に乗りて宝劍を揮ひ

日を蔽ひて高旂を引く 高旂大旗

雲のごとく 屯る七萃の士 萃拔萃

魚のごとく麗る六郡の兵

胡茄は関下に思しく

羌笛は隴頭に鳴る

骨都は先ず自ら警れ 骨都匈奴の部族

日逐はついで精を失う 日逐匈奴王名

玉門には斥候を罷め

甲第には始めて修營す 甲第第一級の邸

位に登りて萬庾を積み 庾穀物の単位

功立ちて百行成る 天は長く地は自ら久しきも

人道は虧盈有り 虧盈盛衰

未だ窮めず激楚の楽 激楚清声

已に見る高台の傾くを 當に麟閣の上 麟閣麒麟閣に名を留む

千載に雄名有ら合むべし (通訳) 一三句から

選ばれた士は雲の如く集まり、全国から寄せ集めた兵は魚の如く連なっている。関所のはとりでは胡の茄が物悲しく、隴山の辺りでは羌の笛が鳴り響く。匈奴の骨都族は先ず恐れおののき、匈奴王の日逐は恐れて精気を失ってしまった。玉門関には斥候を出す必要もなく、

都に凱旋し天子は甲第を修復し將軍に賜い、將軍は位を進め禄を増加され、功績は記録に書き加えられた。天は長く地は久しいが、人の世に盛衰がある。たとえばまだ享楽を十分に極めぬうちに、高殿が傾きかけるといふこともある。しかし霍將軍のごときは、麒麟閣に肖像が掲げられ、千年の後まで名

が伝えられる人である。開闢以来変わらぬ王朝を頂く我が国と、永くても三百年で替る彼の国との

違いを前提に詩歌を眺めてみたが、作者の階層の違いを次回に述べよう。

都城特攻慰霊祭

菅原 道照

4式戦(疾風)の特攻隊が、都城西飛行場から初出撃した4月6日を期して行われる都城市特別攻撃隊慰霊祭、今年には桜満開であった昨年とは異なり、既に半分以上散った花の間に若葉が芽生え、そこに花吹雪が舞うという一味異なった会場風景が醸し出されていた。参加者は約40名で例年並みであったが、57期を主とする偕行会員と少飛会員は明らかにその数を減らし、初めて少飛会からの追悼の辞が捧げられなかったことは淋しい限りであった。

恒例に従い長峯市長の祭文奏上に、当協会と地元57期生会が追悼の言葉を捧げ、裏千家淡交会都城支部による献茶の後、参加者全員が献花、錦城会都城支部と都城詩道会による献詠、続いて偕行・少飛両会員合同で、加藤隼戦闘隊、同期の桜、海行かばを地元の第23普通科連隊音楽隊の伴奏で合唱した。第23普通科連隊は、立花尊顕連隊長以下82名が、陸自第8次イラク復興支援群に3隊に分かれて参加、第3隊は今年の2月26日に帰国した処であった。最後に遺族(6家族12人)を代表して、第179振武隊江副保郎大尉の次弟保

二郎氏が、最近の世相は心のゆとりを失い、他を思いやる心に欠けていることは遺憾なことで、特攻隊員の心情を忘れることなく教訓にして貰いたいと挨拶され、11時半柔らかな陽光の下、慰霊祭は終了した。昨年市長は挨拶の中で、式典には地

元小中学生も参列させたいとの意向を表明されたが、実現しなかった。若い市長、合併で大きくなった都城市政を引継いで担当されている。慰霊祭がより地元に着して、青年達が積極的に参加する慰霊祭になることを望んで止まない。



第23普通科連隊音楽隊の演奏



裏千家淡交会による献茶

祭文
本日ここに、特別攻撃隊戦没者慰霊祭を挙げるにあたり、祭主 都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会々長 長峯誠 謹んで御霊前に申し上げます。

春夏秋冬、時、季節は巡り、桜咲く中、今日の慰霊祭を迎え、感慨ひとしおのものがあります。顧みますと、先の大戦が終わりを告げてから、六十一年の歳月が流れました。昔烈を極めた戦いの中、軍人・軍属はもとより、徴用あるいは動員された学徒その他多

くの国民が尊い生命を失われ、また傷つかれましたことは、私たちにとりましても、永遠に忘れることの出来ない、深い悲しみであります。特に、都城市内、東と西の両飛行場から出撃し、帰らざる死出の壮途につかれました特別攻撃隊の勇士たち、その支援、援護・誘導に当たられました援護機の勇士たちの崇高なる心情を思うとき、深い感銘を覚えるとともに、哀痛の思い、胸に迫るものがあります。これら、最愛の肉親を失われた御遺族の御心情を拝察いたしますとき、誠に痛恨極まりなく、お慰めのことばもありません。戦後わが国は、ひたすら国の再建と発展に努め、平和と繁栄の道を築き上げて参りました。本市もまたその中において、年々発展を続け、南九州の産業・経済・教育・文化の拠点都市として揺るぎない地位を築いてまいりました。これもひとえに、英霊諸士の御加護と御遺族皆様方の御支援御協力のためものであり、衷心より感謝の誠を捧げます。

一方で、私を含め、戦後生まれが国民の多数を占めるようになった現在、戦争の記憶が次第に薄れつつあるのも事実であります。数多くの尊い犠牲と御遺族の今なお変わる事のない深い苦しみ、悲しみを決して忘れることなく、悲惨な戦争を二度と繰り返すことのないよう、末永く後世に平和の誓いを語り継いでいかねばなりません。霊魂遠く去りまして、今日の平和と繁栄の喜びを共に分かち得ないことは、残念に存じますが、私たちは諸士の残された祖国愛、郷土愛を引き継ぎ、わが国の恒久平和と繁栄・発展のために、なお一層の努力を続けて参りますことを、ここにお誓い申し上げます。今はただ、諸士の御霊がとこしえに安らかなことを、また、在天の光として、今後ともわが国の繁栄と平安を見守り給うことを念じ併せ、御遺族皆様方の御多幸、御健勝を祈念いたします。追悼のことばといたします。

平成十八年四月六日

都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会

会長 長峯 誠

都城東飛行場から出撃した 原田葉少尉のこと

原田少尉は早稲田大学出身、特操一期、二七振武隊の一員で20年6月22日出撃、沖繩西方洋上散華。

この人の次の遺詠は知覧の記念館に展示されている。

この書は熊本県菊池郡西合志町の緒方道場にあったという。該道場は一時特攻隊員の宿舎になっていたので滞在中に認めたのであろう。二七振武隊の絶筆集に原田少尉は次の通り書き残している。「征くものは気易い 残るものは心情にはホトトギス



原田少尉の遺詠
征くものは気易い
残るものは心
情にはホトトギス

野畔の草召し出されて桜哉

の慟哭がある 情は涙である そして愛は切ないされど忠ははさらに至上だ 祖国よ永久に幸あれ 幸あれ」と。

これも知覧に展示されている。

二七振武隊は2月14日明野で編成され、一時支那方面に転用、更に内地に戻り、沖繩戦末期の牛島軍司令官が自決する前日の6月22日突入している。

都城の思い出

田中 賢一

私は19年11月から挺進戦車隊長だった。この部隊は滑空機搭載の戦車隊だったが、戦車搭載の滑空機「ク-7」の量産が不可能になったのと、戦車を使う空挺作戦など望み得ない戦局だったので、20年5月本土決戦のため財部に司令部を置く第五十七軍に配属された。それまで宮崎県の空挺部隊基地川南村の兵営にいたが、都城の東にある三股村と中郷村に移駐し、小学校などを宿舎に当てた。

まうことを作戦方針とし、それに合うような待機位置を探した。

地形偵察の途中で東飛行場にも行ってみた。多分六月の下旬だったと思うが、爆撃の跡は生々しく我が飛行機は無かった。それまで航空特攻のことは聞いていたが、我が任務について頭が一杯で、それに特攻と言へば、五月に行はれた義烈空挺隊の沖繩毆込みの方が、我が身内のことなので関心が深かった。

日々作戦準備に忙殺されているうちに、八月十五日になった。玉音放送は事前に通知がなかったので聞かなかったが、停戦のことはニュースで知った。

軍から与えられた任務は対空挺だった。敵は昭和20年秋志布志湾地区に上陸すると判断していた。これは当たっていたが、上陸と同時に内陸部進攻が始まってからか、敵空挺の大部隊が都城平地に降着するという判断は当然だった。空挺部隊が対空挺部隊にさせられてしまった。一応居住態勢を整えた後、都城平地を隈無く偵察し、敵の侵攻が始まってから部隊を配置する場所を決めた。我が隊は戦車二個中隊を持っており、中隊は戦車二個小隊と歩兵一小隊の混成で、戦車は二式軽戦車で装甲は薄いが運動性は極めて軽快だった。降着した敵空挺との戦闘は、敵の航空攻撃を避けるため一刻も早く敵中に飛込んでし

は「方面軍から受けた命令を伝えておく」として相手にならなかった。帰ってから中隊長を集め停戦命令を伝えると、いままで我が棺桶と思っていた戦車をおめおめ敵に渡すことではきぬ。志布志湾の断崖から海に捨てると意気まいたが、やがて平静になった。思えば遠い昔話になってしまった。

萬世慰靈祭

菅原 道照

ない、全近畿学生文化会議議長の前田多恵子さんが碑前に進んで、切々たる慰霊の言葉を読み上げた。

加世田市は、平成17年11月7日、隣の坊の津、笠沙、大浦、金峯の4町と合併して南さつま市となった。之に伴って加世田市平和記念館は、萬世特攻平和記念館と改名された。歴史的な萬世特攻の名前が正式に館名に付されるようになって、歴史伝承の観点からは却って良かったと思われた。

通算35回、南さつま市として最初の萬世特攻慰霊碑慰靈祭は、平成18年4月9日13時に海自鹿屋基地から飛来したP-3C哨戒機の慰霊飛行で幕が開いた。続いて遺族(18家族、56人)。各戦友団体代表、戦友団体が紹介され、更に国会議員、近隣首長の紹介があった。13時15分から式典が始まった。

元66戦隊員による国旗掲揚、黙祷、吉峯慰霊碑奉賛会長の祭文奉上、遺族代表、第62振武隊員倉 潔少尉の令弟倉 淳氏、戦友代表元66戦隊員(萬世特攻平和記念館名誉会長) 苗村七郎氏の追悼の言葉が捧げられた。

献詠は錦城会加世田支部によって行われ、続いて参加者全員の献花、元66戦隊員による碑に清酒を注ぐ献酒が終わった処で、式次第には記載されていない、全近畿学生文化会議議長の前田多恵子さんが碑前に進んで、切々たる慰霊の言葉を読み上げた。

この後、陸上自衛隊国分駐屯地音楽隊の伴奏で、全員で加藤隼戦闘隊を声高らかに合奏した。国旗降納も元66戦隊員の手で行われ、予定より若干遅れて14時45分閉式した。



元66戦隊員による献酒



元66戦隊員による国旗掲揚



第72振武隊の少年兵達

碑文

花曇り、風も弱く、茲数年来最も天候に恵まれ、且つ、予期せざる若者の気魄に接し得て、心豊かに祭場を後にした。

第二次大戦とみに悪化、風雲急を告げる昭和十九年、その帰趨は決定的段階を迎える。ここ加世田市吹上浜の地に、戦勢転換の神機を期する地元民、学徒ら軍民一致の協力により万世飛行場が建設さる。

本土防衛の基地、沖繩決戦の基地として、昭和二十年三月二十八日より終戦まで、陸軍特攻振武隊、飛行第六十六戦隊、第五十五戦隊の若き勇士は、祖国護持の礎たらんとここより雲表の彼方に飛び立つ。一機また一機と。

征きて帰らざる者あまた。或は空中に散華、或は自爆、壮絶にして悲絶、これを他に求められようか。至誠尽忠の志に燃える戦士は祖国に殉じたのである。血と涙によって平和はもたらされた。

ここにその勲を讃え、霊をとこしえに慰めん。

われら生き残りたる者と心ある住民は、英霊の偉勲を偲び、後世に伝えるためにこれを建立す。

枕崎第二艦隊追悼式・旧鹿屋航空基地特攻隊戦没者追悼式

藤田 幸夫

枕崎の第二艦隊追悼式は、4月7日(金)11時から執り行われた。今年も、映画『男達の「大和」』の上映や、呉の「大和ミュージアム」の開館などで国民の関心が高まっていること、客船「ふじ丸」による洋上慰霊クルーズが企画されたことなどから、参加者も多く、市民も含めて総員500人近い盛況となった。

今年、印象深かったことは、まず、自衛隊鹿児島地方連絡部(部長一等海佐福本 出)の全面的支援が得られていたことである。例年の陸上自衛隊国分駐屯地の音楽隊に加え、海上自衛隊自衛艦隊の掃海艇2隻が入港し、ラッパ隊、隊員の参列があり、空自の地連隊員も加えると陸海空の統合支援ができていた。市民の体験航海や一般公開も実施されていたこと、次に徳之島伊仙町から、町長大久保 明氏以下、町の職員、慰霊碑修復活動中のNPOの参加があったことである。

伊仙町は、「大和」以下が沈められた4月7日に、沈没現場を望見出来る大田布岬の慰霊碑(高松ノ宮様揮毫)

前で、毎年慰霊祭を行ってきた。第39回目であった今年も、「ふじ丸」クルーズ洋上慰霊祭参加者のために繰り上げて、5日に実施された。ところが、当日は、12メートルの強風で、船が接岸できず、慰霊団代表の祭文奏上も慰霊碑修復募金の贈呈もできず、洋上からの参加になった。そのために慰霊碑前の岬沖で、単縦陣で航過する護衛艦3隻と「ふじ丸」は、大和沈没の14時23分にすれ違い、そのとき双方で「長々音」を鳴らして弔意を表し、上空には沖繩第5航空群からのP-3Cが弔問飛行するなど、陸海空呼応した感動的な慰霊祭が実現したということであった。

更に感動的であったのは、枕崎の追悼式に、上陸参列することができた「ふじ丸」慰霊団代表から前々日徳之島で予定されていた祭文奏上と伊仙町長への慰霊碑修復募金の直接贈呈が実現したことである。平和祈念展望台上は好天に恵まれ、例年に無い素晴らしい追悼式となった。

鹿屋の追悼式も好天に恵まれ、散り残った桜吹雪の中で、約千人の参列のもと、盛大に執り行われた。高齢の戦友達による「同期の桜」碑前献歌は、助け合って碑前に進み、歌の伴奏が始まるやさっと背筋を伸ばし、大きな声

で合唱されたことが印象に残った。席に帰る顔には、涙の後があった。さらに、親子3代のご遺族の楚々とした姿が、何組か見受けられた。

今年も鹿児島方面の慰霊祭参加を機に私は、CD「あゝ特攻」の委託販売について、知覧や鹿屋の資料館売店に依頼する任務も果し、大変印象深いものがあった。鹿児島県を始め南九州には沢山の特攻隊慰霊碑がある。それぞれに連携は無く、何処で何時慰霊祭が行われるのが把握されていない。沖繩、徳之島、南九州各地の陸海軍特攻基地に関しては時々慰霊行脚旅行を行って慰霊顕彰の積極的伝承を企図することに一考の余地は無いのであろうか。

「碑文の一節」……ここに退勢挽回の秘策を試みるに至った。即ち敵陸海空軍兵力の全滅を期して企てた「特攻攻撃」である。ときまさに二十年春であった。この壮烈な特攻発進の地こそ当鹿屋であって、以来八十二日間の戦闘は苛烈を極め、日々若人達は黒潮おどる沖繩へと飛び立った。

あたら春秋に富む尊い生命を、祖国のために敢然と捧げたこれら若人達世上とすれば敗戦のかけにこのような尊い犠牲を忘れがちなのである。

こんにちこの結果はどうであったにしても、これら身を挺して祖国の難に殉じた人々の祖国愛は称賛されるべきであり、これら若人の至純の精神は：



鹿屋基地慰霊祭



枕崎追悼式陸自・海自音楽隊

豫科練雄飛会慰霊祭

小倉 利之

平成18年4月4日靖国神社で、豫科練雄飛会慰霊祭が行なわれた。

ご遺族、来賓と乙種飛行豫科練習生1期生から24期生まで、約300名が参集殿に集い12時過ぎから慰霊祭が行なわれた。

当日は、前日の強風から一転素晴らしい雲一つない晴天に恵まれた。桜の花も満開で、「同期の桜」の離れ離れに、散らうとも、花の都の、靖国神社、春の梢に、咲いて会おうの詞のとおり、ご遺族、同期、先輩、後輩と昔を思い出しながら素晴らしい話しが受付前で次々と広がっていた。

慰霊祭は、国家奉奏、修祓、祝詞奏上、祭文奏上（住友会長）、総員で「同期の桜」を献歌、2班に分かれて

本殿に昇殿参拝した。祭文奏上で会長は、私たちは感謝と祈りと誇りを忘れないでこれからも頑張っていきたいと所信を述べ、最後にシンガポールのマハティール氏の、東南アジアの植民地は、この戦争がなければ、独立に、まだ100年以上かかったであろうという言葉引用して締め括られた。

慰霊祭の後、靖国会館前で記念撮影、次いで靖国会館で直会（招魂観桜祭）が開かれた。

1期生の伊藤氏の話で、靖国の春の梢に、亡き友のことを思いつつ、同期生等の親睦を図って、すばらしい1日にして欲しいと述べられ、乾杯のもと楽しい時間を過ごした。伊藤氏は、年齢が91歳で、矍鑠として、奥様と出席しておられた。まさしく「雄飛会」の鏡であると、参会者から祝福を受けておられた。

ご遺族も、来賓も、雄飛会員の方々と積もる話をし、楽しいひと時が経過した。靖国の御社の奥深く神鎮まります乙種飛行予科練習生出身の御英霊も囃や満足されたことであろう。



第15回震洋会慰霊祭

藤田 幸生

去る3月25日(土)、靖国神社において第15回の震洋会慰霊祭が執り行われた。当日は、陽春の穏やかな好天に恵まれ、桜の花も3分咲きであった。

11時に参集殿前で受付が始まり、其所には幾つもの談笑の輪が広がっていた。全国から上田恵之助会長以下182名の方が参加された。

慰霊祭は13時10分開始、神職の祝詞奏上に続いて名古屋茂夫副会長による祭文奏上、全員で「海行かば」を斉唱した。本殿参拝時には軍装会のラッパ吹奏が添えられた。

続いて靖国会館において、「オール震洋隊員の集い」が開催された。黒木豊幹専務から、震洋会事務局が主催する靖国神社での慰霊祭は、今年が最後で以後はそれぞれのグループが、川棚等で続けて行くことになる報告された。

その為か、上田会長の挨拶には、過去15年を想起する深い感慨が込められていた。終って懇親会に移り各卓毎に談笑が賑やかに盛上る一刻を過ぎ、最後に全員で「同期の桜」等を歌って、名残り惜しみつつ散会した。



図書紹介

後藤玲子著

「特攻戦士の遺志に触れて」

評議員 小灘 利春

著者は元・法務省法務教官であり、現在も女性保護施設の職員を勤めている。家庭人として、また育児体験を通して、女性らしい感性で神風特攻敷島隊に始まる特攻出撃の状況、その主力となった第十期甲種飛行予科練習生出身搭乗員たちの心情観察は深い。

第二六航空戦隊司令官でありながら特攻機に乗り敵空母に体当たりした有馬正文少将の古武士の名にふさわしい「指揮官先頭」ぶりは特攻を語る場合、銘記すべきことであろう。

一身を捨て南朝へ忠節を貫いた楠正成が置かれた環境、心情に連なる神雷部隊の隊長野中五郎少佐、また回天特攻の諸戦士の逸話などの記述は分かり易い。

著者は夫婦共白髪が実現する頃となって特攻戦士ゆかりの場所を次々と巡り、シドニー港を攻撃した特潜伴勝久少佐の墓参や回天基地大津島を訪れており、今後も各慰霊施設の紹介が続くよう期待される。

豊田市の名古屋航空隊跡にある神風

特攻「草薙隊慰霊碑」が、定期的に清掃して守っている愛知少年院生たちが人生を見つめ直すすすがとなっている事実は心温まる話である。

東京図書出版会発行。

本体価格一、〇〇〇円。

発売元は(株)リフレ出版

〒113-0033 東京都文京区本郷

二―三五一―七二〇四

Ⅷ 〇三―五八四二―六四二五

「日本人の歴史哲学」

なぜ彼らは立ち上がったか

著者 岩田 温

(磐南総合研究会代表)

発行 展転社

価格 一、八〇〇円＋税

序 戦後という時代

1、取り戻すべき歴史哲学

2、民族共同体としての国家

3、西郷隆盛と日本の近代

4、特攻隊と大東亜戦争

5、民族の記憶

「特攻・絶望の海に出撃せよ」

著者 渡辺 大助

(ノンフィクションライター)

福島テレビ／小樽放送勤務

発行所 (株)新人物往来社

価格 一、六〇〇円＋税

1、神風特別攻撃隊「敷島隊」

2、人間爆弾「桜花」

3、人間魚雷「回天」

終戦六〇周年記念CD

『あゝ特攻』について

理事 藤田 幸生

かつて陸海軍特攻隊員たちが愛唱した歌や、彼らの遺書などをナレーションで綴る、約四〇分間のセミドキュメンタリCD『あゝ特攻』が発売された。

作成には水交会も協力している。このCDは、終戦六〇周年を記念して、「日本人の心を伝える会」が製作し、「特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」から発売されたものである。

作成は大阪学芸大学の有志が、またデザインは塚本哲デザイン事務所、更にその題字は吉田學前水交会会長が揮毫されるなど、全てボランティア活動で支えられたものである。

上がった利益は、慰霊碑建立など特攻隊戦没者の慰霊顕彰事業に当てられるという。

このCDを聴いた二十代のOLは、

「これまで、特別攻撃隊については、知覧の記念館や本などで知る機会はありませんでしたが、このCDのように隊員の方々の手紙を朗読すると言う形で聴きますと、すんなりと入ってきて、その気持ちで聴く歌の歌詞もまた、深いメッセージとして受け取ることが出来ました。戦争と一口に言っても、そのために戦った方々には、お一人ずつその方の人生とドラマがあった事、私達が今こうして生きていられるのも、その方々のお陰であると考えさせられました。」

江田島の教育参考館を訪ねたとき感じる、あの気持ちに通じるものであろうか。

出来るだけ多くの若者たちに聴いてもらって特攻隊員のご事に想いを致し、今の日本のことを考えて欲しいものである。

価格は税・送料込みで、二、〇〇〇円。購入申し込みは、葉書かFAXで「特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」(FAX 03・34332・5567)

平成百人一首より
ああ四月西の国には薔薇咲く日
東の国にさくらにはふ日

堀口大学

お知らせとお願い

理事長

一、理事会・評議員会

平成18年第1回理事会・評議員会は、3月2日に偕行社で開催（11時・15時）され、平成17年の業務と会計収支報告が行なわれました。（資料別掲）

特別攻撃隊の五訂版作業が続けられています。従来は改訂の他に新たに、第二艦隊沖繩出撃時戦死者以下、特攻作戦に深く関わりながら特攻戦死認定を受けなかった戦死者名を、追補として記載し、誌名も「特別攻撃隊全史（特別攻撃隊五訂・追補版）」として刊行する方針が決定されました。本件に関しては、次号で詳しくお知らせする予定であります。

一、総会

第27回総会は、合同慰霊祭に引き続いて私学会館で、平成18年3月30日13時30分から行なわれました。出席者は約200名。会長は挨拶の中で、昨年7月瀬島名誉会長の発意で結成された、(財)大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の目的達成の為の強化具体策の検討が、始められたと述べられました。財団間の交流・統合等難しい問題があります

が、各慰霊団体会員の急速な減少が至近の間に迫って来ている時に、後手を踏まない心構えが必要であると思われる。引き続き懇親会に移り、和気藹々の裡に15時半解散しました。



総会における会長挨拶

一、フィリピン慰霊旅行

今年も去年と同じ日程で、10月25日のマバラカット慰霊法要に参加し、以後各地を慰霊行脚致します。百聞は一

見にかわずで奮ってご参加下さい。総会で見れば、お孫さんや知り合いの方等、若い方々の参加があれば、次世代会員獲得に繋がることでもあり、勸誘協力方お願い致します。

一、会員動向

別掲理事会報告に記載されていますが、平成17年の会員数減少は15名に止まりました。平成14年には減員が400名を越え、且つ平成15年年初の会員数が二五〇〇名を割込んだ状態に較べると、何か会員の動向に底固さが生まれて来ているのかなとの感を抱きます。

会員訃報

謹んで哀悼の意をささげます。

僅かではありますが、一般会員は35名増加したことに心強さを覚えます。会員の皆様には未加入の昔の仲間、或は身近の若い方々への入会の呼掛けを積極的に行なって戴いて、引続いて会員増強に御協力を賜りますことを、切にお願ひ申し上げます。

新入会員名簿

(平成18年1月1日～3月31日)

- 青森 畝田謹次郎 ○宮城 侘美
- 旭 ○福島 円谷信一、松尾知男 ○石川 久保 哲茂 (17・11)
- 茨城 金箱廣美 ○埼玉 白上進一、山梨 河内 尊治 (17・8)
- 三ヶ田恵美子 ○千葉 窪 洋之右、長野 塩入 春雄 (17・3)
- 佐伯幸男、谷脇憲司、千葉 満、古川 愛知 飯塚 昭三 (17・12)
- 秀雄 ○東京 池上 徹、池田玲子、
- 神奈川 磯谷 修 (17・10)
- 吉家 寅雄 (18・3)
- 高橋八重子 (17・12)
- 鶴沢 敏子 (16・)
- 大戸 正徳 (16・11)
- 池谷高次郎 (17・11)
- 北海道 椎名 典義 (17・12)
- 秋田 長谷山小五郎 (18・3)
- 福島 木野内重三郎 (18・1)
- 埼玉 新井嘉一郎 (18・2)
- 東京 池谷高次郎 (17・11)

- 諫山 廉、石井豊喜、黒岩義之、但馬
- オサム、玉越俊一、塚本 哲、中村栄
- 造、原崎郁平、渡辺 功 ○神奈川
- 枝元昭典、佐藤博志、野田敏司、橋本
- 大一郎、廣瀬 毅、吉満秀雄、大貫健
- 一郎 ○長野 大日方邦治 ○静岡 幾
- 田裕男、島山 弘 ○京都 後久四郎
- 大阪 宮北 實 ○兵庫 中村治彦
- 山口 三河内健作 ○高知 藤田典
- 正 ○福岡 吉田昭司 ○熊本 興梶展
- 康

寄附者御芳名

(平成十八年一月〜三月・単位千円)

一〇〇	飛行第17戦隊会	九	秋葉 哲郎	五	澤部 泰	三	白田 智子	二	川戸 廉介	二	長金 健一	二	松尾 弘	二	松浦登士郎	二	前園 利治	一	桑原アヤ子
一〇〇	小島 健三	九	町田 乾郎	五	三本松和俊	三	江村 茂夫	二	川人 明美	二	長澤 剛	二	松永 行雄	二	松本 悦郎	二	松本 悦郎	一	清水 保
一〇〇	中台不動産(株)	八	青木 誠	五	島 龍三郎	三	尾島 成美	二	川村 一吉	二	中村 善治	二	松本 太郎	二	松本 太郎	二	関口 秀明	一	白土 四男
五〇	岡田 豊喜	八	伊藤 直之	五	島崎 政彦	三	小沼 愛	二	木村 恒雄	二	中村 好之	二	西村秀次郎	二	西村秀次郎	二	道土井圭次	一	千田洋之助
五〇	瀬島 龍三	七	岡崎 幸平	五	菅原 道之	三	下出 春見	二	木村 恒雄	二	名倉 浩	二	西川 光男	二	西川 光男	二	道土井圭次	一	高橋こすみ
五〇	山根 秋男	七	川村恵美子	五	鈴木 敏	三	高畑 隆雄	二	清野 武雄	二	西川 哲夫	二	西澤 哲夫	二	西澤 哲夫	二	光安 良一	一	竹森 敏子
二〇	大徳 利武	七	近歩 一会	五	高田 源二	三	椿 孝則	二	草刈 正一	二	西澤 哲夫	二	西澤 哲夫	二	西澤 哲夫	二	光安 良一	一	坪島 茂彦
二〇	椎名 典義	七	駒井 剛	五	高橋 房之	三	中村 竹雄	二	鯨井 優直	二	西村 芳行	二	西村 芳行	二	西村 芳行	二	宮崎喜一郎	一	田澤 昌成
二〇	福井 寛治	七	迫 博文	五	田島 幸男	三	羽鳥 忠男	二	国本 鎮雄	二	根本 常示	二	根本 常示	二	根本 常示	二	村中 一男	一	辻 外文
一七	門司 親徳	七	鈴木瞭五郎	五	多田 龍二	三	花井 博政	二	黒木長九郎	二	野田耕一郎	二	野田耕一郎	二	野田耕一郎	二	茂木 宏之	一	坪島 茂彦
一二	上尾 侑子	七	野田 誠作	五	田村 賢雄	三	平野 保	二	河野 茂義	二	長谷川 清	二	長谷川 清	二	長谷川 清	二	山西 能夫	一	飛田 靖
一〇	飯岡 哲子	七	本田 毅	五	徳田 外治	三	藤井 常男	二	小長 啓一	二	羽田 英男	二	羽田 英男	二	羽田 英男	二	山村 哲也	一	中村 猛
一〇	大谷 安信	七	山際昭太郎	五	山中浩太郎	三	古畑 昭二	二	小堀桂一郎	二	服部 武志	二	服部 武志	二	服部 武志	二	山本 健雄	一	中山達二郎
一〇	奥谷 正久	七	渡部 利久	五	名執 肇	三	星 康之	二	斎田伊佐夫	二	花見 重一	二	花見 重一	二	花見 重一	二	湯澤 一枝	一	根木 要
一〇	片岡 重子	六	角南 加男	五	花塚真知子	三	細淵 義信	二	坂詰 撰二	二	濱田 芳一	二	濱田 芳一	二	濱田 芳一	二	吉瀬善之助	一	林 聖二
一〇	斎藤 資郎	六	高田 三郎	五	布施木 昭	二	青山 一正	二	白石 正	二	早川 一喜	二	早川 一喜	二	早川 一喜	二	米田 信	一	廣嶋 文武
一〇	白川 和典	五	赤柴元五郎	五	堀江 正夫	二	荒木 精一	二	末岡 力	二	早田 亮彦	二	早田 亮彦	二	早田 亮彦	二	渡辺 悦次	一	藤本 松彦
一〇	新開 崇司	五	飯森 盛久	五	村田 俊夫	二	安藤 英雄	二	鈴木 章	二	原口 英二	二	原口 英二	二	原口 英二	二	呉 正男	一	町田 義雄
一〇	杉本 良員	五	石井 敏子	五	役山 明	二	飯島 厚	二	鈴木 淳夫	二	原田 誠雄	二	原田 誠雄	二	原田 誠雄	二	青木 信雄	一	松井 雄
一〇	千里久民男	五	磯矢 修	五	山下 一助	二	一橋 次郎	二	炭竈 三郎	二	原田 義治	二	原田 義治	二	原田 義治	二	安達 乾	一	三宅 浅男
一〇	智徳特選靈験彰会	五	板垣 正	五	山本 年男	二	井本 尚英	二	関口 昭平	二	春山 善良	二	春山 善良	二	春山 善良	二	新 忠信	一	三浦 晨平
一〇	中瀬 操	五	市川 国雄	五	吉田 文堯	二	岩澤 漸二	二	(財)全慰協	二	樋口 太	二	樋口 太	二	樋口 太	二	飯田 雍子	一	山根 敏史
一〇	難波 寿邦	五	市場 敏司	五	吉峰 泰夫	二	岩宮 満	二	佐藤 一志	二	日比野臣三郎	二	日比野臣三郎	二	日比野臣三郎	二	池本 愈	一	吉村 伍
一〇	根津 晴之	五	内山 正一	五	渡部 市郎	二	上田 恵	二	高岡 正雄	二	平田サダエ	二	平田サダエ	二	平田サダエ	二	大手 良之	一	米原 明
一〇	松本 憲二	五	岡田 豊	五	上村 貞蔵	二	上原 富次	二	高梨 久義	二	平野 重夫	二	平野 重夫	二	平野 重夫	二	大中福太郎	一	
一〇	三品 武雄	五	鍵本 栄一	五	川瀬 常道	二	大久保武司	二	高松 績匡	二	平野 三郎	二	平野 三郎	二	平野 三郎	二	大野かさね	一	
一〇	杢さびの塚繁登	五	笠松 澄子	五	酒井 弘義	二	大塚 喜衛	二	高山 友二	二	廣瀬 雍熙	二	廣瀬 雍熙	二	廣瀬 雍熙	二	大森 晋	一	
一〇	宮永 笑子	五	上村田佳子	五	重富 和男	二	岡部 尚子	二	谷尾 侃	二	深澤 欣一	二	深澤 欣一	二	深澤 欣一	二	尾関 基	一	
一〇	山本 卓眞	五	川人 盛幸	五	藤田 幸生	二	岡本 久吉	二	谷川 徹	二	福田 充	二	福田 充	二	福田 充	二	小田 兼裕	一	
一〇	吉柳きよ子	五	菊地 嘉明	四	森 力男	二	小野寺 貢	二	玉野 康	二	船水ちか子	二	船水ちか子	二	船水ちか子	二	河原田七郎	一	

協会への御芳志誠に有難うございました。

神崎 夢現
桑原アヤ子
小泉 朋美
小熊 一敬
清水 保
白土 四男
関口 秀明
千田洋之助
高橋こすみ
竹森 敏子
田澤 昌成
辻 外文
坪島 茂彦
飛田 靖
中村 猛
中山達二郎
根木 要
林 聖二
廣嶋 文武
藤本 松彦
町田 義雄
松井 雄
三宅 浅男
三浦 晨平
山根 敏史
吉村 伍
米原 明

平成17年度事業報告

1、慰靈事業

(1)第26回陸海軍特攻隊合同慰靈祭

平成17年3月30日靖国神社挙行した。参加者は、来賓37名、遺族54名、会員等235名であった。

慰靈祭終了後、市ヶ谷の私学会館において協会の年次総会を開催し、平成16年度事業及び収支決算に関する報告が行われた。

(2)第54回特攻平和観音年次法要

平成17年9月23日世田谷山観音寺に於いて、同寺主催の年次法要が営まれた。参加者は来賓30名、遺族54名、会員等272名であった。

(3)神風特攻発進61周年慰靈祭

平成17年10月25日フィリピン・ルソン島のマバラカット市で挙行された慰靈祭に慰靈団を編成(27名)し参列した。日本人出席者は当協会ほか3団体と現地在住者を含め約150人であった。その後、慰靈団はコレヒドール、モンテンルバ、セブ、レイテ各地を慰靈巡拝した。(10月24日～29日)

(4)各地慰靈祭への協賛

ア 代表者派遣

慰靈祭名	場所	参加者
3月26日 震洋会	靖国神社	藤田理事
4月4日 予科練雄飛会	靖国神社	菅原理事長
4月6日 都城特攻隊	都城市	菅原理事長
4月7日 第二艦隊	枕崎市	藤田理事
4月8日 鹿屋特攻隊	鹿屋市	藤田理事
4月10日 万世特攻隊	加世田市	菅原理事長
4月22日 春季例大祭	靖国神社	菅原理事長
5月3日 知覧特攻隊	知覧町	菅原理事長

2、その他の事業

(1)古野一正、落合重温両会員から特攻勇士之像に、副碑を寄贈したいとの申し出があり、6月28日靖国神社の神官により勇士之像前に於いて除幕、清祓の儀を行い礎石を献納した。会長以下理事、評議員、遺族、礎石関係者等30人が昇殿参拝後列席した。

(2)機関紙「特攻」62号～65号を発行、会員その他に配布した。

(3)特攻平和観音堂改修は平成15年秋から始められたが、腐食等の範囲が意外と広くこのため5月に第2次寄金を会員等に募った。その結果、620万円余りの寄進(第1次437万円)があり9月に改修が完了した。

(4)今年度末の会員数は三、五五二名あった。退会者二六一名、入会者一四六名で一一五名減少した。会員の内訳は、陸軍関係者二、四五〇名(六十九%)、海軍関係者七〇八名(二〇%)、一般三九四名(十一%)で、一般会員が三十五名増加した。

以上

イ 供花料送達

5月30日	春季慰靈祭	千鳥が淵墓苑	菅原理事長
6月11日	義烈空挺隊	沖繩・摩文仁	杉山理事
8月10日	慰靈協	靖国神社	菅原理事長
10月18日	秋季例大祭	靖国神社	菅原理事長
同	秋季慰靈祭	千鳥が淵墓苑	菅原理事長
10月30日	海原会	陸自武器学校	小倉評議員
11月10日	明野忠魂塔	陸自明野駐屯地	深山評議員
11月13日	回天	山口・大津島	小灘評議員
11月13日	若潮会	靖国神社	菅原理事長
4月10日	荒鷲之碑慰靈祭	空自熊谷基地	
9月18日	原ノ町飛行場戦没者慰靈祭	原ノ町	
10月9日	水戸つばさの塔慰靈祭	ひたちなか市	

収 支 計 算 書

(平成17年1月1日から平成17年12月31日まで)

(第13年度)

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 額	備 考
I 収入の部				
1 年会費	10,000,000	9,488,000	512,000	
2 基本財産運用収入	2,670,000	2,481,380	188,620	
3 特別会費収入	4,500,000	4,907,700	-407,700	
4 寄付金1収入	1,500,000	1,266,000	234,000	
5 寄付金2収入	0	6,204,300	-6,204,300	注1
6 懇親会費収入	1,300,000	1,280,000	20,000	
7 出版事業収入	300,000	676,000	-376,000	
8 雑収入	100,000	96,632	3,368	
当期収入合計(A)	20,370,000	26,400,012	-6,030,012	
前期繰越収支差額	23,662,000	24,337,006	-675,006	
収入合計(B)	44,032,000	50,737,018	-6,705,018	
II 支出の部				
1 管理費				
人件費	4,770,000	4,719,200	50,800	
旅費交通費	200,000	185,954	14,046	
通信費	60,000	180,807	-120,807	
会議費	300,000	387,493	-87,493	
事務所経費	810,000	807,600	2,400	
消耗品雑費	500,000	470,140	29,860	
リース料	200,000	201,600	-1,600	
租税公課	70,000	70,000	0	
予備費	150,000	0	150,000	
2 事業費				
慰霊祭等事業費	6,000,000	12,365,885	-6,365,885	注2
史実調査研究費	100,000	6,480	93,520	
資料収集費	100,000	19,158	80,842	
出版事業費	30,000	234,005	-204,005	
広報活動費	4,700,000	4,533,355	166,645	
予備費	400,000	0	400,000	
当期支出合計(C)	18,390,000	24,181,677	-5,791,677	
当期収支差額(A) - (C)	1,980,000	2,218,335	-238,335	
次期繰越収支差額(B) - (C)	25,642,000	26,555,341	-913,341	

注1. 世田谷特攻観音堂の改修が大幅に増え、計画外に会員等から改修費の第2次募金を行ったため。

注2. 改修費の第2次募金額を世田谷山観音寺に寄進したため。

平成18年2月17日

監 事

志賀 昭夫 印

監 事

河集院 雅英 印